

流布して、我同胞を安んずべし。謂ふべきことはこれまでなり。

幽明處を異にすなれば疾く立歸れ。」と促がさる、ほど、一層名残は惜まれて、千代太は立ちも兼ねたりき。

父は聲を激して、

「父が見度くば成長し、早く軍艦に乘組みて、討死してまた來れ！」と謂はれて返さむ言も無く、千代太は黒男の背に負はれて、しをくと立懸れば、姫も別の惜まるゝに、涙の聲を曇らし給ひ、

「和子自らよりも土産一つ參らせむ。」とて、二顆の寶玉を配戴き、

「さきにはこれを奪はれたれば、身體自在ならざりしが、今こそ自分の本事を見せむ。やよ、確に聞け、骨なく、一定の心もなく、天下無用の長物ども疾く人類の列を出でよ、鰈は汝等を養ふべし。」

と寶を念じて呪し給へば、二百の清兵また、く間に、海月とこそは變じてけれ。

父子別離の悲みも、これにぞ千代太は微笑みき。

さらば。さらば。さらば。さらば。

告別の聲も幽になりぬ。

千代太は海上に浮出でたり。恰も其處に日御旗を押し立てせる軍艦あり。これが手に救取られて

一日程を航海しつ。何處やらむ山水の明媚なる陸に近よるトタンずどんと一發の花火を打上げ、一流の旗に日本大勝利と記したるが颯と中空に翻る瞬間、愕然として驚き覺むれば、枕頭に母坐れり。千代太は病院の臥床に横臥しつ、男女の死骸もまた渠とともに救はれて、他の旅客とともに數十人、千代太を看護せるが、其蘇生れるを見たる時の渠等の歡喜は、曩に救助船に逢ひたりし時の歡喜よりも、更に大なる歡喜なりき。めでたし。

譬
喻
談

「へい、唯今。」

使ひに遣りし下男今歸り来て、主人の前に畏まれり。主人は机の上の時計を視め、

「おや、五時だ。もう間に合はないから其端書は要らない。」

と勃然として彼方を向く。下男は頻に揉手しながら、

「へい、何うも相済みません。御勘辨なすつて……」

主人は不興氣に、

「(ト)の便で出さないと、翌朝の(イ)便まで後れつちまふ。其では都合が悪いから、丁度三十分前、左様だ、四時半に買ひに遣つたのだ。賣捌所は近所なのに、今まで何をして居た。」

と以ての外の色なり。下男は恐るゝ、

「え、つい其何でございます。直ぐ端書を求めまして、さつさと歸つて参りますと、旦那様、横町の角で若い者が二人、血塗になつて取組合ひ、死ぬわ、殺すといふ騒なんで、恐がつて仲裁

する者もございませんで、私があつかひまして見事に手打をさせました。」

下男は譽められる目算なりし。主人は案外にも眉を顰め、

「此奴、餘計なことをする。」

「いえ、餘計なことではございせん。」

「ナニ餘計なことがないものか。喧嘩の仲裁をしたつて、己の、汝の主人の、用を缺いて何にな

る。」

と怒解けず。我が意の如くならざる者は召使ふも無益なりとて、即時下男を解傭せり。

下男が暇出されて、出行きたる後、下婢は今届きたる一通の封書を齎し來りぬ。こは東京に遊學せしめつつある、主人の息子よりの來信なりき。主人は一披讀して赫となり、直ちに細君を呼びて聲荒く、

「悴は今日限勘當するぞ。」

細君は吃驚し、

「え、御勘當遊ばすとえ、大變ですな、何咎で。」

血相變ふれば落着拂ひ、

「己の思ふ様にならぬ奴は悴だつて何にする。今度の試験に落第した濟みませんといつて寄越し

「だから其で未練なく勘當するのだ。」

恰も敝履を捨つるが如し。細君は堪へ兼ねて座を進み、

「たつたそれしきに御勘當とはまあ何事でございます。これが何も放蕩をしたといふではなし。」
と皆まで言はせず言を遮り、

「いや、放蕩はしても可い、學問に出してあるのだから何がなしん／＼及第すれば其で可いのだ。入費は構はぬ、些放蕩をしたから金子を下さいと謂へば、随分送つて遣る。學問の邪魔にさへならなければ、女郎買をしようが藝者狂をしようが、そりや何も彼奴の勝手だ。しかし己の本意に背いて、落第したから容赦はせぬ。向後ふつり學資金は送らない。」

と一旦口へ言出しては我意を通さねば措かぬ氣象、動く氣色は見えざりけり。

細君は、餘りのことに涙ぐみ、

「そりや貴下餘りです。」

「いや一度いうたことは決して變へぬ、何でも己が口から出たことは、此家だけには法律だと心得ろ。」

と接穂なく言放てり。細君は返すべき言葉もなければ、折を察て取なさむと、爾時は黙して止みぬ。主人もしばらく黙したるが、俄に、

「うむ飯を呉れる、腹が空いた。」

と晚餐を命じたり。膳はやがて主人の前に据ゑられぬ。主人は膳の上をじろりと見るより、また

忽ち機嫌を損じ、

「何だこりや鮪の刺身だな。こら！晩には牛肉にしろといつて置いたに、こりや何うしたんだ。」

細君はゴクリ、「はい。」

「(はい)では無い。誰の指揮で此様なものをつける。」

「はい。」

「え、(はい)では無い哩。誰がこんな指揮をした。」

と威丈高。細君はおど／＼しながら、

「はい。」

「また(はい)か。」

「はい。」

「何だと！」

「はい。おや、御免なさいまし。貴下は牛とおつしやいましたが、先刻魚屋が参りまして、鮪がある」と申しますから、豫て御好ではございますし。可からうと存じて造らせて置きましたがお

氣に召しませんでしたか、誠に悪うございました。」

主人は少しく面を和げ、

「ふむ、己を喜ばせようと思つてした事か。イヤ其志は嬉しいが、方法が宜しくない。己が喰ひたいと思へばこそ、牛にしろといつたんだ。好物な物でも時に因ると欲く無いことがある。何と、汝にも其様なことがあらうでは無いか。」

「ございますとも、貴下。」

「それ見ろ、だから何もむづかしい事無い。萬事己のいひつけ通りにすれば其で可いのよ。自分嫌なことを斯うせい如彼せいと謂ふ道理は無いから、總ていふ通りにさへ守つてしてくれれば、其で己の思ふ様になるといふものだ。何でもこれからは、何時も口癖にいふこつたが、己の思ふ通りにしなければ不可ぞ。宜しいか、今日のことは許して遣る。」

主人は心解けて晚餐を終れり。さて茶を煎じて内證談話、

「やがて盆にもなつたら、下女に浴衣地を買つて遣れ、而して小遣も多分に氣を着けて遣んなさい。」

細君は感心したる顔色にて、

「ようお氣が着きました。嘸喜ぶでございませう。」

聞くより主人は苦い顔、

「ナニ喜ぶ、何も喜ばせて奉公人の機嫌を取るにやあ當らない。」

「でも貴下。」

「い、や、喜ぶなんて餘計なことだ。お、浴衣地と謂へば此浴衣な、汗になつたから、洗つてくれ、翌日洗へば晩までには乾くだらう。」

細君は頷き、

「え、乾きますとも。」

「可し違ひないな。何でも己の謂ふことは一々掟だと心得ろよ。」

主人は何に依らず、己が意の如くならむことを欲するなり。

二

世にもの不如意なるほど不愉快なることはあらざるべし。本篇の主人公は、愉快に生活せむことを唯一の目的とせる人物なり。然れば意の如くならざるよりして、官職を辭し、朋友と絶せしこともあり。いままた下男を解備し、はた一人の息子を棄てぬ。餘す處は唯細君と下婢とのみ。但渠は巨多の富を有せり。諺に人間萬事金子なりといふ、其金子はあれども、なほ何事も心に任

せず、要するに渠は人をして己の如くならしめむと欲して、然もこれを得ざるなり。得ざれども求めて休まず、そも如何にしてかこれを得む。

翌日は朝來雨降る。頃日の蒸暑きに轉た天候の不如意なるを歎きし主人公は、これがために苦熱を洗ひて、聊か意に満ちたるものの如く、快然として時を消せり。

晩景散策に出づるとて、豫て命じ置きし浴衣の洗濯したるを持來るべしと、細君にいふ。然るに細君は氣の毒さうに、

「も一枚のを召して行らしつて下さいまし、まだ彼の洗濯は出來ません。」

主人は直ちに眉間に筋、

「何だ、出來ない、出來ないといふは何ういふ理窟だ。」

細君はびく／＼もの、

「だつても貴下、朝から降通しでございますもの、洗ひましても乾かないだらうぢやございませんか。」

とは道理なる言譯なり。されど主人には道理とは聞えず、

「降らうと降るまいとそりや我の構つたことでは無い、唯我のいふ通りに洗濯をしとけば可い、骨を盗みやがつて、このひきすりめ。」

と言置る。餘りなれば腹を立て、

「そんな御無理をおつしやつたつて、どしや降でしたもの、しやうがございません。」

と細君も少し勃氣。主人はます／＼息巻荒く、

「洗つた上で雨が降れば炭火で以て乾かすが可いや。」と途方もないことを謂ふ。

細君はひたと呆れ、

「いかなこつても、其様なことをしようものなら、一時に炭の一俵も發火さねばなりません。」

「一俵でも、二俵でも、乃至また三俵でも、浴衣の乾くほど發火すこつた。其手段は何であらうと、唯我の思ふ様に浴衣を洗濯しとけば可いのだ。昨日もいつた通り、我の口から命じたことは、

此家だけには法律だ。法律を犯した奴は、立處に罰して遣る。」

只ばかりありて主人公は遂に細君を離縁しつ。噫いかなれば斯く不如意なる、おのれ意の如くならざるべからざる位置も財産もありながら、と思届して、ついうと／＼と轉寢したり。

下婢はこれを見て搔卷を持來り、

「もし／＼、旦那様。お風邪を召しては不可ませぬよ。」

いひながら靜にこれを着懸けしが、なほ心着かで眠りたり。下婢は再び枕を運び、ソト主人の頭を擡げて、下に搔込まむとなしけるに、主人は思はず眼を覺し、それと見るより怒の面色、

「えい何をする！折角氣持よく寝て居たものを餘計なことをして覺しやあがる。誰が枕をさせると謂つた。」

思懸けなき腹立に、下婢は案外の眼を睜り、

「はい、誠に悪うございました。私はまた旦那様が轉寢を遊ばして、お風邪を召してはなりませんぬと憚りながら存じまして。」

いはせも果てず、睨み着け、

「風邪をひくより起される方が我あ嫌だ。汝が何を知つてるもんで、それとも我の心を見抜くことが出来るか。出来たら言はぬことでもするが可い、それが出来ない分際で、何故獨斷でものをする。向後要らぬ世話ア焼くと許さぬぞ。」散々に叱り飛ばしぬ。

斯ることの度重なるにぞ、下婢は居た、まるで遁出したり。

主人は獨身者となり終りつ。さて其不如意なることは以前よりも一層甚だし。譬へば米を炊ぐにさへ、修鍊と、經驗と、はた努力とを要するなり。渠はじめ少かりし時は、ものごと皆不如意なりき。常に金子あらばと思ひたり。妻子あらば、下婢あらば、下男あらば満足ならんと思ひたり。然るに勤勉の結果望足りて、嘗て希ひしものは皆これを得たり。然も不如意なること依然として舊の如し。故にまた元の奎阿彌となりぬ。更に一段不如意なるを奈何せむ。

主人は再び下婢下男を要しぬ。よりて新たに雇入れてこれに用をなさしむるに、また意の如くなるはなし。斯の如き者は何かせむと、追出だして再三雇代へたるが、何時も氣に入るはあらざりき。

斯くて家來を代ふることの餘り度々になりしかば、果は慶庵も呆れ果てて、其周旋を辭したりけり。主人もまた、慶庵は無益なりとして、自から家來を選抜するの、最も如意なるべきを知りつ、めがねに叶ふ者あらば召抱へむと、捜しに出でぬ。

三

家來を捜しに出でたる主人は、行く／＼心に謂へらく、「一體己に優つた者が、己の奴隸になる理窟は無い。優勝劣敗の世の中だ。己の奴隸になる者は、皆な己より劣等な奴等だ。其癖、生意氣に氣轉を利かせるから、得て仕損ひばかりする。何だと謂ふと、奴等相應に智慧があつて、自分といふ役介者を働かせようとするから起る。元來人の心中を見透かす眼力も無い癖に、此方の謂はぬ事を先方から察してするのが間違つてる。試に見たが可い、彼の鐵砲は何うだ、鐵砲は的を射るものに違ひないが、要らざる人間といふ心のある動物が、手でこれをもつて命中ようとするから、手が震へたり、斜視眼をしたりしてあたらない。もし(鐵砲をあてる。)といふ器械が

あつて射つた日には、きつと百發百中だらう。馬なんぞも其通り、騎者が止めようとすれば止まり、飛ばさうと思へば飛ぶ、こゝで妙だ。これかもし、我意を出して、騎者の命に従はなかつたら不如意極まる。して見ると主人のいひつけに従つて、何でも彼でも自分といふものを忘れて働くのが欲しい。詰りは斯うだ、飯を炊くにも、使に行くにも、すべて器械的にやつて、己の手足の代用をする者は居ないか知らん。何がなしに我のために働いて自分といふ者を働かせないのが雇ひたい。」

と斯るむづかしき註文しながら漫歩行したる主人公は、餘り深く考へたるため、思はずも我を忘れて、昔の哲學者ならなくに路傍の川に陥りたり。

泳を知らぬ人物ならねど、不意に面くらつて、したゝか水を飲み、眞蒼になりてやう／＼這上り、極悪氣に見廻せば、幸ひ四邊に人も無し。唯一人汀に立ちて、ものおもはしげなる小僧あり。先刻より其處に居たらむが、溺るゝを見て助けむともせず、はた今水を吐きなどするを、見ながら見ざる如くにて、見舞うてもくれざるにぞ、主人は其薄情なるを怨むより、寧ろ怪むの念起り、身震ひしながら傍に進み、

「小僧様何をして居るのだ。」

唐突ながら問懸けたり、小僧は冷然として振返り、

「ちと考へて居ります。」

「は、あ、イヤ何を考へて居るのか知らん、今我は此川へ落こちたんだが。」

といへば小僧は冷かに、

「なるほど左様でございましたか。」

「これは訝しい、和郎は先刻から其處に居たぢやあないか。」

「はい、居ました。」

「それぢやに落ちたのを知らないとは？」

「旦那がお落ちなすつたのはよく見て居りました。」

と平氣な顔、主人は急込み、

「見ながら知らぬ顔は餘りだ。」

小僧は殆ど意に介せず、微笑みながら、

「左様な閑はございませぬ。些考へて居りますので。」

これを聞ける主人公は、小僧が人を見殺にせむするまで思案に沈むはそも／＼いかに重大の件なるべきと聞きたくなり、

「して其思慮事といふのは何だな。」

「他でもございませぬ、私は田舎の者で當地へ參つて奉公をいたしますが、これまで何軒歩いても皆氣に入らないつて追出してしまひます。餘り度々だから慶庵でも愛想を盡かして、最早世話をして呉れません。一體まあ何うしたら主人の氣に入るだらうと、其を思慮て居りますが、何たつて世の中に主人ほどむづかしいものはございませぬ。で、可い思慮は出ませぬから誰も雇つてくれ人もあるまい、しやうがないから此川へ身でも投げようかと思ふんです。はい、それですもの、旦那、人の川へ落ちたくらる構つちやあ居られません。」

主人は何となく感深し。「うむなるほど。」

小僧は好き相談對手を得たりと思ひ、

「何うでせう旦那、何か主人の氣に入るといふ工夫はございますまいか。御存じなら教へて下さる。」

問はれて主人は無雜作に、

「うむ先づ何故氣に入らぬかといふことを研究して懸ることだ。」

「へい。」

「何でもそりや餘計なことをするからだらう。」と自分の思ふことを謂ふ。小僧には少しも解らず。餘計なことつて何でございます。」

主人は儼然として講師の理科を説く如く、

「さればさ、主人の使に出て、道で喧嘩の仲裁をして、其がために用を缺いたり、折角可い氣持で寢て居る者を夜着を被せようとして起したり、こりや皆人よかれと思つてする餘計なことだ。萬事斯ういふ風だととても氣に入る氣遣はないな。」

小僧は妙な顔をして、

「へい、でもね、決して左様なことはいたしません。はい、私は至極正直者で、何だつても旦那主人のいひつけないことはいたしません、しかし其が向うの氣に入りませんよ。」

「はてな、そりや何ういふ理由だらう。」と主人は訝る。

「主人の何時もいひますには、一々指圖をしないで、自分の才で遣れば可いに、埒の明かぬ、氣の利かない一體馬鹿正直だから不可いつてね、私の正直なのを馬鹿にします。」と小僧は不平なり。

主人は思ふ壺なれば、「此小僧なかく談せるな。」と頼母しく、「う、おもしろい、世間の奴は不殘此小僧の取柄を知らぬと見える、馬鹿が氣に入つた、今自分の事を思慮てて我のあぶくを知らぬ顔が古今無類と難有い。これから人助けをしようなんて、端書の使を棚へあげるやうな憂慮はない。」と心に領き、

「小僧我が雇つて遣らう。」

小僧は大きに喜び勇み、

「や、旦那がお使ひ下さいますか。」主人、「む、使つて遣る。」

「また氣が利かないなんて追出されやしないだらうか。」

と呟くが如くにいふ。主人、「何の、氣が利かれて堪るものか。」

四

主人は自から擇びし小僧なれば、渠に對するの處置は未だ嘗てあらざりしほど寛悠なりき。

小僧もまた至つて重寶なるものにして、走使は謂ふも更なり。飯も炊き、茶も拵へ、家事萬端何一つこれが出来ぬといふことなし。然れども主人が用を命ぜざれば、僵れたものを起さむともせず、單唯々として命を奉ずるのみ。

譬へば晝食の時、小僧は問ふ、「旦那お茶は何にします。」

主人は今業務を取りて面倒なれば、「何にでもして置けさ。」小僧、「何にでもとおつしやつた

つて、旦那の好きなものは、私には分りませんな。へい、何にでもとおつしやれば私の好きなものを買つて來ますよ。」

主人は笑ひながら、「手前の好きなものとは何だ。」

「は、は、は、鰻井がよろしうござい。」

「え、驕つてくれるな、途方もない。」

「そら、御覽なさい、だから何を買つて參りますとお問ひ申すんです。」

主人は止むを得ず銅貨を投出し、

「それで豆府でも買つて來な。」

小僧は「はい」と飛んで行き、直ちに豆府を購ひ來り、

「旦那買つて來ましたが、何うしませう。」

「何うするもんか喰ふんだあ。」

「そりや召食るは解つてますが、煮ますか、但奴にしますか。」主人、「煮な。」

「へい、醬油は凡そ何の位入れませう、而して鯉節も入れるのですか。」

主人は舌打して、「チヨツ懊惱いな。氣の利かない。」

と何心なく呟けば小僧は吃驚して顔色變へ、

「そら、萬歳樂々々。」と耳に蓋して踞まる。

「何だ、其狀は？」といひながら自分がいへる「氣が利かない」に心着き、なるほど小僧の禁物と

主人は思はず噴出だしぬ。

一切が斯る有様なれば、用に立たぬかの如くなれども、主人の命を奉ずるには犬と猿との伶俐と敏捷とを兼備へり。さりとして主人がこれを動かし、且つ監督するにあらざれば、火を吹くことをもなさざるなり。要するに此の小僧は意識を備へたる人間にあらずして、小僧といふなる無心の器械が假に人間になれるなるべし。これしかしながら主人公が註文通りの代物にて所謂如意のものたらむ。

或時主人は小僧を呼び、「翌日はな、柴又村といふ處まで行つて來ねばならないぞ、可いか、路程は彼此二里もあるし、暑い時分だから朝の中早く行つて歸る目算にしろ。」と豫め言渡しぬ。

小僧は正直者、畏りて命を奉じ、翌朝眼を覺ますや否すやに、何等の用事をも聞くに及ばず、宙を飛んで、往復四里半もあらむす道を、三時間ばかりに行きて歸れり。

歸りて見れば、主人は疾くより閨を出でて、小僧を使に遣らむものと、頻りに尋ぬる處なりき。今歸り來るを見るより、

「小僧何處へ行つて居た。だから昨夜いつて置いたに、遊んで歩行いて仕様がなぞ。」

と極めつくれば、小僧は澄した顔色にて、

「へいもうちやんと行つて參りました。」

主人は訝かり、「何處へ？」

「へい柴又へ。」とけろりとして居る。

主人は南無三と呆れ返り、

「用を聞きもしないで手前何をしに行つたんだ。」

と驚けども小僧は平然自若として驚かず、却つて此問を怪む如く、

「だつて昨晚柴又へ行つて來いとおつしやつたから……」

と生眞面目なり。主人はイヤハヤといつたきり、深くも咎むることを得ず、苦笑一番黙して休めり。

これをしも不如意ならずとせむか、小僧以前の者にはそも何を以つてか不如意といへる。蓋し此小僧は主人公がめがねにて、自から雇入れたるものなれば、またしてもこれに對して不平、不満を鳴らさむか、さるは自から欺く様にて、己が心にも恥かしければ、さすがの主人も堪忍して、「イヤ萬事斯うありたいものだ。」と負惜みの様な申譯を、其欲心にいひつつあり。知るべし何事も人に託せず、自分にこれを行ふは、満足するに最もよき方法なるを。何となれば器械的小僧を用ゐるは、主人が我が手足を働かすと多く異りたることのなければなり。

古人の句に、(蚊帳を出てまた障子あり夏の月)人の欲には際限なし。主人豈この小僧を以て足

れりとせむや。

五

一夜雲黒く風白き時なりき。主人は所用ありて外出し、亥の刻過ぎて歸りしが、思ふよしありて小僧を呼び、

「汝眠いだらうが、何だか物騒な晩だから夜巡がして貰ひたい。」

小僧はいつものながら元氣よく、「へい、畏りました。」

「待て、處でな、今己が他から歸つて來ると、裏の垣根の處に胡散な奴が立つて居た。此奴は怪いと引捕へて見ると、何が隣村の夜巡よ。可しか、警ひ夜巡の職分でも、餘計な處へ入込んで來ると却つて人に見咎められる。一ヶ村の夜巡が一足でも隣村へ踏込むと、最早夜巡ではない胡散な者だ。汝も左様だぞ、我が家の夜巡なら家の周圍ばかり巡れば可い、要らぬ處へ踏出すと却つて人に怪まれるぞ。」

と嚴かに言渡せり。正直者の小僧は謹みて命を奉じ、其ま、戸外へ飛出だして家の周圍を見巡り居れり。

三十分を経たりければ、主人も、「もうよし」と内に呼込みしが恰も爾時何やらむもの焚ゆる

句せり。

「や、木臭いな何であらう。」

主人の咄くを聞いて小僧は得意顔に、

「へい、誰だか其四五軒さきへ放火をして居る奴がありましたつけから、もうそろく焚出して可い時分です。」

主人は反返るほど打驚き、

「え！そいつは異事だ。汝また見て居たか。」

「へい見て居ましたがね、御家でないから黙り！」

と莞爾々々して居る。主人は蒼くなり、

「放火を見て居る夜巡があるものか、風はあるし、大變だ。」と周章て騒ぐ。

小僧は冷然として、

「だつてね、うっかり咎立をすると、此方が盜賊に怪まれませうと思つて。」

「あ、途方もない、此段になつて理窟も何もあるものか。氣の利かないにも程があらあ！」

小僧は縮み上り、

「そら出たぞく、今度は堪忍しさうもない。」

と恰も煙の消ゆるが如く朦朧として消失せたり。此に於て乎主人が理想の、否寧ろ妄想の所謂(如意)なるものは滅し去れり。

火は漸次に燃來りて、主人の家も危かりしに、嘗て暇を出だしたる女房をはじめとし、下婢下男の輩等まで、舊主人のことを忘れず、數人駈附けて危急を救ひしにぞ、あはよく類焼を免れたり。

斯りしかば主人公は己が如意なりとせる小僧より、不如意なりと思へりし者の遙かに優りて如意なるを悟りつ、こゝにはじめて満足しぬ。

然り、人生何かよく如意なるべき。たとひ衣食住盡く意に満つるとも、天氣風雨の不如意なるあり。風雨もまた心に協ふとせむか、更に天壽の不如意あり。こは奈何ともし難かるべし。宇宙に圓滿無缺なるもの造物者を措きてまた他に何かある、然れば濫に意の如くならむことを欲する者は、語を替へてこれを造物者たらむことを希ふものといはざるべからず。諸子靜に思へ、これ到底所詮、出來得べきことにはあらざるなり。然れども人生欲もまたなくむばあらず、欲なきものは得て何をかなさむ。要は唯欲を節するにあるなり。もしそれ節する能はずして、如意を欲して休まざらむか。可し、我に一法あり。出來得べくむばこれを成せ。曰、

唯鼻欲飽くことなき、我といふ者を、斷然此世より取去りて、圓滿なる天堂に生れ行き、如意

寶珠を抱くにあるのみ。

義
血
俠
血

越中高岡より俱利伽羅下の建場なる石動まで、四里八町が間を定時發の乗合馬車あり。賃錢の廉きが故に、旅客は大抵人力車を捨てて之に便りぬ。車夫は其不景氣を馬車會社に怨みて、人と馬との軋轆漸く太甚きも、才に顔役の調和に因りて、營業上相干さざるを裝へども、折に觸れては紛亂を生ずること屢なりき。

七月八日の朝、一番發の馬車は乗合を揃へむとて、奴は其門前に鈴を打振りつゝ、

「馬車は如何です。無茶に廉くつて、腕車よりお疾うござい。さあお乗なさい。直に出ますよ。」

甲走る聲は鈴の音よりも高く、靜なる朝の街に響渡れり。通過の婀娜者は歩を停めて、

「一寸小僧さん、石動まで若干金？なに十錢だとえ。ふう、廉いね。其代り遅いだらう。」

澤庵を洗立てたるやうに色揚したる編片の古帽子の下より、奴は猿眼を晃かして、

「物は可試だ。まあ御召しなすつて下さい。腕車より遅かつたら代は戴きません。」

恚言ふ間も渠の手なる鈴は絶えず噪ぎぬ。

「そんな立派なことを云つて、屹度だね。」

奴は昂然として、

「虚言と坊主の髪は、いつた事はありません。」

「何だね、洒落臭い。」

微笑みつゝ、女子は恚く言捨てて乗込みたり。

其年紀は二十三、姿は強ひて満開の花の色を洗ひて、清楚たる葉櫻の綠淺し。色白く、鼻筋

通り、眉に力味ありて、眼色に幾分の凄味を帯び、見るだに涼しき美人なり。

是果して何者なるか。髪は櫛巻に束ねて、素顔を自慢に胭脂のみを點したり。服装は、將某の

駒を大形に散したる紺縮の浴衣に、唐繻子と繻珍の晝夜帯をば緩く引掛に結びて、空色縮緬の蹴

出を微露し、素足に吾妻下駄、絹張の日傘に更紗の小包を持添へたり。

舉止俠にして、人を怯れざる氣色は、世磨れ、場慣れて、一條繩の繫ぐべからざる魂を表せり。

想ふに渠が雪の如き膚には、剗青淋漓として、惡龍焰を吐くにあらざれば、寡くも、其左の腕に

は、雙枕に借老の名や刻みたるべし。

馬車は此怪しき美人を以て満員となれり。發車の號令は割るゝばかりに姑く響けり。向者より待合所の縁に倚りて、一篇の書を繕ける二十四五の壯俊あり。盲縞の腹掛、股引に汚れたる白小

倉の背廣を着て、護謨の解れたる深靴を穿き、鍔廣なる麥稈帽子を阿彌陀に被りて、踏踏きたる膝の間に、茶褐色なる渦毛の犬の太く逞きを容れて、其頭を撫でつゝ、専念に書見したりしが、此時鈴の音を聞くと齊しく身を起して、飄然と御者臺に乗移れり。

渠の形軀は貴公子の如く華車に、態度は森嚴にして、其裡自から活潑の氣を含めり。陋げに日に顰みたる面も熟視れば、清臚明眉、相貌秀でて尋常ならず。畢竟は馬蹄の塵に塗れて鞭を揚るの輩にあらざるなり。

御者は書卷を腹掛の衣兜に收め、革紐を附けたる竹根の鞭を執りて、徐に手綱を捌きつゝ、身構ふる時、一輛の人力車ありて南より來り、疾風の如く馬車の側を掠めて、瞬く間に一點の黑影となり畢んぬ。

美人は之を望みて、

「おい小僧さん、腕車より遅いぢやないか。」

奴の未だ答へざるに先ちて、御者は吃と面を抗げ、微になれる車の影を見送りて、

「吉公、手前また腕車より疾えといつたな。」

奴は愛嬌好く頭を搔きて、

「應、言つた。でも然う言はねえと乗らねえもの。」

御者は黙して頷きぬ。忽ち鞭の鳴ると共に、二頭の馬は高く嘶きて一文字に跳出せり。不意を吃ひたる乗合は、座に堪らずして殆ど轉墜ちなむとせり。奔馬は中を駈けて、見る／＼腕車を乗越したり。御者はやがて馬の足搔を緩め、渠に先を越させぬまでに徐々として進行しつ。

車夫は必死となりて、やはか後れじと焦れども、馬車は恰是月を負ひたる自家の影の如く、一歩を進むる毎に一步を進めて、追へども／＼先じ難く、やう／＼力衰へ、息逼りて、今や燈れぬべく覺ゆる比、高岡より一里を隔る立野の驛に來りぬ。

此街道の車夫は組合を設けて、建場々々に連絡を通ずるが故に、今此車夫が馬車に後れて、喘ぎ喘ぎ走るを見るより、其處に客待せる夥間の一人は、手に唾して躍り出で、

「おい、兄弟しつかりしなよ。馬車の畜生如何してくれう。」

矢庭に對曳の綱を梶棒に投懸くれば、疲れたる車夫は勢を得て、

「難有え！頼むよ。」

「合點だい！」

それと云ふまゝ、挽出せり。二人の車夫は勇ましく相呼び相應へつゝ、卒に驚くべき速度をもて走りぬ。やがて町盡頭の狭く急なる曲角を争ふと見えたりしが、人力車は無二無三に突進して、遂に一步を抽きけり。

車夫は諸聲に凱歌を揚げ、勢に乗じて二歩を抽き、三步を抽き、益々馳せて、輕迅丸の跳るが如く二三間を先じたり。

向者は腕車を流眊に見て、最も揚々たりし乗合の一人は、

「さあ、やられた！」と身を悶えて騒げば、車中いづれも同感の色を動して、力瘤を握るもあり、地踏鞴を踏むもあり、奴を叱して切りに喇叭を吹かしむるもあり。御者は縦横に鞭を揮ひて、激しく手綱を搔繰れば、馬背の流汗滂沱として掬すべく、轡頭に嚙出したる白泡は木綿の一袋もありぬべし。

有恁ほどに車體は一上一下と動揺して、或は頓挫し、或は傾斜し、唯是風の落葉を捲き、早瀬の浮木を弄ぶに異ならず。乗合は前後に俯仰し、左右に頽れて、片時も安き心は無く、今にも此車顛覆か、但は其身投落さるゝか。孰も怪我は免れぬ所と、老いたるは震慄き、若きは凝瞳になりて、唯一秒の後を危めり。

七八町を競走して、幸に別條無く、馬車は辛くも人力車を追抽きぬ。乗合は思はず手を拍ちて、車も撼くばかりに喝采せり。奴は凱歌の喇叭を吹鳴して、後れたる人力車を壓きつゝ、踏段の上に躍れり。獨り御者のみは喜ぶ氣色も無く、意を注ぎて馬を勞りく駈けさせたり。

怪しき美人は満面に笑を含みて、起伏常ならざる席に安んずるを、隣なる老人は感に堪へて、

「お前様どうもお強い。能く血の道が發りませんね。平氣なものだ、女丈夫だ。私なんぞは徹頭徹尾意氣地は無い。それも其理かい、もう五十八だもの。」

其言の訖らざるに、車は凸凹道を踏みて、がたくりと跌きぬ。老夫は横様に薙仆されて、半禿げたる法然頭はどつさりと美人の膝に枕せり。

「あれ、危い！」

と美人は其肩を腕と抱きぬ。

老夫は勃起々々身を擡げて、

「へい此は、此は如何も憚様。さぞお痛うございましたらう。御免なすつて下さいませよ。いやはや、意氣地は有りません。これさ馬丁様や、もし若い衆様、何と顛覆るやうなことは無からうの。」

御者は見も返らず、勢籠めたる一鞭を加へて、

「分りません。馬が跌きや其迄でさ。」

老夫は眼を圓くして狼狽へぬ。

「否さ、轉ばぬ前の杖だよ。眞箇に御願だ、氣を着けておくれ。若い人と違つて年老の事だ、放り出されたら其迄だよ。もう好い加減にして、徐々とやつてもらはうぢやないか。何と皆様如何

でございます。

「船に乗れば船頭任せ。此馬車にお乗なすつた以上は、私に任せたものとして、安心しなければなりません。」

「え、途方も無い。どうして安心がなるものか。」

呆れはてて老夫は呟けば、御者は始めて顧つ。

「それで安心が出来なけりや、御自分の脚で歩くです。」

「はい。それは御深切に。」

老夫は腹立しげに御者の面を偷視せり。

後れたる人力車は次の建場にて又一人を増して、後押を加へたれども、尙未だ速ばざるより、車夫等は益々發憤して、悶ゆる折から、松並木の中途にて、前面より空車を挽來る二人の車夫に出會ひぬ。行違ひさまに、綱曳は血聲を振立て、

「後生だい、手を假してくんねえか。あの瓦多馬車の畜生、乗越さねえぢや、」

「此徒等の顔が立たねえんだ。」と他の一箇は叫べり。

血氣事を好む徒は、應と云ふがまゝに其車を道端に棄てて、總勢五人の車夫は揉みに揉んで駈けたりければ、二三町ならずして敵に逐着き、有間は相並びて互に一步を争ひぬ。

爾時車夫は一齊に吶喊して馬を駭かせり。馬は憐えて躍り狂ひぬ。車は之が爲に傾斜して、將に乗合を振落さむとせり。

恐怖、叫喚、騷擾、地震に於ける慘狀は馬車の中に顯れたり。冷々然たるは獨彼怪しき美人のみ。

一身を我に任せよと言ひし御者は、風波に掀翻せらるゝ汽船の、やがて千尋の底に汨没せむする危急に際して、蒸氣機關は猶漾々たる穩波を截ると異らざる精神を以て、其職を竭すが如く、從容として手綱を操り、競走者に後れず前まず、隙だにあらば一躍して乗越さむと、睨合ひつ、推行く狀は、此道堪能の達者と覺しく、最頼しく見えたりき。

然れども危急の際此頼しさを見たりしは、才に件の美人あるのみなり。他は皆見苦しくも慌て忙きて、數多の神と佛とは心々に禱られき。なほ彼美人は此騷擾の間、終始御者の様子を打睨りたり。

恁て六箇の車輪は恰も同一の軸に在りて轉する如く、兩々相並びて福岡といふに着けり。此處に馬車の休憩所ありて、馬に飲ひ、客に茶を賣るを例とすれども、今日ばかりは素通なるべし、と乗合は心々に想ひぬ。

御者は此店頭馬を駐めてけり。我物得つと、車夫は遽に勢を増して、手を揮り、聲を揚げ、

思ふまゝに侮辱して駈去りぬ。

乗合は切齒をしつゝ、見送たりしに、車は遠く一團の砂煙に裹まれて、遂に眼界の外に失はれ

き。

旅商人體の男は最も苛ちて、

「何と皆様、業肚ぢやございませんか。大人氣の無い譯だけれど、かういふ行懸になつて見ると、如何も負けるのは残念だ。おい、馬丁様、早く行つてくれたまへな。」

「それも然うですけれどもな、老者は誠にはや如何も。第一この疝に障りますのでな。」

と遠慮勝に訴ふるは、美人の膝枕せし老夫なり。馬は群る蠅と蛇との中に優々と水飲み、奴は木蔭の床几に大字形に僵れて、むしやくと菓子を吃へり。御者は框に息ひて巻蓆を燻しつゝ、茶店の鼻と語りぬ。

「こりや急に出さうもない。」と一人が呟けば、田舎女房と見えたるが其前面に居て、

「憎々しく落着いてるぢやありませんかね。」

最初の發言者は益々堪へかねて、

「時に皆様、彼通り御者も骨を折りましたんですから、御互様に多少酒手を奮みまして、最一骨折つてもらはうぢやございませんか。何卒御賛成を願ひます。」

渠は直に帶佩の墓口を取出して、中なる錢を撈りつゝ、

「ねえ貴下、茲で如彼情られてしまつた日には、佛造つて魂入れずでさ、冗談ぢやない。」

やがて銅貨三錢を以て隗より始めつ。帽子を脱ぎて其中に入れたるを、衆人の前に差出して、渠は普く義捐を募れり。

或は勇んで躍込みたる白銅あり。或は澁々捨てられたる五厘もあり。此處の一錢、彼處の二錢、積りて十六錢五厘とぞなりにける。

美人は片隅に在りて、應募の最終なりき。隗の帽子は巡回して渠の前に着せる時、世話人は辭を申うして挨拶せり。

「飛んだお附合で、どうも御氣毒様でございます。」

美人は軽く會釋すると與に、其手は帶の間に入りぬ。小菊にて上包せる緋鹽瀨の紙入を開きて、渠は無雜作に半圓銀貨を投出せり。

餘所目に瞥たる老夫は太く驚きて面を背けぬ、世話人は頭を搔きて、

「いや、これは剩錢が足りない。私も生憎小いのが……」

と腰なる墓口に手を掛くれば、

「いゝえ、不要んですよ。」

世話人は呆れて叫びぬ。

「此だけ？五十銭！」

之を聞ける乗合は、然無きだに、何者なるか、怪しき別品と目を着けたりしに、今此散財の婦女子に似氣無きより、彌々底氣味悪く訝れり。

世話人は帽子を揺動して錢を鳴しつゝ、

「べて金六十銭と五厘！大したことになりました。これなら馬は駈けますぜ。」

御者は既に着席して出發の用意せり。世話人は酒手を紙に包みて持行きつ。

「おい、若い衆さん、これは皆様からの酒手だよ。六十六銭と五厘あるのだ。何分一つ奮發してね。頼むよ。」

渠は氣輕に御者の肩を拵きて、

「隊長、一晩遊べるぜ。」

御者は流眊に紙包を見遣りて空嘯きぬ。

「酒手で馬は動きません。」

僅に五銭六厘を懐にせる奴は驚き且惜みて、有意的に御者の面を眺めたり。好意を無にせられたる世話人は腹立ちて、

「折角皆様が下さるといふのに、それぢや不要んだね。」

車は徐々として進行せり。

「戴く因縁がありませんから。」

「そんな生意氣なことを言ふもんぢやない。骨折賃だ。まあ野暮を云はずに取ときたまへてことさ。」

六十六銭五厘は將に御者の衣兜に闖入せむとせり。渠は固く拒みて、

「思召は難有うございませうが、規定の賃錢の外に骨折賃を戴く理由がございませぬ。」

世話人は推返されたる紙包を持扱ひつゝ、

「理由も糸瓜もあるものかな。御客が與るといふんだから、取つといたら可いぢやないか。かういふ物を貰つて濟ないと思つたら、一骨折つて今の腕車を抽いてくれたまへな。」

「酒手なんぞは戴かなくツても、十分骨は折つてゐるです。」

世話人は冷笑ひぬ。

「そんな立派な口を咄いたつて、約束が違や世話は無え。」

御者は屹と振顧りて、

「何ですと？」

「此馬車は腕車より速いといふ約束だぜ。」
儼然として御者は答へぬ。

「そんな御約束はしません。」

「おつと、然うは言はせない。なるほど私達には爲なかつたが、此姉様には如何だい。六十六錢五厘の内、一人で五十錢の酒手をお出しなすつたのは此の方だよ。あの腕車より速く行つてもらはうと思やこそ、かうして莫大な酒手も奮まうといふのだ。如何だ、先生、恐入つたか。」

鼻蠢かして世話人は御者の背を指もて撞きぬ。渠は一言を發せず、世話人は頗る得意なりき。美人は戯るゝが如くに詰れり。

「馬丁様、眞箇に約束だよ、如何したつてんだね。」

仍渠は緘黙せり。其唇を鼓動すべき力は、渠の兩腕に奮ひて、馬蹄忽ち高く舉れば、車輪は其輻の見るべからざるまでに快轉せり。乗合は再び地上の瀾に盪れて、浮沈の憂目に遭ひぬ。

縦騎五分間の後、前途迢に競走者の影を認得たり。然れども時遅れたれば、容易に追迫すべくもあらざりき。而して到着地なる石動は最早間近になれり。今にして一躍の下に乗越さずんば、終に失敗を取らざるを得ざる可きなり。憐むべし過度の馳騫に疲れ果てたる馬は、力無げに俛れたる首を聯べて、策てども走れども、足は重りて地を離れかねたりき。

何思ひけむ、御者は地上に下立ちたり。乗合は箇抑甚麼と見る間に、渠は手早く一頭の馬を解放ちて、

「姉様濟みませんが、一寸下りて下さい。」

乗合は顔を見合せて、此謎を解くに苦めり。美人は渠の言ふがまゝに車を下れば、

「どうか此方へ。」と御者はおのれの立てる馬の側に招きぬ。美人は益々其意を得ざれども、仍渠の言ふがまゝに進寄りぬ。御者は物をも言はず美人を引抱へて、驕然と馬に跨りたり。

魂消たるは乗合なり。乗合は實に魂消たるなり。渠等は千體佛の如く面を鳩め、呆然惘然と頭を垂れて、恐らくは畫にも觀るべからざる此不思議の爲體に眼を奪はれたりしに、其馬は奇怪なる御者と、奇怪なる美人と、奇怪なる舉動とを載せて驀直に馳去りぬ。車上の見物は漸く我に復りて響動めり。

「一體如何したんでせう。」

「まづ乗せ逃とでもいふんでせう。」

「へえ、何でございます。」

「客の逃げたのが乗逃。御者の方で逃げたのだから乗せ逃でせう。」
例の老夫は頭を掉りく呟けり。

「いや洒落どころか。こりや、まあ如何してくれる積だ。」

不審の眉を攢めたる前世話人は、腕を拱きつゝ、座中を眊して、

「皆様、何と思召す？こりや尋常事ぢやありませんぜ。馬鹿を見たのは我々ですよ。全く駈落ですな。どうも彼女がさ、尋常の鼠ちやあんめえと睨んで置きましたが、こりやあ正に然うだつた。然し好い女だ。」

「私は急ぎの用を抱へてゐる身だから、かうして安閑としては居られない。何と此小僧に頼んで、一匹の馬で遣つてもらはうぢやございせんか。馬鹿々々しい、錢を出して、あの醜態を見せられて、置去を吃ふ奴も無いものだ。」

「全く然うでございますよ。眞箇に巫山戯た眞似をする野郎だ。小僧早く遣つてくんな。」

奴は途方に暮れて、曩より車の前後に出没したりしが、

「どうも御氣毒様です。」

「御氣毒様は知れてらあ。何時まで恚うして置くんだ。早く遣つてくれ、遣つてくれ！」

「私には未だ能く馬が動きません。」

「生きてるものの動かないといふ法があるものか。」

「臀部を引撲け〜。」

奴は苦笑しつゝ、

「そんな事を云つたつて可けません。二頭曳の車ですから、馬が一匹ぢや遣切れません。」

「そんなら此處で下りるから錢を返してくれ。」

腹立つ者、無理言ふ者、呟く者、罵る者、迷惑せる者、乗合の不平は奴の一身に洩れり。渠は散々に苛まれて遂に涙ぐみ、身の措所に窮して、辛くも車の後に竦みたりき。乗合は益々躁ぎて、敵手無き喧嘩に狂ひぬ。

御者は眞一文字に馬を飛して、雲を霞と走りければ、美人は魂身に添はず、目を閉ぢ、息を凝し、五體を縮めて、力の限り渠の腰に縋りつ。風は颯々と兩腋に起りて毛髮堅ち、道は宛然河の如く、濁流脚下に奔注して、身は是虚空を轉ぶに似たり。

渠は實に死すべしと念ひぬ。次第に風歇み、馬駐ると覺えて、直ちに昏倒して正氣を失ひぬ。

是御者が靜に馬より扶下して、茶店の座敷に昇入れたりし時なり。渠は此介抱を主の姫に囁みて、其身は息をも繼かず再び羸馬に策ちて、舊來し路を急ぎけり。

程無く美人は醒めて、こは石動の棒端なるを覺りぬ。御者は既に在らず。渠は其名を姫に訊ねて、金様なるを知りぬ。其爲人を問へば、方正謹嚴、其行を質せば學問好。

金澤なる浅野川の積は、宵々毎に納涼の人出の爲に熱了せられぬ。此節を機として、諸國より入込みたる野師等は、積も狭しと見世物小屋を掛聯ねて、猿芝居、娘輕業、山雀の藝當、劍の刃渡、活人形、名所の視機關、電氣手品、盲人相撲、評判の大蛇、天狗の骸骨、手無娘、子供の玉乗等一々數ふるに違あらず。

就中大評判、大當は、瀧の白絲が水藝なり。太夫瀧の白絲は妙齡十八九の別品にて、其技藝は容色と相稱ひて、市中の人氣山の如し。然れば他は皆晩景の開場なるに拘らず、是のみ獨り晝夜二回の興行ともに、其大入は永當たり。

時正に午後一時、撃柝一聲、囃子は鳴を鎮むる時、口上は渠が所謂不辯舌なる辯を揮ひて前口上を陳了れば、忽ち起る緩絃朗笛の節を履みて、靜々歩出でたるは、當座の太夫元瀧の白絲、高島田に奴元結掛けて、脂粉濃に桃花の媚を粧ひ、朱鷺色縮緬の單衣に、銀絲の浪の刺繡ある水色緞の社袴を着けたり。渠は閑雅に舞臺好き所に進みて、一禮を施せば、待構へたりし見物は聲に喚きぬ。

「いよう、待つてました大明神様！」

「妖豔々々！」

「よう、金澤暴し！」

「こゝな命取！」

喝采の聲の裡に渠は徐に面を擡げて、情を含みて淺笑せり。口上は扇を舉げて一咳し、

「東西！お目通に控へさせましたるは、當座の太夫元瀧の白絲に御座ります。御目見相濟みますれば、早速ながら本藝に取掛らせます。最初腕調として御覽に入れまするは、露に蝶の狂ひを象りまして、(花野の曙)。ありや來た、よいよいい扱。」

扱太夫は盈々水を盛りたる玻璃盞を左手に把りて、右手には黄白二面の扇子を開き、呀と聲發けて交互に投上れば、露を争ふ蝶一雙、縦横上下に逐ひつ、逐れつ、雫も滴さず翼も息めず、太夫の手にも住まらず、空に文織る練磨の手術、今ぢやくと、木戸番は濁聲高く喚はりつ、外面の幕を引揚げたる時、演藝中の太夫は不圖外方に眼を遣りたりしに、何にか心を奪はれけむ、礫と玻璃盞を取落せり。

口上は狼狽して走寄りぬ。見物は其爲損じを哄と囁しぬ。太夫は受住めたる扇を手にしたるま、其瞳を仍外方に凝しつ、つかくと土間に下りたり。

口上は彌々狼狽して、爲ん方を知らざりき。見物は呆れ果てて息を斂め、満場齊く頭を回して

太夫の舉動を打瞞れり。

白絲は群居る客を推排け、搔排け、

「御免あそばせ、一寸御免あそばせ。」

倉皇木戸口に走出で、項を延べて目送せり。其視線中に御者體の壯俊あり。

何事や起りたると、見物は白絲の踵より、どろろと亂出づる喧擾に、件の男は振り返りぬ。白

絲は始めて其面を見るを得たり。渠は色白く瀟洒なりき。

「おや、違つてた！」

慙く獨語ちて、太夫は悄然木戸を入りぬ。

三

夜は既に十一時に近きぬ。磧は凄涼として一箇の人影を見ず、天高く、露氣冷に、月のみぞ獨澄めりける。

熱鬧を極めたりし露店は盡く形を斂めて、止此處彼處に見世物小屋の板圍を洩る、燈火は、微

に宵のほどの名残を留めつ。河は長く流れて、向山の松風靜に度る處、天神橋の欄干に靠れて、

うとくと交睫む漢子あり。

渠は山に倚り、水に臨み、清風を擔ひ、明月を戴き、了然たる一身、蕭然たる四境、自然の清福を占領して、いと心地快げに見えたりき。

折から磧の小屋より顯れたる婀娜者あり。紺絞の首拔の浴衣を着て、赤毛布を引絡ひ、身を持

餘したるが如くに歩を運び、下駄の爪頭に憂々と礫を蹴遣りつ、流に沿ひて逍遙たりしが、瑠

璃色に澄み渡れる空を打仰ぎて、

「噫、好いお月夜だ。寝るには惜い。」

川風は颯と渠の鬢を吹亂せり。

「あゝ、薄ら寒くなつて來た。」

緊と毛布を絡ひて、渠は四邊を眇しぬ。

「人子一人居やしない。何だ、眞箇に、暑い時は囂々騒いで、涼しくなる時分には寢てしまふの

か。ふゝ、人間といふものは意固地なもんだ。涼むんなら這應様時ぢやないか。どれ、橋の上へ

でも行つて見ようか。人さへ居なけりや、何處でも好い景色なもんだ。」

渠は再び徐々として歩を移せり。

此女は瀧の白絲なり。渠等の仲間便宜上旅籠を取らずして、小屋を家とせるもの寡からず。

白絲も然なり。

聽て渠は橋に來りぬ。吾妻下駄の音は天地の寂黙を破りて、からんころんと月に響けり。渠は其音の可愛に、猶強て響せつゝ、橋の央近く來れる時、矢庭に左手を抗げて其高髻を攫み、

「え、もう重苦しい。ちよつ煩え！」

暴々しく引解きて、手早くぐる／＼巻にせり。

「あ、是で清々した。二十四にもなつて高島田に厚化粧でもあるまい。」

恠て白絲は水を聴き、月を望み、夜色の幽靜を賞して、漸く橋の半を過ぎぬ。渠は忽ち暢氣なる人の姿を認めぬ。何者か是、天地を枕衾として露下月前に快眠せる漢子は、數歩の内に在りて

鬪を立てつ。

「おや！ 好い氣なものだよ。誰だい、新ぢやないか。」

囃子方に新といふ者あり。宵より出でて未だ小屋に還らざれば、其かと白絲は間近に寄りて、男の寝顔を覗きたり。

新は未だ如此暢氣ならざるなり。渠は果して新にはあらざりき。新の相貌は如此威儀あるものにあらざるなり。渠は千の新を合せて、猶且勝ること千の新なるべき異常の面魂なりき。

其眉は長く濃に、睡れる眸子も凜如として、正しく結びたる唇は、夢中も放心せざる渠が意氣の俊爽なるを語れり。漆の如き髪は稍生ひて、廣き額に垂れたるが、吹揚る川風に絶えず戦げり。

熟視めたりし白絲は忽ち色を作して叫びぬ。

「あら、まあ！ 金様だよ。」

欄干に眠れるは是餘人ならず、例の乗合馬車の馭者なり。

「如何して今時分這麼場所にねえ。」

渠は聲音を忍びて、再び男に寄添ひつゝ、

「眞箇に罪の無い顔をして寝てるよ。」

恍惚として瞳を凝したりしが、卒におのれが絡ひし毛布を脱ぎて被懸けたれども、馭者は夢にも知らずで熟睡せり。

白絲は欄干に腰を憩めて、有間爲す事もあらざりしが、突然聲を揚げて、

「え、太甚い蚊だ。」膝の邊を礎と拊てり。此音にや驚きけむ、馭者は眼覺まして、呷まじりに、

「あ、寝た。もう何時か知らん。」

思寄らざりし我側に媚めける聲ありて、

「もう彼此一時ですよ。」

馭者は愕然として顧れば、我肩に見覚えぬ毛布ありて、深夜の寒を護れり。

「や、毛布を着せて下すつたのは？ 貴方？ でございますか。」

白絲は微笑を含みて、呆れたる馭者の面を視つ、

「夜露に打たれると體の毒ですよ。」

馭者は黙して一禮せり。白絲は嬉げに身を進めて、

「貴方、其後は御機嫌よう。」

愈々呆れたる馭者は少く身を退りて、假初ながら、狐狸變化の物にはあらずやと心陰に疑へり。月を浴びて物凄きまで美しき女の顔を、無遠慮に打眺めたる渠の眼色は、顰める眉の下より異彩を放てり。

「何方でしたか、一向存じません。」

白絲は片頬笑みて、

「あれ、情無しだねえ。私は忘れやしないよ。」

「はてな。」と馭者は首を傾けたり。

「金様。」と女は馴々しく呼びかけぬ。

馭者は太く驚けり。月下の美人生面にして我名を識る。馭者たる者誰か驚かざらむや。渠は實に未だ曾て信ぜざりし狐狸の類にはあらずや、と心始めて惑ひぬ。

「お前様は餘程情無しだよ。自分の抱いた女を忘れるなんといふ事があるものかね。」

「抱いた？私か？」

「あゝ、お前様に抱れたのさ。」

「何處で？」

「好い所で！」

袖を掩ひて白絲は嫣然一笑せり。

馭者は深く思案に暮れたりしが、やうく傾けし首を正して言へり。

「抱いた記憶はないが、成程何處かで見ただやうだ。」

「見たやうだも無いもんだ。高岡から馬車に乗つた時、人力車と競走をして、石動手前からお前様に抱れて、馬上の合乗をした女さ。」

「應！然だ。」横手を拍ちて、馭者は大聲を發せり、白絲は其聲に驚かされて、

「え、吃驚した。ねえお前様、覚えて御在だらう。」

「うむ、覺えとる。然だつた、然だつた。」

馭者は唇邊に微笑を浮べて、再び横手を拍てり。

「でも言れるまで憶出さないなんざあ、餘り不實過ぎるのねえ。」

「いや、不實といふ譯では無いけれど、毎日何十人といふ客の顔を、一々覺えてゐられるもので

はない。」

「其は御尤さ。然だけれども、馬上の合乗をするお客は毎日がありますまい。」

「那麼様事が毎日有られて耐るものか。」

二人は相見えて笑ひぬ。時に數杵の鐘聲遠く響きて、月は益々白く、空は益々澄めり。

白絲は更めて馭者に向ひ、

「お前様、金澤へは何日、如何して御出なすつたの？」

四顧寥廓として、止山水と明月とあるのみ。颯戻たる天風は徐々に馭者の毛布を飄せり。

「實は彼地を浪人してね……」

「おやまあ、如何して？」

「之も君ゆるさ。」と笑へば、

「御冗談もんだよ。」と白絲は流眊に見遣りぬ。

「いや、其は左も右も、話を爲んけりや解らん。」

馭者は懷裡を搜りて、油紙の蒲葺草入を取出し、急遽一服を喫して、直に物語の端を發かむ

とせり。白絲は渠が吸殻を撃くを待ちて、

「濟みませんが、一服貸して下さいな。」

馭者は言下に草入と燐枝とを手渡して、

「煙管が壅つてます。」

「いゝえ、結構。」

白絲は一吃を試みぬ。果して其言の如く、煙管は不快き脂の音のみして、煙の通ふこと縷より

微なり。

「なるほど之は壅つてる。」

「それで吸ふには餘程力が要るのだ。」

「馬鹿にしないねえ。」

美人は紙縷を撚りて、煙管を通し、溝泥の如き脂に面を皺めて、

「こら！御覽な、無性だねえ。お前様寡夫かい。」

「勿論。」

「おや、勿論とは御挨拶だ。でも、情婦の一人や半人はありません。」

「馬鹿な！」と馭者は一喝せり。

「ちや無いの？」

「知れた事。」

「眞箇に？」

「冗いなあ。」

渠は此問答を忌しげに空嘯きぬ。

「お前様の壯年で、獨身で、情婦が無いなんて、眞箇に男子の恥辱だよ。私が似合しいのを一人世話してあげようか。」

馭者は傲然として、

「那麼様ものは要らんよ。」

「おや、御免なさいまし。さあ、お掃除が出来たから、一服戴かう。」

白絲は先づ二服を吃して、三服目を馭者に、

「あい、上げませう。」

「これは難有う。あ、能く通ったね。」

「また塞った時は、いつでも持つて御出なさい。」

大口開いて馭者は心快に笑へり。白絲は再び煙管を假りて、長閑に烟を吹きつゝ、

「今の顛末と云ふのを聞して下さいな。」

馭者は頷きて、立てりし態を變へて、斜に欄干に倚り、

「彼時、あんな亂暴を行つて、到頭人力車を乗越したのは可かつたが、彼奴等は彼を非常に口惜がつてね、會社へ難しい掛合を始めたのだ。」

美人は眉を昂げて、

「何だツて又？」

「何も此にも理窟なんぞは有りやせん。彼の一件を根に持つて、喧嘩を仕掛けに來たのさね。」

「うむ、生意氣な！如何したい？」

「相手になると、事が面倒になつて、實は雙方とも商賣の邪魔になるのだ。そこで、會社の方では穩便が善いと云ふので、無論片手落の裁判だけれど、私が因果を含められて、雇を解かれたのさ。」

白絲は身に沁む夜風に我と我身を抱きて、

「まあ、お氣毒だツたねえ。」

渠は慰むるに語無きが如き面色なりき。馭者は冷笑ひて、

「なあに、高が馬方だ。」

「けれどもさ、誠にお氣毒な事をしたねえ、いはば私の爲だもの。」

美人は愁然として腕を拱きぬ。馭者は眞面目に、

「其代り煙管の掃除をしてもらった。」

「あら、冗談ぢや無いよ、此人は。而してお前様これから如何する心算なの？」

「如何と云つて、矢張食ふ算段さ。高岡に彷徨いてゐたつて始らるので、金澤には士官が居るから、馬丁の口でも有るだらうと思つて、探しに出て来た。今日も朝から一日奔走したので、全然應れてしまつて、晩方一風呂入つた所が、暑くて寝られんから、ぶら／＼納涼に出掛けて、此處で月を観てるた内に、快い心地になつて睡こんでしまつた。」

「おや、然う。而して口は有りましたか。」

「無い！」と馱者は頭を掉りぬ。

白絲は暫く沈吟したりしが、

「貴方、這麼様事を申しちや生意氣だけれど、お見受け申した所が、馬丁なんぞを爲さるやうな御人體ぢや無いね。」

馱者は長嘆せり。

「生得からの馬丁でも無いさ。」

美人は黙して頷きぬ。

「愚癡ぢやあるが、聞いてくれるか。」

佗しげなる男の顔を熟視めて、白絲は渠の物語るを待てり。

「私は金澤の士族だが、少し仔細が有つて、幼少頃に家は高岡へ引越したのだ。其後私一人金澤へ出て来て、或學校へ入つてゐる内、阿爺に亡くなられて、丁度三年前だね、餘儀無く中途で學問は廢止さ。それから高岡へ還つて見ると、其日から稼人といふものが無いのだ。私が母親を過さにやならんのだ。何を云ふにも、未だ書生中の體だらう、食ふほどの藝は無し、實は弱つたね。亡父は馬の家ぢや無かつたけれど、大の所好で、馬術では藩で鳴したものださうだ。それだから、私も小兒の時分稽古をして、少しは所得があるので、馬車會社へ住込んで、馱者となつた。それで先づ活計を立ててゐるといふ、誠に愧かしい次第さ。然し、私だつて豈馬方で果てる了簡でも無い、目的も希望もあるのだけれど、如意にならぬが浮世かね。」

渠は茫茫たる天を仰ぎて、姑く悵然たりき。其面上には謂ふべからざる悲憤の色を見たり。白絲は情に勝へざる聲音にて、

「そりやあ、もう誰しも浮世ですよ。」

「うむ、まあ、浮世とあきらめて措くのだ。」

「今お前様の有仰つた希望と云ふのは、私達には聞いても解りはしますまいけれど、何ぞ、その、學問の事でせうね？」

「然う、法律といふ學問の修行さ。」

「學問を爲るなら、金澤なんぞより東京の方が善いといふぢやありませんか。」

「然とも。」

「それぢや斷然東京へ御出なされば可いのねえ。」

「行けりや行くさ。そこが浮世ぢやないか。」

白絲は軽く小膝を拵ちて、

「黄金の世の中ですか。」

「地獄の沙汰さへ、なあ。」

再び馭者は苦笑せり。

白絲は事も無げに、

「ぢや貴方、御出なさいな、ねえ、東京へさ。もし、腹を立つちや可けませんよ、失禮だが、私

が仕送ツて上げようぢやありませんか。」

深沈なる馭者の魂も、此時跳るばかりに動きぬ。渠は驚くより寧ろ呆れたり。呆るゝより寧ろ

慄きたるなり。渠は色を變へて、此美しき魔性の物を睨めたりけり。向者半圓の酒錢を投じて、

他の一錢よりも吝まざりし此美人の膽は、拾人の乗合をして漫に寒心せしめたりき。銀貨一片に
睨目せし乗合よ、君等をして今夜天神橋上の壯語を聞かしめなば、肝膽忽ち破れて、血は耳に逆
出らむ。花顔柳腰の人、抑々爾は狐狸か、變化か、魔性か。恐くは胭脂の怪物なるべし。亦是一
種の魔性たる馭者だも驚き且慄けり。

馭者は美人の意を其面に讀まむとしたりしが、能はずして遂に呻出せり。

「何だツて？」

美人も希有なる面色にて反問せり。

「何だツてとは？」

「如何云ふ所以で。」

「所以も何も有りはしない、唯お前様に仕送がして見たいのさ。」

「酔興な！」と馭者は其愚に唾するが如く獨語ちぬ。

「酔興さ。私も酔興だから、お前様も酔興に一番私の志を受けて見る氣は無しかい。えゝ、金

様、如何だね。」

馭者は切に打案じて、左右の分別に迷ひぬ。

「そんなに慮へることは無いぢやないか。」

「然し、縁も由縁も無いものに……」

「縁といふのも始は他人同士。茲でお前様が私の志を受けて下されば、其が畢竟縁になるんだらうぢやありませんかね。」

「恩を受ければ報さんければならぬ義務がある。其責任が重いから……」

「それで断るとお言ひのかい。何だねえ、報恩が出来るの、出来ないのと、そんな事を苦にするお前様でも無からうぢやないか。私だつて泥坊に伯父様があるのぢや無し、知りもしない人を捉へて、刃にお金を貢いで耐るものかね。私はお前様だから貢いで見たいのさ。いくら否だとお言ひでも、私は貢ぐよ。後生だから貢がして下さいよ。ねえ、可いでせう、可いよう！ 應とお言ひよ。構ふものかね、遠慮も何も要るものぢやない。私はお前様の希望といふのが慍ひさへすれば、其で可いのだ。それが私への報恩さ、可いぢやないか。私はお前様は屹度立派な人物に成れると思ふから、是非立派な人物にして見たくつて耐らないんだもの。後生だから早く勉強して、立派な人物に成つて下さいよう。」

其音柔媚なれども言々風霜を挟みて、凛たり、烈たり。馭者は感奮して、兩眼に熱涙を浮かべ、應、折角の御志だ。御恩に預りませう。」

渠は襟を正して、恭しく白絲の前に頭を下げたり。

「何ですなえ、否に改つてさ。然う、そんなら私の志を受けて下さるの？」

美人は喜色満面に溢るゝばかりなり。

「御世話になります。」

「否だよ、もう金様、そんな丁寧な話を遣はれると、私は氣が通るから、矢張書生言葉を遣つて下さいよ。眞箇に凛々しくつて、私は書生言葉は大好き。」

「恩人に向つて濟まんけれども、それぢや疎雑な言葉を遣はう。」

「あゝ、其が可いんですよ。」

「然しね、爰に一つ窮つたのは、私が東京へ行つてしまふと、母親が獨りで……」

「それは御心配無く。及ばずながら私がね……」

馭者は夢る心地しつゝ、耳を傾けたり。白絲は誠を面に露して、

「屹度御世話をしますから。」

「いや、どうも重々、それでは實に濟まん。私も此報恩には、お前様の爲に力の及ぶだけの事は爲なければならんが、何か御所望は有りませんか。」

「だからさ、私の所望はお前様の希望が慍ひさへすれば……」

「それは不可！ 自分の所望を遂げる爲に恩を受けて、其望を果したで、報恩になるものでは無

い。それは止恩に對する所の我身だけの義務と云ふもので、決して恩人に對する義務では無い。

「でも私が承知なら可いぢやありませんかね。」

「いくらお前様が承知でも、私が不承知だ。」

「おや、まあ、否に難しいのね。」

「憚言ひつゝ、美人は微笑みぬ。」

「いや、理窟を言ふ譯では莫いがね、目的を達するのを報恩と云へば、乞食も同然だ。乞食が錢をもらふ、それで食ツて行く、渠等の目的は食ふのだ。食ツて行けるからそれが方々で錢を乞つた報恩になるとは謂はれまい。私は馬方こそ爲るが、未だ乞食は爲たくない。固より御志は受けたいのは山々だ。どうか、ねえ、受けられるやうにして受けさして下さい。すれば、私は喜んで受ける。然も無ければ、折角だけれど御斷り申さう。」

頃には返す語も無くて、白絲は頭を低れたりしが、聽て馭者の面を見るが如く見ざるが如く、ひつゝ、

「ぢや言ひませうか。」

「うむ、承はらう。」と男は稍容を正せり。

「ちツと羞かしい事さ。」

「何なりとも。」

「諾いて下さるか。いづれお前様の身に適つた事ぢやあるけれども。」

「一應聽いた上でなければ、返事は出来んけれど、身に適つた事なら、随分諾くさ。」

白絲は鬢の亂を搔上げて、幾分の赧羞を紛はさむとせり。馭者は月に向へる美人の姿の輝くばかりなるを打瞞りつゝ、固唾を嚙みて其語るを待てり。白絲は始に口籠りたりしが、直に心を定めたる氣色にて、

「處女のやうに羞かしがることも無い、好い婆の癖にさ。私の所望といふのはね、お前様に可愛がツてもらひたいの。」

「えゝ！」と馭者は鋭く叫びぬ。

「あれ、そんな可恐い顔をしなくツたツて可いぢやありませんか。何も内君にしてくれと云ふんぢやなし。唯他人らしく無く、生涯親類のやうにして暮したいと云ふんでさね。」

馭者は遲疑せず、渠の語るを追ひて潔く答へぬ。

「可しい。決してもう他人ではない。」

涼しき眼と凛々しき眼とは、無量の意を含みて相合へり。渠等は無言の數秒の間に、不能語、不可説なる至微不至の靈語を交へたりき。渠等が十年語りて盡すべからざる心底の磅礴は、實に

此瞬息に於て神會默契されけるなり。良有りて、先づ馭者は口を開きぬ。

「私は高岡の片原町で、村越欣彌といふ者だ。」

「私は水島友と云ひます。」

「水島友？而して御宅は？」

白絲は確と語に塞りぬ。渠は定まれる家のあらざればなり。

「御宅は些と窮ツたねえ。」

「だつて、家の無いものがあるものか。」

「それが無いのだからさ。」

天下に家無きは何者ぞ。乞食の徒と雖も、猶且雨露を凌ぐべき蔭に眠らずや。世上の例を以てせば、此人當に金屋に入り、瑤輿に乗るべきなり。然るを渠は無宿と言ふ。其行既に奇にして、其心亦奇なりと雖も、未だ此言の奇なるには如かず、と馭者は思へり。

「それぢや何處に居るのだ。」

「彼方さ。」と美人は磧の小屋を指せり。

馭者は其方を望みて、

「彼處とは？」

「見世物小屋さ。」と白絲は異様の微笑を含みぬ。

「は、あ、見世物小屋とは異ツてゐる。」

馭者は心竊に驚きたるなり。渠は固より此女を以て良家の女子とは思懸けざりき、寡くとも、海に山に五百年の怪物たるを看破したりけれども、見世物小屋に起臥せる乞食藝人の徒ならむとは、實に意表に出でたりしなり。とは雖も渠は然あらぬ體に答へたりき。白絲は渠の心を酌みて己を嘲りぬ。

「餘り異り過ぎてゐるわね。」

「見世物の三味線でも弾いてゐるのかい。」

「これでも太夫元さ。太夫だけに猶悪いかも知れない。」

馭者は輕侮の色をも露さず、

「はあ、太夫！何の太夫？」

「無官の太夫ぢやない、水藝の太夫さ。餘り聞いておくれでないよ、面目が悪からさ。」

馭者は益々眞面目にて、

「水藝の太夫？は、あ、それぢや此頃評判の……」

恠く言ひつゝ、珍しげに女の面を覗きぬ。白絲は颯と赧む顔を背けつゝ、

「あ、もう澤山、堪忍しておくれよ。」

「瀧の白糸といふのはお前様か。」

白糸は渠の語を手もて制しつ。

「もう不要ッてばさ！」

「うむ、成程！」と心の問ふ所に答得たる風情にて、欣彌は頷けり。白糸は愈々羞らひて、

「否だよ、もう。何が成程なんだね。」

「非常に好い女だと聞いてるたが、成程……」

「もう不要ッてばさ。」

衝と身を寄せて、白糸は矢庭に欣彌を撞きたり。

「え、危え！好い女だから好いと云ふのに、撞飛すことは無いぢやないか。」

「人を馬鹿にするからさ。」

「馬鹿にするものか。實に美しい、何歳になるのだ。」

「お前様何歳になるの？」

「私は二十六だ。」

「おや六なの？未だ若いねえ。私なんぞはもう婆だね。」

「何歳さ。」

「言ふと愛想を盡されるから可厭。」

「馬鹿な！眞箇に何歳だよ。」

「もう婆だッてば。四さ。」

「二十四か！若いね。廿歳ぐらるかと思つた。」

「何か奢りませうよ。」

白糸は帯の間より白縮緬の袱紗包を取らせり。解けば一束の紙幣を紙包にしたるなり。

「此に三十圓あります。まあ此だけ進げて置きますから、家の處置をつけて、一日も早く東京へ

御出なさいな。」

「家の處置と云つて、別に金圓の要るやうな事は無し、そんなには要らない。」

「可いからお持ちなさいよ。」

「全額もらつたらお前様が窮るだらう。」

「私は又明日入る口があるからさ。」

「どうも濟まんなあ。」

欣彌は受取りたる紙幣を軽く戴きて懐にせり。時に通懸りたる夜稼の車夫は、怪むべき月下の

密會を一瞥して、

「御合乗、都合で、如何で。」

渠は愚弄の態度を示して、兩箇の側に立住りぬ。白絲は才に顧眄りて、棄つるが如く言放てり。

「要ないよ。」

「然う有仰らずに御召なすつて。へ、へ、へ。」

「何だね、人を馬鹿にして。一人乗に同乗が出来るか。」

「そこは又お話合で、宜いやうにして御乗なすつて下さい。」

面白半分に賣るを、白絲は鼻の端に遇ひて、

「お前も飛んだ苦勞性だよ。他の事よりは、早く還つて、内君でも悦ばしておやんな。」

有繫に車夫も此姉御の興し易からざるを知りぬ。

「へい、此は憚様。まあ貴方も御樂みなさいまし。」

渠は直に踵を回して、鼻唄まじりに行過ぎぬ。欣彌は何思ひけむ、

「おい、車夫！」と卒に呼住めたり。

車夫は頭を振向けて、

「へえ、やッぱり御合乗ですかね。」

「馬鹿言へ！伏木まで行くか。」

渠の答ふるに先ちて、白絲は驚き且怪みて問へり。

「伏木……あの、伏木まで？」

伏木は蓋し上都の道、越後直江津まで汽船便ある港なり。欣彌は平然として、

「これから直に發たうと思ふ。」

「これから?!」と白絲は有繫に心を轟かせり。

欣彌は領きたりし頭を其儘低れて、見るべき物もあらぬ橋の上に瞳を凝しつ、其胸中は二途

の分別を追ふに忙しかりき。

「これからは餘り早急ぢやありませんか。未だ御話したい事もあるのだから、今夜は左も右も、
ねえ。」

一面は欣彌を説き、一面は車夫に向ひ、

「若衆さん、濟まないけれど、之を持つて行つとくれよ。」

渠が紙入を搜る時、欣彌は急遽しく、

「車夫、待ツとれ。行ッちや可かんぜ。」

「あれさ、可いやね。さあ、若衆さん之を持つて行つとくれよ。」

五錢の白銅を把りて、將に渡さむとせり。欣彌は其間に分入りて、

「少し都合があるのだから、これから遣つてくれ。」

渠は十分に決心の色を露せり。白絲は到底其動す能はざるを覺りて、潔く未練を棄てぬ。

「然う。それぢや無理に留めないけれども……」

此時兩箇の眼は期せずして合へり。

「而して御母様には？」

「道で寄つて暇乞をする、是非高岡を通るのだから。」

「ぢや町盡頭まで送りませう。若衆さん、もう一臺無いかねえ。」

「四五町行きや幾多も有りませう。其處までだから一所に召していらつしやい。」

「お巫山戯でないよ。」

欣彌は已に車上に在りて、

「車夫、如何だらう。二人乗つたら毀れるかなあ、此車は？」

「なあに大丈夫。姉様眞箇に御召なさいよ。」

「構ふことは無い。早く乗つたく。」

欣彌は手招けば、白絲は微笑む。其肩を車夫は丁と拵ちて、

「到頭異な寸法になりましたぜ。」

「否だよ、欣様。」

「可いさ、可いさ！」と欣彌は一笑せり。

月は漸く傾きて、鶏聲微に白し。

四

瀧の白絲は越後國新潟の産にして、其地特有の麗質を備へたるが上に、其手練の水藝は、殆ど人間業を離れて、頗る驚くべきものなりき。然れば到る所大入叶はざる莫きが故に、四方の金主は渠を争ひて、竟に例無き莫大の給金を拂ふに到れり。

渠は親も在らず、同胞も有らず、情夫とても有らざれば、一切の収入は盡く之を我身一箇に費すべく、加ふるに、豁達豪放の氣は、此餘裕あるが爲に益々膨脹して、十金を獲れば廿金を散すべき勢を以て、得るまゝに撒散せり。是一つには、金錢を獲るの難きを渠は知らざりし故なり。

渠は又貴族的生活を喜ばず、好みて下等社會の境遇を甘んじ、衣食の美と邊幅の修飾とを求めざりき。渠の餘りに平民的なる、其度を放越して鐵拐となりぬ。往々見る所の女流の鐵拐は、都て汚行と、罪業と、惡徳との養成にあらざる莫し。白絲の鐵拐は之を天真に發して、極めて純潔

清淨なるものなり。

渠は思ふまゝに此鐵拐を振舞して、天高く、地廣く、此幾歳を長閑に過したりけるが、今や乃ち然らざるなり。村越欣彌は渠が然諾を信じて東京に遊學せり。高岡に住める其母は、箸を控へて渠が饋餉を待てり。白絲は月々渠等を扶持すべき責任ある世帯持の身となれり。

従來の瀧の白絲は、方に其放逸を縛し、其奇骨を挫ぎて、世話女房のお友とならざるを得ざる可きなり。渠は遂に其責任の爲に石を巻き、鐵を振ぢ、屈す可からざる節を屈して、勤儉小心の婦人となりぬ。其行に於ては仍且瀧の白絲たる活氣をば有ちつ、其精神は全く村越友として經營苦勞しつ。其間は實に三年の長きに互れり。

或は富山に赴き、高岡に買はれ、將た大聖寺福井に行き、遠くは故郷の新潟に興行し、身を厭はず八方に稼廻りて、幸ひに何處も外さざりければ、或は血をも濺がざる可からざる至重の責任も、其収入に因りて難無く果されき。

然れども見世物の類は春夏の二期を黄金期とせり。秋は漸く寂しく、冬は霜枯の哀むべきを免かれざるなり。況んや北國の雪世界は殆ど一年の三分の一を白き物の中に蟄居せざるべからざるをや。特に時候を論ぜざる見世物と異りて、渠の演藝は自から夏爐冬扇の嫌あり。其喝采は全く暑中に在りて、冬季は坐食す。

假し渠は糊口に窮せざるも、月々十數圓の工面は尋常手段の及ぶべきにあらざるなり。渠は如何してか無き袖を振りける？魚は木に縁りて求むべからず、渠は他日の興行を質入して前借したりしなり。

其一年、其二年は、左にも右にも如此き算段に由りて過しぬ。其三年の後は、有繋に八方塞りて、融通の道も絶えなむとせり。

翌年の初夏金澤の招魂祭を當込みて、白絲の水藝は興行せられたりき。渠は例の美しき姿と妙なる技とを以て、希有の人氣を取りたりしかば、即座に越前福井なる某といふ金主附きて、金澤を打揚次第、二箇月間三百圓にて雇はむとの相談は調ひき。

白絲は諸方に負債ある旨を打明けて、其三分の二を前借し、不義理なる借金を拂ひて、手許に百餘圓を剩してけり。之を以てせば欣彌母子が半年の扶持に足るべしとて、渠は鞆みたりし愁眉を開けり。

然れども欣彌は實際半年間の仕送を要せざるなり。

渠の希望は既に手の達くばかりに近きて、僅に茲二三箇月を支ふるを得ば足れり。無頓着なる白絲は唯其健康を尋ぬるのみに安じて、敢て其成業の期を問はず、欣彌も亦強ち之を告げむとは爲さざりき。其約に負かざらむことを虞る、者と、恩中に恩を顧ざる者とは、各々其務むべき所

を務むるに専なりき。

恠て翌日當に福井に向ひて發足すべき三日目の夜の興行を閑りたりしは、一時に垂んとする比なりき。白晝を欺くばかりなりし公園内の萬燈は全く消えて、雨催の天に月はあれども、四面滄淳として煙の布くが如く、淡墨を流せる森の彼方に、忽ち登音の響きて、がや／＼と罵る聲せるは、見世物師等が打連立ちて公園を引拂ふにぞありける。此一群の迹に残りて語合ふ女あり。

「ちよいと、お隣の長松さんや、明日は何處へ行きなさる？」

年増の抱ける猿の頭を撫でて、恠く訊ねしは、猿芝居と小屋を並べし轆轤首の因果娘なり。

「唯、明日は福井まで参じます。」

年増は猿に代りて答へぬ。轆轤首は愛想好く、

「お、／＼、それはまあ遠い所へ。」

「はい、ちと遠方でございませと云ひなよ。これ、長松、此處が喃、金澤の兼六園と云つて、百萬石の御庭だよ。千代公の方は二度目だけれど、お前は初度だ。さあ能く見物しなよ。」

渠は抱きし猿を放遣りぬ。

折から彼方の池の邊に、燐枝の火の炳然燃えたる影に、頬被せる男の顔は赤く顯れぬ。黒き影法師も兩三箇其の側に見えたりき。因果娘は偷視て、

「おや、出刃打の連中が彼處に憩んでるなさるやうだ。」

「どれ／＼。」と見向く年増の背後に聲ありて、

「おい、徐々出掛けようぜ。」

旅装束したる四五人の男は二人の側に立住りぬ。年増は直に猿を抱取りて、

「そんなら、姉様。」

「参りませうかね。」

兩箇の女は渠等と與に行きぬ。續きて一團又一團、大蛇を籠に入れて荷ふ者と、馬に跨りて行く曲馬芝居の座頭とを先に立てて、種々の動物と異形の人類が、絡繹として森蔭に列を成せる其状は、實に百鬼夜行一幅の活圖なり。

良有りて渠等は皆行盡せり。公園は森邃として月色益々昏く、夜は今や全く其死寂に眠れる時、

鈴銜に響き、水に鳴りて、魂消る一聲、

「あれえ！」

五

水は沈濁して油の如き霞ヶ池の汀に、生死も分かす仆れたる婦人あり。四肢を弛めて地に頷伏

し、身動もせで有間横はりたりしが、やうく枕を返して、頽然と頭を俛れ、やがて草の根を力に覺束無くも立起りて、踊く體を傍なる露根松に辛くも支へたり。

其浴衣は所々引裂け、帯は半解けて脛を露し、高島田は面影を留めぬまでに打頼れたり。箇は是、盗難に遇へりし瀧の白絲が姿なり。

渠は此夜の演藝を闋りし後、連日の疲勞一時に發して、樂屋の涼しき所に交睫みたりき。一座の連中は早くも荷物を取纏めて、いざ引拂はむと、太夫の夢を喚びたりしに、渠は快眠を惜みて、一足先に行けと現に言放ちて、再び熟睡せり。渠等は豪放なる太夫の平常を識りければ、其言ふまゝに捨置きて立去りけるなり。

程經て白絲は目覺しぬ。此空小屋の内に假寝せし渠の懷には、欣彌が半年の學資を藏めたるなり。然れども渠は危かりしと思はず、晝の暑に引替へて、涼しき眞夜中の幽靜なるを喜びつゝ、福井の金主が待てる旅宿に赴かむとて、此まで來りけるに、ばらりと小陰より躍出づる人數あり。

皆是屈竟の大男、いづれも手拭に面を覆みたるが五人ばかり、手に手に研澄したる出刃庖丁を提げて、白絲を追取卷きぬ。

心剛なる女なれども、渠は有繫に驚きて佇めり。狼藉者の一個は濁聲を潛めて、

「おう、姉様、懷中の物を出しねえ。」

「進退反對すると、是だよ、是だよ。」

恚く言ひつゝ、他の一個は其の庖丁を白絲の前に閃かせば、四挺の出刃も一齊に晃きて、女の眼を脅せり。

白絲は既に其身は釜中の魚たることを覺悟せり。心は毫かも屈せざれども、力の及ぶべからざるを奈何にせむ。進みて敵す可からず、退きては遁るゝこと難し。

渠は其の平生に於て曾て百金を吝まざるなり。然れども今夜懷にせる百金は、尋常一様の千萬金に直するものにして、渠が半身の精血とも謂つべきなり。渠は換へ難く吝めり。今茲に之を失はむか、渠は殆ど再び之を獲るの道あらざるなり。然れども渠は遂に失はざる可からざる乎、豪放豁達の女丈夫も途方に暮れたりき。

「何を愚鈍々々してやがるんで！ サツサと出せ、出せ。」

白絲は死守せむものと決心せり。渠の唇は黒くなりぬ。渠の聲は太く震ひぬ。

「これは與られないよ。」

「與れなけりや、踏手繰るばかりだ。」

「遣つけれ、遣つけれ！」

其聲を聞くに齊しく、白絲は背後より組付かれぬ。振拂はむとする間もあらで、胸も挫ぐるばかりの翼緊に遭へり。忽ち暴れたる四隻の手は、亂雑に渠の帯の間と内懐とを撈せり。

「あれえ！」と叫びて援を求めたりしは、此時の血聲なりき。

「在った、在った。」と一個の賊は呼びぬ。

「在ったか、在ったか。」と兩三人の聲は響へぬ。

白絲は猿轡を吃されて、手取り足取り地上に推伏せられつ。然れども渠は絶えず身を悶えて、

跋履さむしたりしなり。遽に渠等の力は弛みぬ。虚さず白絲は起復る所を、礮と踢付されたり。

賊は其隙に逃失せて行方を知らず。

惜みても、惜みても猶餘ある百金は、竟に還らざるものとなりぬ。白絲の胸中は沸くが如く、

焚ゆるが如く、萬感の心を衝くに任せて、無念已む方無き松の下蔭に立盡して、夜の更くるをも

知らざりき。

「嗟、爲方が無い、何も約束だと断念めるのだ。何の百ぐるる！惜くはないけれど、欣様に濟ま

ない。さぞ欣様が困るだらうねえ。え、如何せう、如何したら可からう?!」

渠は緊と我身を抱きて、松の幹に打當てつ。ふと傍を見れば、漾々たる霞ヶ池は、霜の置きた

るやうに微黯き日影を宿せり。

白絲の眼色は其精神の全力を鍾めたるかと覺しきばかりの光を帯びて、病めるに似たる水の面を吃と視たり。

「え、もう何とも彼とも謂へない可厭な心地だ。此水を飲んだら、さぞ胸が清々するだらう！

あ、死にたい。こんな思をするくらゐなら死んだ方が勝だ。死なう！死なう！」

渠は胸中の劇熱を消さむが爲に、此萬斛の水をば飲盡さむと覺悟せるなり。渠は既に前後を忘

じて、一心死を急ぎつ、蹠と汀に寄れば、足下に物ありて見きぬ。思はず渠の目は之に住り

ぬ。出刃庖丁なり！

是悪漢が持てりし兇器なるが、渠等は白絲を手籠にせし時、彼是悶着の間に取遣せしを、忘れ

て捨きたるなり。

白絲は忽ち慄然として寒を感じたりしが、やがて拾取りて月に翳しつ、

「之を證據に訴へれば手掛があるだらう。其内には又何とか都合も出来よう。……これは今死ぬ

のは。……」

此證據物件を獲たるが爲に、渠は其死を思ひ廻りて、逸早く警察署に赴かむと、心變れば今更忌はしき此汀を離れて、渠は推付されたりし邊を過ぎぬ。無念の情は勃然として起れり。纖弱き女子の身なりしことの口惜さ！男子にてあらましかばなど、言効も無き意氣地無さを憶出でて、

有間は其恨めしき地を去るに忍びざりき。
 渠は再び草の上に一物を見出せり。近きて熟と視れば、淺葱地に白く七寶繫の、洗晒したる浴衣の片袖にぞありける。
 亦是賊の遺物なるを白絲は曉りぬ。蓋し渠が狼藉を禦ぎし折に、引斷りたる賊の衣の一片なるべし。渠は之をも拾取り、出刃を裹みて懷中に推入れたり。
 夜は益々闇けて、宵は愈々曇りぬ。濕りたる空氣は重く沈みて、柳の葉末も動かざりき。歩むに連れて、足下の叢より池に蹴込む蛙は、磔を打つが如く水を鳴せり。
 行々項を低れて、渠は深くも思惱みぬ。
 「だが、警察署へ訴へたところで、直に彼奴等が捕らうか。捕ったところで、易く金子が戻るだらうか。未可信ものだ。そんな事を期にして遅々してゐる内には、欣様が食ふに窮つて来る。私の仕送を頼にしてゐる身上なのだから、お金が到なかつた日には、恁麼に窮るだらう。はて喃！福井の金主の方は、三百圓の内二百圓前借をしたのだから、まだ百圓といふものは在るのだ。貸すだらうか、貸すまい。貸さない、貸さない、到底貸さない！二百圓の時でも那麼様に溢つたのだ。けれども、恁云ふ事情だと悉皆打明けて、一番泣いて見ようか知らん。駄目な事だ、あの老爺だもの。一向に小癢に障る事ばかり陳べやがって、もう／＼眞箇に顔を見るのも可厭な

だ。その癖又持つてるのだ！如何したもんだらうなあ。吁、窮つた、窮つた。ヤツぱり死ぬのか。死ぬのは可いが、それぢや如何も欣様に義理が立たない。それが何より愁い！と云つて才覺の爲様も無し。……」
 陰々として鐘聲の度るを聞けり。
 「もう二時だ。はて喃！」
 白絲は思案に餘つて、歩むべき力も失せつ。我にもあらで身を寄せたるは、未央柳の長く垂れたる檜の板塀の下なりき。
 箇は是、公園地内に六勝亭と呼べる席貸にて、主翁は富裕の隠居なれば、結構數寄を盡して、營業の旁其老を樂む處なり。

白絲が佇みたるは、其裏口の枝折門の前なるが、如何にして忘れたりけむ、戸を鎖さでありければ、渠が靠るゝと與に戸は自から内に啓きて、吸込むが如く白絲を庭の内にもぞ引入れたる。

渠は有間惘然として佇みぬ。其心には何を思ふとも無く、きよろ／＼と四面を眊せり。幽寂に造られたる平庭を前に、縁の雨戸は長く續きて、家内は全く寢鎮りたる氣勢なり。白絲は一步を進め、二歩を進めて、いつしか「寂然の森」を出でて、「井戸圍」の傍に抵りぬ。

此時渠は始めて心着きて驚けり。かゝる深夜に人目を竊みて他の門内に侵入するは賊の舉動な

り。我は不圖も賊の舉動をしたるなりけり。

此に思到りて、白絲は未だ嘗て念頭に浮ばざりし盗といふなる金策の手段あるを心着きぬ。次で懐なる兇器に心着きぬ。是某等が此手段に用るたりし記念なり。白絲は懐に手を差入れつ、頭を傾けたり。

良心は疾呼して渠を責めぬ。悪意は踴躍して渠を勵せり。渠は疾呼の譴責に遭ひては慚悔し、又踴躍の教唆を受けては然諾せり。良心と悪意とは白絲の恃むべからざるを知りて、竟に迭に闘ひたりき。

「道ならない事だ。那麻様眞似をした日には、二度と再び世の中に顔向が出来ない。噫、恐しい事だ、……けれども才覚が出来なければ、死ぬより外は無い。此世に生きてゐない意なら、羞汚も顔向もありはしない。大外れた事だけれども、金は盗らう。盗つて而して死なう〜！」
恚く思定めたれども、渠の良心は決して之を可さざりき。渠の心は激動して、渠の身は波に盪る、小舟の如く、安じかねて行きつ、還りつ、塀際に低徊せり。良有りて渠は鉢前近く忍寄りぬ。然れども敢て曲事を行はむとは爲ざりしなり。渠は再び沈吟せり。

良心に逐れて恐惶せる盗人は、發覺を豫防すべき用意に違あらざりき。渠が塀際に徘徊せし時、手水口を啓きて、家内の一個は早く業に白絲の姿を認めしに、渠は鈍くも知らざりけり。

鉢前の雨戸は不意に啓きて、人は面を露せり。白絲啊呀と飛退る違も無く、

「偷兒！」と男の聲は號びぬ。

白絲の耳には百雷の一時に落ちたる如く轟けり。精神錯亂したる其瞬息に、懐なりし出刃は渠の右手に閃きて、縁に立てる男の胸をば、柄も透れと貫きたり。

戸を犇かして、男は打僵れぬ。朱に染みたる吾手を見つ、重傷に唸く聲を聞ける白絲は、戸口に立竦みて、戦々と顫ひぬ。

渠は固より一點の害心だにあらざりしなり。吾は抑も如何にして有恚不敵の振舞を爲せし乎を疑ひぬ。見れば、我手は確に出刃を握れり。其出刃は確に男の胸を刺しけるなり。胸を刺せしに因りて、男は燈れたるなり。然れば人を殺せしは吾なり、我手なりと思ひぬ。然れども白絲は我心に、我手に、人を殺せしを覺えざりしなり。渠は夢かと疑へり。

「全く殺したのだ。こりや、まあ大變な事をした！如何いふ氣で私は這箇様事を爲たらう？」

白絲は心亂れて、殆ど其身を忘れたる背後に、

「貴方、如何なすツた？」

と聞ゆるは寢惚れたる女の聲なり。白絲は出刃を隠して、屹と其方を見遣りぬ。

灯影は縁を照して、聲音は近けり。白絲は直と雨戸に身を寄せて、何者か來ると覷ひぬ。此家

の内儀なるべし。五十約の女は寢衣姿の嫺く、眞鍮の手燭を翳して、覺めやらぬ眼を睜かむと面を擧めつゝ、よたくと縁を傳ひて來りぬ。死骸に近きて、其とも知らず、

「貴方、そんな所に寢て……如何なすツ。……」
燈を差向けて、未だ其血に驚く違あらざるに、

「静に！」と白絲は身を露して、庖丁を衝付けたり。

内儀は賊の姿を見るより、平坦と膝を折敷き、其場に打俯して、がたくと慄ひぬ。白絲の度胸は既に十分足りたり。

「おい、内君、金を出しな。これさ、金を出せといふのに。」

俯して答無き内儀の項を、出刃にてぺたくと拍けり。内儀は魂魄も身に添はず、

「は、は、唯、唯、は、唯。」

「さあ、早くしておくれ。多度は要らないんだ。百圓あれば可い。」

「金子は彼方に在りますから。……」

「彼方に在るなら一所に行かう。聲を立てると、おいはだよ。」

「た、た、た、唯……今。」

「さあ早くしないかい。」

渠は立たむとすれども、其腰は擧らざりき。然れども渠は猶立たむと焦りぬ。腰は彌々擧らず。立たざれば竟に殺されむと、渠はいとど慌てつ、悶えつ、辛くも立起りて導けり。二間を隔つる奥に伴ひて、内儀は賊の需むる百圓を出せり。白絲は先之を收めて、

「内君、色々な事を言ッて氣毒だけれど、私の出た迹で聲を立てると不可から、少しの間だ、猿轡を箱めてておくれ。」

渠は内儀を縛めむとて、其細帯を解かむとせり。殆ど人心地あらざるまでに恐怖したりし主婦は、此時やうく渠の害心あらざるを知るより、幾分か心落居つゝ、始めて賊の姿をば認得たりしなり。這抑恁麼！賊は暴れたる大の男にはあらで、體度優しき女子ならむとは、渠は今其の正體を見て、與し易しと思へば、

「偷兒！」と呼懸けて白絲に飛蒐りつ。

白絲は不意を撃たれて驚きしが、虚さず庖丁の柄を返して、力任せに渠の頭を撃てり。渠は屈せず、賊の懐に手を捻込みて、彼百圓を奪返さんとせり。白絲は其手に咬着き、片手には庖丁振抗げて、再び柄をもて渠の脾腹を吃しぬ。

「偷兒！人殺！」と地踏鞴を踏みて、内儀は猶暴かに、猶氣立ましく、
「人殺、人殺だ！」と血聲を絞りぬ。

此迄なりと観念したる白絲は、持ちたる出刃を取直し、躍狂ふ内儀の吭を目懸けて唯一突と突きたりしに、靦を外して肩頭を刎斫りたり。

内儀は白絲の懐に出刃を裏みし片袖を撈得て、引摺みたるまゝ、遁れむとするを、疊懸けて其頭に斫着けたり。渠は益々狂ひて再び喚かむとしたりしかば、白絲は觸るを幸ひ滅多斫にして、弱る所を乳の下深く突込みぬ。是實に最後の一撃なりけるなり。白絲は生れてより未だ如許夥しき血汐を見ざりき。一坪の疊は全く朱に染みて、或は散り、或は迸り、或は滂沱々と滴りたる、其痕は八疊の一間に遍く、行潦の如き唐紅の中に、數箇所の傷を負ひたる内儀の、拳を握り、齒を嚙緊めて仰様に顛覆りたるが、血塗の額越に、半閉ぢたる眼を睨むが如く凝るて、折もあらば勃起と立たむする勢なり。

白絲は生れてより、未だ有恁最期の愴惻を見ざりしなり。如許夥しき血汐！有恁淺ましき最期！這は何者の爲業なるぞ。此に立てる吾身の爲せし業なり。我ながら恐しき我身かな、と白絲は念へり。渠の心は再び得堪ふまじく激動して、其身の今や殺されむとするを免れむよりも、猶幾層の危き、恐しき想して、一秒も此處に在るに在られず、出刃を投棄するより早く、後をも

見ずして一散に走出づれば、心急くまゝ、手水口の縁に横はる軀の冷かなる脚に跌きて、頭顛倒と庭前に轉墜ちぬ。渠は男の甦りたるかと想ひて、心も消々に枝折門まで走れり。

風稍起りて庭の木末を鳴し、雨は點々と白絲の面を打てり。

六

高岡石動間の乗合馬車は今ぞ立野より福岡迄の途中に在りて走れる。乗客の一個は煙草火を乞りし人に向ひて、雑談の口を開きぬ。

「貴方は何方まで？へい、金澤へ、なるほど、御同様に共進會でございますか。」

「然やうさ、共進會も見ようと思ひますが、他に少し。……」

渠は話好と覺しく、

「へ、何か公務の御用で。」

其人は髭を貯へて、洋服を着けたるより、渠は恁言ひしなるべし。官吏？は吸窮めたる巻煙草を車の外に投棄て、次いで忙々唾吐きぬ。

「實は明日か、明後日あたり開く筈の公判を聴かうと思ひましてね。」

「へ、え、なるほど、へえ、」

渠は其公判の何たるを知らざるが如し。傍に在たる旅商人は、卒然我は顔に喙を容れたり。

「あゝ、何でございますか。此夏公園で人殺をした強盗の一件？」

髭有る人は眼を「我は顔」に轉じて、

「然う。知ツて御在ですか。」

「話には聞いてをりますが、詳細事は存じませんで。ぢや彼賊は逮捕りましてすか。」

話を奪はれたりし前の男も、思中る節やありけむ、

「あ、あ、あ、一時そんな風説がございましたッけ。有福の夫婦を斬殺したとかいふ……其裁判

があるのでございますか。」

髭は再び此方を振向きて、

「然う、一寸おもしろい裁判でな。」

渠は話兒を釣るべき器械なる、渠が特有の「へ、え」となるほど」とを用ゐて、切に其顛末を聞

かむとせり。乙者も劣らず水を向けたりき。髭有る人の舌本は漸く軟きぬ。

「賊は直に其晩捕られた。」

「可恐ものだ！」と甲者は身を反して頭を掉りぬ。

「あの、それ、南京出刃打といふ見世物な、あの連中の仕事だといふのだがね。」

乙者は直に之に應ぜり。

「南京出刃打？何様、見たことがございました。彼奴等が？ふうむ。随分遣りかねますまいよ。」

「其晩橋場の交番の前を怪い風體の奴が通つたので、巡查が咎めると狐鼠々々遁出したから、此

奴胡散だと引捉へて見ると、着てる浴衣の片袖が無い。」

談此に到りて、甲と乙とは、思はず同音に嗟きぬ。乗合は辯者の顔を覗ひて、其の後段を渴望

せり。

甲者は重ねて感嘆の聲を發して、

「おもしろい！なるほど。浴衣の片袖が無い！天も……何とやらで、何とかして漏らさず……で

すな。」

辯者は此訛言を可笑がりて、

「天網恢々疎にして漏さずかい。」

甲者は聞くより手を抗げて、

「それ、恢々、恢々、へえ、恢々でした。」

乗合の過半は此の恢々に笑へり。

「そこで、此奴を拘引して調べると、これが出刃打の連中だ。處がね、丁度其晩兼六園の席貸な、

六勝亭、あれの主翁は桐田といふ金満家の隠居だ。此夫婦とも、何者の所業だか、いや、それは、實に残酷に害られたと謂ふね。亭主は鳩尾の所を突洞される、女房は頭部に三箇所、肩に一箇所、左の乳の下を刳られて、僵れてゐた其手に、男の片袖を搦んで居たのだ。

車中聲無く、人は固唾を嚥みて、其心を寒うせり。正に是辯者得意の時。

「證據にならうといふ物は其ばかりでは無い。死骸の側に出刃庖丁が捨て在つた。柄の所に片假名のテの字の焼印のある、之を調べると、出刃打の用ツてゐた道具だ。それに今の片袖が其奴の浴衣に差違無いので、まづ犯罪人は此奴と誰も目を着けたさ。」

旅商人は膝を進めつ。

「へえ、それぢや其奴ぢやないんでございますかい。」

辯者は忽ち手を抗げて之を抑へぬ。

「まあお聞きなさい。處で出刃打の白状には、いかにも賊を働きました。賊は働いたが、決して人殺をした覺はございせん。奪りましたのは水藝の瀧の白絲といふ者の金で、桐田の門は通過も爲ませんツ。」

「はて、ねえ。」と甲者は眉を動かして、辯者を凝視めたり、乙者は黙して考へぬ。益々其後段を渴望せる乗合は、順繰りに席を進めて、辯者に近かむとせり。渠は爾時巻苜を取出して、唇に濕し

つゝ、

「話はこれからだ。」

左側の席の前端に並びたる、威儀ある紳士と其老母とは、顔を見合せて迭に色を動せり。渠は質素なる黒の紋着の羽織に、節仙臺の袴を穿きて、其髭は辯者より麗しきものなりき。渠は紳士と謂ふべき服装にはあらざるなり。然れども其相貌と其髭とは、多く得べからざる紳士の風采を備へたり。

辯者は仔細らしく煙を吹きて、

「瀧の白絲といふのは御存じでせうな。」

乙者は頷きく、

「知ツとります段か、富山で見ました大評判の美艶ので。」

「然やう。そこで其の頃福井の方で興行中の彼女を喚出して對審に及んだ所が、出刃打の申立には、其の片袖は、白絲の金を奪る時に、大方斷られたのであらうが、自分は知らずに遁げたので、出刃庖丁とても其通り、女を脅す爲に持つてゐたのを、慌てて忘れて来たのであるから、設ひ其二品が桐田の家に在らうとも、此方の知ツたことではないと、理窟には合はんけれど、奴は先づ然う言張るのだ。そこで女が、其通りだと言へば、人殺は出刃打ちやなくツて、他に在るとなる

のだ。

甲者は頼杖拄きたりし面を外して、辯者の前に差寄せつゝ、

「へえ〜、而して女は何と申しました。」

「是非お前様に逢ひたいと言つたね。」

思も寄りぬ辯者の好謔は、大いに一場の笑を博せり。渠も已むなく打笑ひぬ。

「處が金子を奪られた覺などは無い、と女は言ふのだ。出刃打は、何でも奪つたと言ふ。偷兒の方から奪つたと言ふのに、奪られた方では奪られないと言張る。何だか大岡政談にでも有りさうな話さ。」

「これには大分事情がありさうです。」

乙者は首を捻りつゝ腕を掛けり。例の「なるほど」は、談の益々佳境に入るを樂める氣色にて、

「なるほど、これだから裁判は難しい！へえ、それから如何致しました。」

傍聴者は聲を斂めて彌々耳を傾けぬ。威儀ある紳士と其老母とは最も肅然として死黙せり。

辯者は猶も語を繼ぎぬ。

「實に此は水掛論さ。雖然到頭の極出刃打が殺したになつて、豫審は終結した。今度開くのが公判だ。豫審が済んでから此公判までには大分間が有つたのだ。此間に出刃打の辯護士は非常な苦

心で、十分辯護の方法を考へて置いて、いざ公判といふ日には、一番腕を揮つて、是非とも出刃

打を助けようと、手薬煉を引いてゐるさうだから、是は裁判官もなか〜骨の折れる事件さ。」

甲者は例の「なるほど」を言はずして、不平の色を作せり。

「へえ、その何でございますか、旦那、その辯護士といふ奴は出刃打の肩を持つて、人殺の罪を

女に誣らうといふ姦計なんでございますか。」

辯者は渠の没分曉を笑ひて、

「何も姦計だの、肩を持つとの、と云ふ所以では無い。辯護を引受ける以上は、其者の罪を軽くす

るやうに盡力するのが辯護士の職分だ。」

甲者は益々不平に堪へざりき。渠は辯者を睨して、

「職分だつて、貴方、出刃打なんぞの肩を持つてえ事があるもんですか。敵手は女ぢやありませんか。可哀さうに。私なら辯護を頼まれたつて何だつて管やしません。お前が悪い、有體に白狀

しな、と出刃打の野郎を極付てやりまさあ。」

渠の鼻息は頗る暴かなりき。

「そんな辯護士を誰が頼むものか。」

と辯者は仰ぎて笑へり。乗合は、威儀ある紳士と其老母を除きて、盡く大笑せり。笑寝む比馬

車は石動に着きぬ。車を下らむとて辯者は席を起てり。甲と乙とは渠に向ひて慇懃に一揖して、

「御蔭様で面白うございました。」

「どうも旦那難有う存じました。」

辯者は得々として、

「お前様方も間が有つたら、公判を行つて御覽なさい。」

「こりや芝居より面白いでございませう。」

乗客は忙々下車して、思ひ／＼に別れぬ。最後に威儀ある紳士は其母の手を執りて扶け下し

つゝ、

「危うございますよ。はい、此からは腕車でございます。」

渠等の入りたる建場の茶屋の入口に、馬車會社の老いたる役員は佇めり。渠は何氣無く紳士の

顔を見たりしが、卒に吾を忘れて其瞳を凝せり。

忽ち進來れる紳士は帽を脱して、釧の二所失れたる茶羅紗の胴衣に、水晶の小印を垂下げたる

白銅鍔の鑲を繋けて、柱に靠れたる役員の前に頭を下げぬ。

「其後は御機嫌よろしう。不相變お達者で。……」

役員は狼狽して身を正し、奪ふが如く其の味噌漉帽子を脱げり。

「やあ此は！欣様だツたねえ。どうも向者から肖てゐると思つたけれど、えらく立派になつたもんだから。……雖然お前様も無事で、然してまあ立派になんすツて結構だ。あれから直に東京へ行ツて、勉強してゐるといふ事は聞いてゐたツけが、噫、見上げたもんだ。而して勉強して來たのは、法律かい。法律は好いね。お前様は好きだツた。好きこそ物の上手なりけれ、うむ、其は善かつた。あゝ、成程、金澤の裁判所に……うむ、検事代理といふのかい。」

老いたる役員は我子の出世を見るが如く懽べり。

當時盲縞の腹掛は今日黒の三紋の羽織となりぬ。金澤裁判所新任検事代理村越欣彌氏は、實に

三年前の馭者臺上の金公なり。

七

公判は豫定の日に於て金澤地方裁判所に開かれたり。傍聽席は人の山を成して、被告及關係者水島友は辯護士、押丁等と與に差控へて、判官の着席を待てり。程無く正面の戸を颯と排きて、

軀高き裁判長は入來りぬ。二名の陪席判事と一名の書記とは之に續けり。

滿廷肅として水を打ちたる如くなれば、其靴音は四壁に響き、天井に響へて、一種の恐しき音を

威儀嚴に渠等の着席せる時、正面の戸は再び啓きて、高爽の氣を帶び、明秀の容を具へたる法官は顯れたり。渠は其麗しき髭を捻りつゝ、從容として檢事の席に着きたり。

謹慎なる聴衆を容れたる法廷は、室内の空氣些も熱せずして、渠等は幽谷の木立の如く群りたり。制服を絡ひたる判事、檢事は、赤と青と被を異にせる卓子を別ちて、一段高き所に居並びつ。甫め判事等が出延せし時、白絲は徐に面を舉げて渠等を見遣りつゝ、臆せる氣色もあらざりしが、最後に顯れたりし檢事代理を見るや否や、渠は色蒼白めて戦きぬ。這俊爽なる法官は實に渠が三年の間夢寐も忘れざりし欣様ならずや。渠は其學識と其地位とに因りて、嘗て駁者たりし日の垢塵を洗去りて、今や其面は最清に、其眉は一際秀でて、驚くばかりに見違へたれど、紛ふべくもあらず、渠は村越欣彌なり。白絲は始不意の面會に駭きたりしが、再び渠を熟視するに及びて己を忘れ、三たび渠を見て、愁然として首を低れたり。

白絲は有得べからざるまでに意外の想を爲したりき。

渠は此時まで、一箇の頼もしき馬丁として其意中に渠を遇せしなり。未だ如此に畏敬すべき者ならむとは知らざりき。或點に於ては渠を支配し得べしと思ひしなり。然れども今此檢事代理なる村越欣彌に對しては、其の一髪をだに動すべき力の吾に在らざるを覺えき。噫、濶達豪放なる瀧の白絲！渠は此時まで、己は人に對して恁まで意氣地無きものとは想はざりしなり。

渠は此憤と喜と悲とに摧かれて、殘柳の露に俯したる如く、哀に萎れてぞ見えたる。

欣彌の眼は陰に始終恩人の姿に注げり。渠は果して三年の昔天神橋上月明の下に、臂を把りて壯語し、氣を吐くこと虹の如くなりし女丈夫なるか。其面影もあらず、太くも渠は衰へたる哉。

恩人の顔は蒼白めたり。其頬は削けたり。其髪は亂れたり。亂れたる髪！其夕の亂れたる髪は

活潑々の鐵拐を表せしに、今は其憔悴を増すのみなりけり。

渠は想へり。濶達豪放の女丈夫！渠は垂死の病辱に横はらむとも、決して如許衰容を爲さざるべきなり。烈々たる渠が心中の活火は既に燼えたる歟。何ぞ渠の甚しく冷灰に似たるや。

欣彌は此體を見るより、不覺憐愍を催して、胸も張裂くばかりなりき。同時に渠は己の職務に心着きぬ。私を以て公に代へ難しと、渠は拳を握りて眼を閉ぢぬ。

聽て裁判長は被告に向ひて二三の訊問ありける後、辯護士は渠の冤を雪がむ爲に、滔々數千言を陳ねて、幾ど餘す所あらざりき。裁判長は事實を隱蔽せざらむやうに白絲を諭せり。渠は飽くまで盜難に遭ひし覺のあらざる旨を答へて、黑白は容易に辨ずべくもあらざりけり。

檢事代理は漸く閉ぢたりし眼を開くと與に、悄然として項を垂る、白絲を見たり。渠は爾時聲を勵して、

「水島友、村越欣彌が……本官が改めて訊問するが、裏ます事實を申せ。」

友は纔に面を擡げて、額越に検事代理の色を候ひぬ。渠は峻酷なる法官の威容をもて、
 「其方は全く金子を奪られた覺は無いのか。虚偽を申すな。設ひ虚偽を以て一時を免るゝとも、
 天知る、地知る、我知るで、いつがいつまで知れずには居らんぞ。雖然知れるの、知れぬのと那
 麼様事は通常の人に言ふ事だ。其方も瀧の白絲といはれては、随分名代の藝人ではないか。それ
 が、假初にも虚偽などを申しては、其名に對しても實に愧づべき事だ。人は一代、名は末代だぞ。
 又其方のやうな名代の藝人になれば、随分多數の最員もあらう、其最員が、裁判所に於て其方が
 虚偽を申立てて、其が爲に罪無き者に罪を負はせたと聞いたならば、噫、白絲は天晴な心掛たと
 云つて譽めるか、喜ぶかな。もし本官が其方の最員であつたなら、今日限愛想を盡して、以來は
 道で遭はうとも唾も爲かけんな。雖然長年の最員であつて見れば、まづ愛想を盡す前に十分勸告
 をして、卑怯千萬な虚偽の申立などは、命に換へても爲せん積だ。」
 恚く諭したりし欣彌の聲音は、啻に其平生を識れる、傍聽席なる渠の母のみにあらずして、法
 官も聽衆も自から其異常なるを聞得たりしなり。白絲の愁はしかりし眼は卒に清く輝きて、
 「そんなら事實を申しませうか。」
 裁判長は温乎に、
 「うむ、隠さずに申せ。」

「實は奪られました。」

竟に白絲は自白せり。法の一貫目は情の一寸なる哉、渠は其懐しき検事代理の爲に喜びて自白
 せるなり。

「何？盗られたと申すか。」

裁判長は軽く卓を拍ちて、屹と白絲を視たり。

「はい、出刃打の連中でせう、四五人の男が手籠にして、私の懐中の百圓を奪りました。」

「睨と然やうか。」

「相違いざりません。」

之に次ぎて白絲は無雜作に其重罪をも白狀したりき。裁判長は直に訊問を中止して、即刻此日
 の公判を終れり。

検事代理村越欣彌は私情の眼を掩ひて具に白絲の罪狀を取調べ、大恩の上に大恩を累ねたる至
 大の恩人をば、殺人犯として起訴したりしなり。さるほどに豫審終り、公判開きて、裁判長は檢
 事代理の請求は是なりとして、渠に死刑を宣告せり。

一生他人たるまじと契りたる村越欣彌は、遂に幽明を隔てて、永く恩人と相見る可からざるを

亂
菊

憂^{うれ}ひて、
宣^{せん}告^{こく}の夕^ゆ寓^ふ居^ぐの二^に階^{かい}に自^じ殺^{ころ}してけり。

「補陀落や岸打浪……」と低聲にて謳懸けたる女の順禮、笠打傾け四邊を視め、「お、岸打浪と謂へば此處は川岸、流の水の清さといひ、川幅の廣さと謂ひ、これこそ豫て音に聞く加賀に名代の手取川よな。景色も好し、風も好し、どれ、少し休んで行きませう。」と目の下は直ぐ急流の、矢を射る如き流に臨める巖に腰を打懸けて、衣紋寛げ休らひたる、憂旅なれば面瘦せて、扮装は固より窶れたれども、色白く、唇紅く、眉匂やかに、鼻筋通り、涼しき眼の内凜として、由ありげなる顔備、柄杓持つ手に似合はしからで爪はづれさへ尋常なる、年紀は二十歳の内外ならむ、世に希らしき美人なり。

前髪のごぼれたるを、細き指以て搔上げつゝ、白き額の汗ばめるを、手拭にて押拭ひ、吻と一呼吸つきけるが、涼しげなる流の音に、咽喉の渴くを覺えけむ、身を倒に巖に縋り、手にせる柄杓を差伸して流に汲まむとなしけれども、水面までは届かざるに、今一息と乗出したる、巖の下に聲ありて、「誰だ〜。水が欲くば汲んで遣らう、無暗に此處を搔廻されては香魚が遁げて迷惑

でもあり、お前にもまた危険ぢや。」と謂はれて見ればいかさまにも底の見え透く水中に、無数の鮎は群をなせり。

順禮は優しき聲にて、「心無いことをいたしました、左様ならば憚ながら、これに汲んで下さいまし。」と再び柄杓を差出せば、洞と覺しき巖の内に、主は身體を隠せるまゝ、手ばかり出して柄杓を受取り、之に一掬の水を湛へて、「いざ取りたまへ。」と渡しける。順禮は押戴き、一口飲みて舌打し、「あはれ冷たき水なれども、御心は厚きたまものなり。」と禮心の愛想を、下に聞きつゝ、打笑ひ、「白山仕込の甘露の水御氣に入らば何杯でも。」「いえ、もう澤山頂きたり。難有う存じまする。」と謂懸けて女は微笑み、「これはまあ失禮な。下に貴郎が居らるゝものを、女の身にて高上り、お頭の上に居ようも知れず、御堪忍遊ばせよ。」と身を退く氣勢を下にて察し、「何の〜女房が二階に居らぬ世でもなし、此處に斯うして居る分には、何が岩の上を歩行かうやら一々知れたもんぢや無い、喃、女房、そんなものではあるまいか。」と謂ひつゝ、噴然と噴出せば、女も袂を口にあてて、「そんなら御免蒙りまして。もし〜此處からお城下まではもう何の位ござんせうな。」「むむ、さればお城下までは五里足らず、足の達者な男なら、今から行つてまた歸るさ。」「嬉しやそんなら雑作も無い。もちつと休んで出懸けませう。したがまあ貴郎は一體、其處に何をして居らるゝぞ。」と女の問へば男の聲、「香魚を漁る」よし答へたり。「網をお打ちなさるでもなし、絲を

垂れても居られぬ様子、何うして香魚を。」と訝れば、「此處にかう狙つて居て、水上へ上るあゆを、手掴みにして漁るばかり、何の雑作も無いこと。」と語りて言途絶えたり。今や先刻より休めたる手をば再び働かして、香魚を捕へ始めしならむ、女は急に立去もせで、ちつと流を見詰めたるが、「あれ！」と叫びて飛退りぬ。襲へる敵よ、蛇か、毛蟲か。

二

手取川の上流、人家に遠きあたりには、他國に餘り類無き一種恐るべき毒蟲あり。其形蜂とも附かず蛇とも附かず、謂はば蜂と蛇との間の子にて、兩者よりも小さきものなるが、極めて鋭利なる針を有せり。土俗に呼びて、「おろ、」と謂ふ、「おろ、」は常に群をなして深林の内を逍遙し、偶會人あるを見る時は、大舉して襲ひ來る、其勢猛烈にて、如何なるものも當り難く、手を束ねて血を吸はるれば遂に死に至る事あり。はじめ唯一疋來り襲ふは「おろ、」の派する斥候なり。爾時順禮を犯せしも、件の「おろ、」の斥候なりしが、うっかり流を視めたる頬を掠めて飛びけるにぞ、順禮はたゞの蜂と思ひ、身を退きざまに袖を以て、打拂はむとする程に、斥候は高く空に飛びて、何處とも無く飛去りつ。未幾許もあらざるに、幾百千とも數の知れざる「おろ、」の大軍寄來れり。

唯見れば一團の赤き雲、雜然たる聲を發して、むら／＼と舞下り、女の身體を包むと見えし、女はあつと絶叫して、手足を煩え、身を振らせ、袖屏風に面を蔽ひて、持てる柄杓の手あたり次第、拂退け打落せば、嵐の誘ふ落花の如く、「おろ、」の死骸は紛々として、落ちて巖を埋むれども、數限りなきことなれば、手とも謂はず足とも謂はず息をもつかせず取着くにぞ、女は最早堪兼ね、「あら堪難や何とせむ。」と悲鳴を揚げしを聞着けむ、男は洞を出でて巖に攀ち、顔を出たしてこれを見つ。「南無三、おろ、」に圍まれしな、防ぎ難し、助け難し、唯此川に飛込まれよ、其後にこそせむすべあれ。疾く／＼と急立つれば、女は激流に沈まむこと、いと危しとは思へども、焦眉の急に心を決し、兩足揃へて「南無」と一聲、潑と立ちたる水烟を、見るより男は猶豫はず、後に續きて身を投じ、浮きつ沈みつ流る、女を、疾くも小脇に抱取りて、泳ぎながら口早に、「女中、苦しくとも齒を閉ぢよ、口を結んで水を飲むな、呼吸は絶えても助かるぞ、可いか、可いか。」と謂ひも敢へず、深く水中に身を沈めぬ。

こは老練なる土地の人の「おろ、」を防ぐ唯一の法にして、恐るべき「おろ、」の針も水中のものを螫すこと能はず。されども執念深き毒蟲は、何處までも其人の水を潛る天窓の上に、一團となりて附添ひ行き、呼吸を繼がむとして水面に顔を擡げ出す處を狙ひて、一齊に襲撃つなり。

されば一旦は水を潛りて「おろ、」の難を避くるとも、幾度も式の如き攻撃に逢へば、遂には呼

吸の續かずして、水に溺るゝも少なからず。但水練の達人なるは、久しく水中に潛り居りて、己が踪跡を晦まして、あはよく「おろゝ」に遠ざかるなり。幸に香魚取の若者は遠く下流に至るまで、一度も顔を出さず、片脇に女を抱へて、働き自在ならざるを事ともせず、水底深く泳ぎつゝ、もう可きころと、眼ばかり出して四邊を見れば、毒蟲はハヤ追來らず、僥倖可しと浮び出で河原に上りて、一呼吸吐き、女はと見れば、あな無慙、はや呼吸絶えて齒を切れり。

三

豫て然あらむと期したれば、順禮の絶入りたるを壯者は見て驚かず、がつくり落入る頭をば己が膝に枕せしめて、其ま、地上に横はらせ、手當をせむと胸を開けば、消残りたる膚の雪、撫試むれば暖氣あり。「これ、順禮殿〜。」と呼活け〜介抱しながら、不圖一口の懐劍ありて白き乳の下に潛むを見たり。

屹と視て小首を傾け、良猶豫ひたる手を伸して、密に件の懐劍を抜取り見むとなしける時、女は「うむ」と呼吸を返して、最細やかに眼を睜きぬ。「お、氣が着いたか順禮殿。」と然あらぬ體にて見舞ひたり。女はものも言敢へず起直りさま襟を合はせ、「はい。」とやう〜答ふるさへ疲果てたる状なりけり。

男は背を搔撫でつゝ、「心地はいかに順禮殿、もはや確になられしか。」「何とお禮を申さうやら、かさね〜の御高恩、唯お嬉しく存じます。」と聲濡むまで感謝しけるに、男は却つて迷惑なし、「禮はさて置き其衣服、乾さずばなるまじきが、私も裸でお前も單衣、其を脱いで對向ふと、とんと繪に畫いた黒奴じみて、腰に木の葉を巻かねばなるまい。いかに人目がなければとて、天道様の見らるゝ前、些憚がないでもなし。そりやもう毒を承知の上で、着たまゝ干すとした處で、其身體では旅は出來ぬ。さほど遠くも無いことなれば私の家まで一所に來て、一夜あかして發足給へ。」と最深切なる言の端、順禮は少しく考へ、「お志は嬉しけれど、此處はもうお城下に近いとやら、土地馴れませぬ私ゆゑ、もしお城下を通る時など、不調法がありますと、一夜泊めたといふ康にて、大恩ある貴郎の御身に、ひよつと御咎があつてはならぬ。泊めるとおつしやるお言だけにて、宿戴いたも同一こと。」と年紀にも似合はぬ先線に、何か仔細のありげなり。

男は片頬に微笑を含み、「其憂慮には及ばぬこと、私が村は、天領とて、越前家の持分ならず、また前田家の持分ならず、貴き御方の御領地ゆゑ、加越兩國か、はり無ければ、譬ひお前が金澤で、人殺をしようとも。」「えゝ!」「いやさ、譬が。人殺をしようとも、また躰いて轉ばうとも、私に御沙汰のある理なし。」と聞きて女は心を安んじ、「左様ならば私より強ひてもお願ひ申します。」「一晩泊めて下さりませ。」「なに、頼まるゝほどの事でもない。」と前に立ちてぞ導きける。

年紀なほ少き壯者の、眉目美はしき女に向ひて、見えも、色氣も節も無き、其人品は情を知らざる岩木の如きものにはあらで、色こそ少し淺黒けれ、靈活にして秀麗なる、またこれ一個の好漢なり。

優しき人の情によりて、順禮の女は其一夜を安らかに明すを得つ。あくる日の朝は昨日に増したる、美はしき顔色にて、金澤さして出發せり。

四

加州金澤の城主前田肥前守正四位の中將重教公、人と爲り磊落不羈におはしまして、江戸參觀の煩しきを厭ひ、致仕隱逸の下心おはしければ、我儘にのみ振舞ひ給ひけり。

斯君性として武を好み、御心飽くまで猛くして、最も砲術に達せられ、お物見の窓より、道行く婦人を狙ひて、戲に其元結を射給ふに、百發一として中らざるはなかりしが、一日のことなり、今日もまた近習四五人從へて、お物見に出させ給ひ、好き鳥來れかすと、重教公、彈装してぞ待たれける。

然るに危き御戲なれば、城下の者に怪我あらせじと、豫てより家老より令を發し、「諸家中町方の女房娘ども、忘れても御物見下を通るべからず、何時御發砲あらむも計難し。」と觸れたりけれ

ば、婦人等は謂ふも更なり、男と雖ども、傍杖を懼れて近く者無く、御物見の四邊は晝とも見えず寂寞たり。

重教公は手ぐすね引きて一時餘も待懸給へど、通行一人もあらざりしかば、公には太く倦飽ませ給ひ、「今日はなか女の見えざる。一人も來らぬ筈は無きに。」とさも不興氣に呟き給ふ。固より何時まで待てばとて、婦人の來るべきやう無ければ、近習はそれと無く君を宥め、「今日は日和も悪く候へば、婦人等は外出仕るまじ、またのことに遊ばされ候へ。」と賺しても肯入給はず、「折角の此彈丸を放たずに休むべきか。渠等が通らずば是非も無し、汝達參りて射ころなるを三人引來り、此前を通らせよ。」と少しお言暴くなれり。

近習は恐るゝ、「こは仰とも覺え申さず、民は御國の基にて候ものを、御徒然の御慰にとて態々率參り候はむにはいかばかりか君を怨み申さむ、この儀は只管に御容赦ありたく候ふ。」と交る交る諫めければ、豁達なる君は快く領き給ひ、「可し、可し、町方の者どもは別に予が養ひ置くといふ譯にもあらねば、なるほど汝等の申す如く氣まゝに弄ばむは悪かるべし。但予が扶持を遣はし置く城中の者どもは、予に因りて活くる者ゆゑまた予のために死するを得む。疾く奥に參りてまをし聞け、召使の女中どもあれなる往來へ引出せ。」と苛ち給ふは例の我儘、近習等はますます窮し、「仰御道理に候、固より君の御手並、過ちにて生命を召されむかなどの憂慮はいたさねど、

飛道具の的に立つ其者の胸中はそのいかゞ候べき、御賢察のほど願はし。」と恐るゝ申上ぐれば、重教公「ふむ、奥女中もならぬと申すか。然らば可し、汝等の女房或は娘を連れ來れ。」と御聲を激まし給ふを、當座限りの難題とは知りながら何と返さむ言も無く、顔見合せて困じける。折から町の曲角に順禮の女顯れたり。笠を背負ひ柄杓を携へたるが、御物見に近づくにぞ、近習の面々はまた吐息をつき、あらし許な順禮やな、此方にな來りそと、心々に思へども聲を懸くべき次第にあらねば、手に汗を握るのみ。重教公は欣然として鐵砲を取直したまふ。然りとも知らず順禮は、眼の下近く來りけるを、見れば美しく髮結ひし、何處にてか手折りけむ、菊の一枝を簪にしたる、自然の色香深し。重教公御覽じて、「あの花的にして射て落さむ。見よ〜。」

五

重教公は興有氣に身を構へ、銃口を順禮に差向けて、熟と狙を定め給ひつ。近習がアハヤと思ふ間に、火蓋を丁と切らるれば、轟然たる響とともに、燧と立騰る煙の裡を、唯見れば、順禮の簪の、菊は臺より弗と切れ、花片はら〜と地に落ちたり。

其御手並に感ずるよりも、順禮の膽勇寧ろ驚くべし。尋常の男女ならむには、立處に氣をも失ふべきに、順禮は少しも騒げる状なく、射て落されたる花を顧み、妖艶なる顔を擡げ、御物見を屹と仰ぎて、少しく眉を擡めしのみ、鬢の後毛搔上げつ、悠然として行過ぎたり。重教公は瞬もせで順禮の舉動を見給ひけるが、「さても心憎き女かな。誰ぞ追懸けて率て參れ。」と顧みて左右に命じ給へば、近習一人畏りて座をすべり、御門を出でて一散に後を追ひ、既に二三町行過ぎたる順禮を、「やれ、待て。」と呼留めたり。「私の事でござんすか。」と順禮は立停まる。「む、拙者とともに來り候へ。」順禮は振り返りて、「何方に召し給ふぞ。」「我君の仰なり。」と横柄に答ふれば、順禮は冷かに、「貴郎には御主人なりとも、私は少しも存せぬお方、往來の者を無體に留めて、用があるの、邸へ來いのと、それは餘り御勝手ならむ。」とすつきり謂はれて眉間に筋、「おのれ乞食の分際で、法外なることを申す、今一言申して見よ、其まゝには措かぬぞ。」と刀の欄に手を懸けて、威すつもりのお喝を、順禮は恐るゝ色なく、「切らうなら切りたまへ、私をお斬りなされては、用が勤りさうにも無い。」と遣込められて二の句も出でず。なるほどこの口なればこそ鐵砲に撃たれながら驚く氣色もなかりしなれ、底の知れざる婦人かなと、心中に舌を巻けば、弱々しき婦人と見ながら、臆を生じ、手出もならず、まご〜する内立去らば、君に復命を奈何せむと、額を撫でて沈吟する。背後へまたもや駈來る近習、「これ〜いかなさされたぞ。餘りお手間が取れる故、氣早の我君待兼給ひて、見て參れとの御意なりし。」と聲懸けられて當惑し、「順禮殿、拙者の

出やうが悪かつたれば、意地立てらるゝもさることながら、百萬石の御領主が直接御用があるとのこと、謂はば御身の身の榮なり。まげて同道いたされよ。」と我折れし言に順禮も、笑止とや思ひけむ、「そんならお召に従ひませう、御覽の通りの順禮風情、禮儀作法は存せぬゆる、もし不調法がござんしたら、御取做願ひまするぞえ。」「ナニ三指ついて侍るのは、却つてお嫌の方なれば、左様な配慮少しも無し。イヤ御足勞でござつたな。」と迎の者を顧れば、彼方の近習も苦笑ひ、「あひ變らずの御性急で、御同様に恐縮千萬。」「いざ、來られよ、順禮殿。」「はい、お連れなされて下さいまし。」と衣紋繕ふ順禮を、中に挟みて導きつ。やがて御前に立出づれば、重教公は御褥も、端近に直させられ、立身になりて待たれしが、近習歸ると見給ひて、「やあ待兼たぞ、汝等、順禮は率れて参りしか。」「あれに控へさせ候ふ。」と切戸の方を指させば、一方ならざる御機嫌にて、「あは、愉快い、其順禮、彼なる松の木に縛めよ。」

六

順禮の女を松の木に、縛めよと命ぜられたる、近習は眼を睜り、「して何と計はせ給ふ思召に候や。」と御顔を瞻れば、重教公は無雑作に、「何ともいたさぬ。あまり心憎き婦人ゆゑ、膽を打抜いて遣らうと思ふ。」「え！」と近習は蒼くなれり。君は呵々と笑はせ給ひ、「何々、命を取るに

はあらず、唯驚かして遣るばかり。彼の順禮を的にしてすべて身體を除けながら、アハヤあたると思ふばかりの、きはどき處を狙撃ちて膏汗を絞らせくれむ。先刻の渠が舉動、予に鼻をあかさしたれば、左様いたさねば腹が癒えぬ、疾く引出して縛めよ。」一旦言出し給ひては、なか／＼留まり給はざる、豫ての氣象を心得たれば、近習は澁々畏みけるが、さてこの仰を順禮に言聞かさむことの心苦しきよ、いかばかりか此方を怨みて、アノ清げなる目を以て、おつと睨まるゝことあらむか、恐らく一命覺束無からむと、がつくり投首して悄然と立上り、順禮を待たせ置きたる、お庭の切戸口に立出でて、幾度も天窓を掻き、「さてはや申兼ぬるが順禮殿、實は。」と唾を呑込み、君の仰を物語り、「尤も此まで幾人か狙撃ち給ひしかど、今に過ちて人命を斷たれしことのあるは、拙者確に存じ居れり。されば的に立たるゝとも、別に危きことなければ、眼を瞑りて従ひ候へ。其後にての恩賞はいかやうにも計らふべければ、別に御身に損はあらじ。」と謂ひつゝ、額の汗を拭ひぬ。

順禮はキリ、と眉を昂げ、「人を生的に立たせむとて、わざ／＼お呼入れ遊ばしたか、恩賞などと汚はしい、早速暇申します。」と屹と謂はれて大きに狼狽へ、「まあさ／＼、ものは聞やうで角が立つ。恩賞を進ずるなどと出過ぎたは拙者が過失。長いものにはまかれろなり。何と折れてくれずや。」といとわびし氣に謂ふを聞き、順禮は打領き、「譬ひ無體に御威勢で、人を手籠に遊ばし

ても、拒みは得せぬ賤しき者に、ことを分けた貴郎の仰、笑止と思つて下さる、其お心に免じても、可うござんす、背ませう。さあ、お連れ遊ばしませう。」と悪怯れたる體少しも無し。

近習の武士は感じ入り、「百萬石の藩中に武士の妻は多けれど、御身の如きは二人と無い。」と只管賞讃なしつゝ、も前に立ちて切戸口より廣庭にこそ伴ひけれ。

遠く見渡す廣室には、重教公を正面に、夥多の侍威儀を正して、左右にすらりと居流れたる幾十雙の眼をば、其身一人に注がれながら、順禮は肅として、庭の内に入來れり。一人の近習は繩を持ちて松の木の根に待受けつ。「此處へ」と手招きして順禮を呼近づけ其間近に進むや否や、矢庭に兩手を扼りて、有無を謂はせず松の木に犇々と縛めける。順禮は默然としてせらるゝまゝ、に身を任せつ。ものいふ如き兩眼を、ぱつちりと睜きて、一度廣間を凝視しが、其まゝ、頭を首垂れたり。最嫺なる柳腰、緑の黒髪打亂れて、節くれ立たる松の幹に身を絡ひつゝ、惱める狀、命を絶る朝顔の露重げなる風情なり。

七

用意は可しと見給ひて重教公大音に、「吉田は居らぬか、大藏々々。」と召し給へば、次の間より、「應」と答へつゝ、三十餘歳の武士一人御前に罷出たり。

吉田は累世弓術の名門にして代々名手を出しける。大藏年紀なほ少けれども、父祖の業を襲ぎ、中興の達人と謂はれたり。大藏は「御召に候や。」と御前に畏まれば、重教公指を以て彼の松の木に縛められたる順禮を指し給ひ、「あれを見よ大藏、諸士の噂にも聞きつらむが、予の鐵砲にて其簪の花を射られながら、自若として顔の色を動かさざりし心憎き女は彼者なり。予は唯何となく蔑にされたる如き心地して憎くてならず、汝弓を以て彼を射よ。予は傍に見物して其慄くを見て腹を癒むず。但罪の無き者なれば、女が手足のめぐりを射縫うて、はつゝと思はずにて足れり。必ず毛一筋をも損すること勿れ。」と命じ給へり。

大藏は飛ぶ鳥をこそ射落したる覺えもあれ、未だ生きたる人間を的になして試みしことあらざれば、如何はあらむと思ひしが、君の命なり、且はまた、譬ひ人間なればとても之を的として狙はむに、過つことはよもあらじと、一議に及ばず承引なし、直ちに弓矢取寄せて、靜に縁側に立出づれば、並居る面々且つ危み、且つ恐れ、呼吸をはずまし、唾を呑込み、寂り返りて控へたり。爾時大藏は片肌脱ぎて、弓に矢を繼ぎ立上れば、順禮の傍に附添ひたる二人の近習、逸れてはならじと慌てふためき、遙か左右に身を退れり。

重教公は御褥を迂出でて、張臂をし給ひつゝ、離業を見給ひける。大藏は振返り、「先づ那の邊を射申さむ。」と伺ひけるに重教公、「手と脇腹の間なる、八口の處を仕れ。」と「畏り候」と大藏其

ま、引絞り、精神を狙に籠め、弗とばかりに切つて放つ。矢響ともろともに、一座の面々はつと思ひて、覺えずも閉ぢたる眼を、開きて見れば奇なるかな、思ふ壺をば少しも違へず、矢は順禮の脇を掠めて、松の幹にぞ立ちたりける。

さるに重教公の見給ふ處に依れば、順禮はびくともせず、裳を拂ふ風ならでは、身を動かせし状もなきにぞ、太く不満に思召して、更に一矢を命じ給へり。

大藏は再び矢を番へて、「此度は。」と問ふ。重教公、「頭の上を。」とありければ、心得て射むとする時、君俄に留め給ひて、「待て、彼奴驚かぬには理由あり、差俯向きてアハヤ今、射らるゝと謂ふ處を見ぬ故、さまで心の騒がぬなるべし、いで其面を上げさせよ。」と小膝を拍ちてのたまへば、大藏狙ひながら聲を懸け、「やをれ順禮面を上げよ。君の御意ぞ。」と呼ばはりける。言下に順禮は顔を擽げたり。

同時に長く溢れたる前髪はらりと振分かれて、洩出でたる眞白き顔は、雨後の月とや謂ふべからむ、最清らかなる眼を開きて、忘れるばかり引絞れる大藏を睨と見て、ニツとばかりに笑うたり。

大藏はこれを見るより、思はず拳の鈍りければ、再び三度じり、くくと、強ひて狙を定むれども、我にもあらで手元狂ひ、心確かに定まらねば、固より一髪の間を過ちても、人の生命を失ふこととて、むざとは切つて放ち難く、背に冷き汗を流して、狙替へ、狙替へ、幾度か勤めけれども、遂に射出すことを得ず、弓矢をがらりと投落して、「我未だ未熟なり。」と切なき聲にて呻きける。

八

「何といたした大藏。」と君に言を懸けられて、大藏は平伏し、「申すも憚多きことには候へども、一度順禮の妖艶なる面を見たりしより、唯何となく腕鈍りて、鐵をも射抜かむす心も弱り、恍惚として見る眼も定かならず、如何いたしても狙固まらず候ゆる、射外して渠の一命を奪らむは、君の思召に背くことなれば留め候。あはれ手向ひ來る敵ならば、夜叉にも眼まじろがじとこそ、大藏密に存じをり候ひしに。詮ずる處は業の未熟なるにて候はむ、美しき婦人は世にも恐しき者にて候ふ。」と率直なる弓取なれば、ありのまゝにぞ申しける。

いやはや御前をも憚らず、大藏は苦々しきことを謂ふ男かな、一國荒々しき豫ての御氣象、花月の情は知し召さざる君の思召いか、あらむと、本人よりも左右の近習顔を根めて汗を流せり。重教公は意外にも噴出し給ひ、「は、は、は、予の前にて怪しからぬことを申すな。」と戯に詰り給へば、大藏決然たる面を上げ、「某弓術を以て御扶持を戴き居りながら、仰的を射ることなら

す甚だ恥入候。はや御暇賜はるべし、此ま、浪人仕る。」と思入りたる氣色を御覽じ、「否予の鐵砲と雖も、今莞爾と打笑ひし順禮が顔に向うては、平氣にて狙を付け得むとも思はれず、最早射るには及ばぬなり。さるにても彼の順禮、婦人の身にて、恚まで膽の据ればこそ、一旦心憎く思ひしものが今は唯感ずる外なし。かほどの婦人を此ま、に他國に遣らむは惜からずや、汝邸に連歸り、いかにもして説勧め、我城下に留まらせよ。もし汝が熱心ならば宿の妻にせむも苦しからず、城中に引取りて奥にて召使はむも亦可なり、いづれにもせよ、餘所の國に手折らせな。」大藏は迷惑げに、「女は恐しきものにて候ふ、對向ひてものいはむも心苦し、此儀は平に御免候へ。」重教公は頭を掉り、「イヤ婦人の美しきに魂を奪はれて、予が命に背きたる其罰なりとこそ、ろえよ、免すことはあひならぬ。」と哄笑しながら左右を顧み、「汝等よきやうに取計らひ、順禮に駕籠を與へて、後より大藏が家に送届けよ。大藏、「はッ。」順禮にな、予が謝罪たと申聞けよ。」畏り候。

君は其ま、御入りあり。續きて大藏も退出したりければ、近習等は命を奉じ、さまゝ順禮を勤りつ、駕籠を仕立ててこれに載せ、吉田の家に送らむと、道を大手通に取りて行懸れる、前途に一行の人数ありて、肅々として來るに會へり。

駕籠に添ひたる者どもは、それと見るより土下座をなし、恭しく跪く、前後に陪從を從へたる、白面朱唇の美少年、馬上豊かに手綱を搔練り、靜々と近附きつ、衝と通過ぎて打たせ給ひぬ。駕籠の中より、「もし、唯今のアノ殿は。」とお、順禮殿は御存じあるまい。彼こそ當代の光源氏と噂の高級大音の君、御當代重教公の弟君にて渡らせ給ふ。」と聞くや否や順禮は、「なに、大音の君にておはすとや。」思はず顔を差出して、屹と見送る眼の中に一種の電光閃きて、前には矢表に立ちながら自若たりし顔色の俄に少しく變りたり。駕籠昇は怪訝顔、「おや、順禮はギョツとしながら、「はてお美しい。」と左あらぬ體。

九

重教公は太く順禮が膽勇を愛でさせ給ひて、其ま、城中に召置かむと思はれしが、前にも既に説ける如く、お奥にも稀なるべき美人なれば、色を愛でて、然すると人の思はくを憚り給ひ、且つは大藏が其とは無き言の端も、心ありげに聞なし給ひつ。固より傍に引附け置きて寢覺の御眺にも爲給はむする心は更にまします、天晴なる名花をば御身の國に植置かむと謂ふ唯それだけの御つもりなれば、故と一先づ大藏の邸に順禮を遣し給ひて、さて其様子を見給ひぬ。

其後大藏より、件の順禮は、なにがしなる浪人の孤兒にて別に繫累とてななき身なれば、何處を指して赴くと謂ふあてもなし、落着くさきもあらざるから賤き者とお厭ひなくば、あはれ當

國に留まりたしと、申居る由言上して、早く城中に引取給へと申上げけれども、君はいましばらく、く、くにて、強ひて大藏の許に預け給ひつ。其内には大藏の實際の心も解るべく、いよゝ彼にして順禮を戀ふる心のあらざるを認めむには、直ちに奥にて召使はむと思ひ給ひて、するく二月あまりも大藏が家に差置かれたり。

さるほどに順禮は、何ともつかず大藏に寄食して、多時月日を送りけるが、固より弓術の名門とて、門生夥多出入しければ、時々順禮の姿を垣間見ることありて、一圖に色戀の沙汰と思ひ取り、所々方々に觸廻すにぞ、其實際を知りたる者も申戯に故と更りて祝儀を送り來るもあり、或は全く大藏が新婦を娶りしと謬りて、眞面目に壽を陳るもありて、其沙汰漸次に激くなりて、突飛なる若手合は五七人組をなして、大藏の處に押懸行き、新婦を見せよと戯に難題をいふに至りけるにぞ、大藏は堪り兼ね、一日君前に伺候して、「いかに、我君、前日より屢々御催促仕れど、今に順禮を引取り給はず、某が身にもなりて御覽あれ、活物のしかも婦人といふ恐しきものを預りたる、其迷惑一方ならず。某も何となく彼者我家にありと思へば、窮屈にて、今まで女氣のなかりし時の如き、我儘も致し難く、朝夕心置かれて弱入るばかりか、逢ふ者毎になぶり立てて腹が立つて堪り申さず、翌日にも御引取下されずば、某家を棄てて逐電いたすべく候なり。」と眞顔になりて怒を帯び、憚る色なく申しければ、重教公、「可、可、可」と領き給ひつ。こゝに於て順禮を

はじめてお奥に召給ふに定りける。翌日御奥へ成らせらるれば、女中頭の老女御前に出でて、「君の仰に候とて大藏殿より差上げし、順禮の女とやらむ、お次に控へさしましてござりまするが。」と御顔を見て伺へば、重教公領き給ひ、「膽の据りたる女見所あり。此方にて召使ひ、奥の守護に仕れ。」と唐突の御仰に、老女は眉を打擧め、「素性の得知れぬ女にて候、お召使の儀はいかゝあらむ。」と心には太く君の無雜作を驚きぬ。

然るに放縱なる君なれば、「素性などは何うでも可い。」と少しも頓着し給はざるほど、老女はいとど懸念して、「身分に似合はしからぬ容貌、いかにも胡亂に候へば。」と恐るゝ推返せば、呵々と笑はせ給ひ、「顔などは何うでも可、唯彼の膽玉が入用なり。」と取合ひ給ふ氣色なれば、老女は衝と膝を進め、「もしや隣國の間者、な、そこは御分別遊ばして。」と皆までは聞給はず、「間者でも何でも可、予が使へば予が家來、屹と忠義を盡さして見せう。」と四邊構はずのたまひし御聲襖の外に洩れて、お次に控へし順禮は、思はず手足をわな、かせり。

十

亂 菊

順禮の女は不圖せし事より公に思はれ、其まゝ召使はるゝに定まりて、實貞院とて二の丸に住ませ給ふ當代の母公の腰元に召されつ。君が鐵砲にて射給ひし時、挿頭の菊の散りたるに因みて、

名を亂菊と賜ひしが、城中無雙の美人なりと、噂は忽ち高かりけり。

重教公は太く亂菊の人となりを受給ひて、足繁く二の丸にならせられ、常に其膽勇を賞し給ひけるが、一日また母公の前にて腰元どもを打集へ、傍なる亂菊の却りて迷惑がるに介意なく、例の如く渠が沈勇を賞めそやし、「予に家來は多くあれども、恐らく汝の如く膽の据りたる者は得難からむ。」とのたまひけるに、亂菊は遮りて、「何時も御賞美にてお恥かしや。手を背後に身動きもならぬ様、縛められて的に立てば、いかなる臆病者と申せばとて、騒がぬのは當前、何の珍しうございませう。殿方はまた格別、驚破と謂ふことあらむ折には、君の御馬前に塞がつて、敵の矢表に立ちながらちつとして騒がぬこそ誠の勇士に候なれ。」と身を謙る其床しさ、君は一層感じ給ひ、「いや、理窟を謂はば然もあらむが、予が眼の未だ届かざるか、さほどの者は見當らぬ。」と慨然としてたまへば、亂菊は顔を擡げ、「さなのたまひそ、我君様、御城中の勇士達は申すにも及ぶまじ。私がお世話になりし大藏殿のお邸に、新參の庭掃男、丈助と申す陪臣なん、さほどの事はいたしかね候はぬを、況してお歴々の武家方は。」と言懸くるを急に遮り、「ふむ、其は耳奇の事を聞く。して大藏の下男とやらは如何なることを致せしぞ。」と問はせ給ふに膝を進め、「されば其丈助と謂ふ庭掃男、大藏様のお邸にて、門弟の衆のお弓の稽古なさるゝを見て、さても矢といふは緩々と飛ぶものかな。寝鳥こそ射られもせむ、眼のある者を何として射ることの出来べきぞと、一度ならず、二度ならず、口癖のやうに申しては冷笑ひ候ひしが、ふと門弟衆の耳に入り、奇怪なること申す奴、其儀ならば引出して射倒してくれむすとて、大藏殿の大人氣なしと、お止めありしが了簡せず、彼の丈助を連行きて稽古場的に立たせ、入交り、立交り、散々に射懸けしを、丈助は少しも騒がず、微笑みながら打落し打拂ひ、一矢も身にはあて申さず、餘のことに大藏殿、自から彼を射伏せむと、三の矢まで放たれしが、一本は口に、二本は兩手に、何の苦も無く取りました。」と勢附けてぞ語りける。

重教公は小首を傾け、「亂菊、予をば弄ぶな、何とて左様のことあらむ。」と疑ひ給ふ氣色なり。亂菊は熱心に、「仰までもござりませぬ、不思議の手並に門弟衆、大藏殿も口を揃へ、何うしてそんな術を得しぞ、と舌を巻きて問はれしに、丈助は唯打笑ひ、里に育ちし私が、いかでか武術を存じ申さむ。但私の在所といふは、手取川の上流にて、流に近く候ゆる、夏にもなれば戯に香魚を捕へ候が、別に釣などいたすにあらず、疾き流の水の上へ衝と上らむとする、香魚を、手捕にいたす業に、馴れたる眼より見る時は、矢の飛ぶ如きは何として香魚の疾さに及ばぬゆる、手掴にいたすこと別の仔細も候はず。と謂ひしに皆が手を拍つて、果は笑になりましたを、私も物蔭よりそつと覗いて見て居りました。」と手に取る如く語りけるを、君は膝を進ませて聞惚れてこそ

まし〜けれ。

吉田大藏の下男丈助と謂へる壯俊のさばかり名人の射たりし矢を三條まで請留めつることはし
 も、隠れなき事實なり。謂傳へ語繼ぎて、之を知らざるは無かりしが、怒ることのまた君の耳に
 入らむには、例の御氣象とて直ちに其技倆をば御覽じなむ、御覽するはさて可けれども、御意に
 合ひて召抱へむなどのたまはむは必定なり。渠も素性は知れざる者、うかとは御傍に居らし難き
 を、一旦謂出し給ひては、意をまげられべき君にあらず、既に亂菊が一條さへあるものをと、分
 別ある家老豫てより諸士を戒め、其こと露ばかりも御聞に達する勿れと命じたれば、君が徒然に
 浮世談話をせさせらる、時と雖も、近習は心得て、言を其に及ぼさざるにぞ、君は更に知し召さ
 ざりしに、不意も亂菊の口より洩れて、一度これを聞き給ふや否や、早速其者を召出せと大藏に
 命じ給ひて、老臣どもはそりやこそと眉を擧めけれども、おほせなれば拒まむ術なく、唯密に亂
 菊が差出口を尋るのみなり。

さるほどに重教公は、丈助を召出して、此度も大藏に弓を取らせて、其離業を御覽ありしに、
 誠亂菊が語りし處に少しも相違なかりしかば、今の世の稀者なり、賤しき下男の境遇に捨て置く
 べきにあらずとて、直様丈助を引上げて、近習の列に加へ給ひつ。白山の麓なる白峰村の生なり

と謂ふに因みて、白峰丈助とぞ名乗りける。

最も君寵淺からず、丈助もまた心を盡して能く事へ、朋輩には謙りて人をそらさぬ才物なれば、
 成上りの新参者として、之を憎む者絶えて無く、何にまれ君の無理なる我儘を言出で給ひて近習等
 が持餘す時も、丈助の諫むれば、快く領きたまふほどのお氣に入なるを以て、却りて重寶がられ
 たり。

一朝のことなりし、丈助少し時後れて出仕なし、君の御前に畏みける、耳許にドンと一發、鐵
 砲の音轟然として、襖、天井に響渡れり。近習は不意に驚きて啊呀と顔を蒼くする。丈助唯一人
 平然たる面を上げ、唯見れば君が手にし給へる鐵砲の銃口より、白き煙を吹出したり。

丈助は言靜に、「こは如何なる思召にて渡らせ給ふや。」と伺へば、重教公は高く笑ひ、「唯ほん
 の串戯なり。しかし聞け、今奥にて召使ふ亂菊と申す腰元は、嘗て予が不意に鐵砲を放ちて其元
 結を射切りたるに、顔の色をも變へざりしぞ。婦人にさへさばかり豪膽なる者あるに、予が傍な
 る男どもは、いづれも膽玉の小さき奴ばかり、口惜く思ふに因りて、汝はいかにと試みたるに、
 泰然たる狀天晴なり。彼の矢を擲む早業と其膽力に加ふるに予が最愛なる鐵砲の打方を、汝も心
 得たらむには、此上いかばかりか頼母しかるべきに。」ともの足らぬ氣におほせらるれば、丈助は
 平伏し、「某存じ居るには候はねど、山里に育ちたる身の、兎打つ術ぐらるは心得て候ふ。」とさ

も頼母しき言の綾、重教公は膝を進め、「なに聊か心得て居ると申すか。」丈助、「否、たゞ眞似方ばかりに候。」重教公、「應、然らば一番手並を見せよ。いかに丈助。」と呼懸けて今御身が射給ひたる鐵砲にて、襖の傍に拇指大の穴の出來たるを指され、「あれを的に、いざ此場にて。」

十二

傍聞せる近習等は、さても由なきことを謂出して難題なる目を見るものかな、彼の的いかにして射らるべきと、笑止に思ひて丈助の顔を見る、然るに丈助は沮める色なく、「ともかくも試み候はむが、お座敷の内にては憚あり。」と皆まで謂せず重教公、「なに、予が居室を予が許す、誰が何と申すものぞ、はや仕れ。」と性急なり。

畏りて丈助は靜に鐵砲を取上げたり。固より其の道心得あるにあらねば見事射中つべしとは思はねども、負けぬ氣象にて一旦廣言を吐きたれば、今更引き難き羽目となり、いかゞはせむと丈助も少しく吐胸をつきけるが、機才ある壯者なれば、咄嗟の間に屹と案じ、彈丸を籠むると見せて素早く之を口中に拔取りつゝ、其まゝちつと狙ふ眞似して、手際よく火蓋を切れば、彈丸なき鐵砲の他を傷くる理由なく、襖には君の射給ひたる拇指大の穴唯一つ存するのみ。外に毛ばかりの傷も着かざりしにぞ、君をはじめ近習の面々、之を丈助が手品とは思ひも寄らねば、感激の餘、

喝采の聲も出でばこそ、呆れて眼を睜るのみ。

重教公も御感ありて、當座の賞に一口の劍を賜ひて、「汝にさほどの手並あれば、予も相手ありて張合あり、此頃に獵を催して腕試をなさむ。」など語り給ふ。

折からお廊下を荒らかに踏みて足早に來りたる一個の老人、頭髮恰も銀の針を植ゑたる如く、頭艶やかに兀げて、てかゝと光を帯び、一雙の眼鼻の如きは、加藩隨一の劍客にて小森牛山と謂へる一國者、詰所に控へてありけるが、豫て君の我儘を苦々しきことに思ひ機會あらば御意見申さむと欲したりしに、其日のお居室の内の發砲といひ、殊に再度の銃聲に堪へ兼ねて出來り、御前に無手と坐して、先づ近習等を睨廻し、「只今の砲聲は何物の惡戯なるぞ、よもや我君にてはおはすまじ。」と聲を激まして詰問せり。

重教公は毛蟲親仁とて嫌はせ給ふ牛山の一喝に少し悄氣で、苦笑して黙し給へば、近習等も何と謂出さむ言も無く、顔見合はせて、逡巡せり。牛山は臂を張り、「いや、方々、何とか御挨拶ありたきものなり、ものを問ふに、答をせぬ法やある。」とむづかしく捻懸くれば、止むことを得ず丈助を顧みて、「此男なり。」と低聲に謂ふ。牛山聞くより眼を瞋らし、「なんと、御居室の内の發砲は、丈助御身の惡戯よな、惡戯にも法こそあれ、怪しからぬ事を致す、其趣意語れ。」と詰寄り、丈助は首を低れ袴を撫でて答無し。牛山は疊懸けて、「さあ、其所存いはつしやい。仕儀に因

りては其分に差置かぬぞ、老生屹と心得あり。」となみならざる劍幕に、丈助のますく困するを見て、重教公我故に渠を苦しむる笑止さよと、傍より、「實はな、牛山、予の所爲ぢや、丈助に越度は無いぞ。」と丈助のために執成給へり。牛山は丈助を流眊に懸けて君に向ひ、「さては我君の御戯にて候ひしか、いや、我君とても容赦はいたさぬ、以ての外の事にて候。」

十三

牛山は開直りて容儀を正し、「今日に限らず承ればお物見より往來の者を射て、其驚くをば御覽じ手を拍ちて喜び給ひ、無二の御慰となさる、由、畢竟はと申せば砲術の御鍛錬なるより御慢心起りし虚を襲ひ、魔が魅したらむも計り難し、あはれ君、鐵砲などいふ飛道具は、つまり足輕の致すものに候なり。大將ともなるべき者が、兵法、劍法をこそ御修行ありて、其道に誇りもし給ふべけれ、鐵砲如きが何、何の役にか立ち申すべき、敵が楯を持てばそれまでにて、鐵をも射抜くと謂ふ譯には參らじ。」と御氣色をも顧みず、思ふまゝに陳立てたり。君はさして怒らせ給はず、「汝、劍法を心得たればとて、誇大なることを申す、いかに劍とてもよも鐵を斬ることは能ふまじ。」と冷かに笑ひ給へば、牛山は腕を扼し、「こは、口惜きことをのたまふものかな、餘人は知らず憚ながら牛山は鐵をも斬ることをよくし候。」と事も無げに言放てり。

傍若無人の其言、君も心憎くや思しけむ、「む、然らば牛山、見事鐵を斬つて見すべきか。」牛山は、「易きほどの事に候。」と猶豫ふ色なく答へたり。さらばとて重教公は近習をして寶藏より一個堅牢を極めたる梅鉢と銘せし兜をば取來らしめ、二重蓋の箱の中より恭しく取出して之を牛山の前に据ゑられぬ。固よりお家の重寶にて、祖先が數度の戰場に矢丸の中を潛りながら掠傷の痕だも無き世にも稀なる名器なり。「いざ仕れ、牛山。」と重教公屹と牛山を視給へば、「心得て候。」と腰の物をば取寄せつ。秘藏なる來國俊を膝の邊に引寄せて、「御免。」と謂ひさま一閃電光、大上段に振冠れる、主は聞えし手練なり、劍は希代の業物なり、殊には老人一徹なる、滿腔の烈火盛に燃えて、一心こゝに凝りたれば、何條鐵の斬れざるべき、呀と打下す手の牙に、アハヤ眞二ツと見えたる瞬間、「や、や、しばらく。」と白峰丈助、先刻より一言も發せざりしが、急に遮りて、「待たれよ、牛山殿。」と押留めたり。

牛山は氣を抜かれ空しく刀を控ふれば、丈助は進出でて、「天晴の御兜、塵埃が懸つて口惜く候、某拭うて參らせむ。」と下に敷きたる袱紗を以て、靜に兜を押し拭ひ、「これにて貴殿の刀に果つるとも、兜に憾は候まじ、いざ、遊ばされよ牛山殿。」と向を直して身を退りぬ。

心得たりと牛山は再び刀を掉上げしが、一旦銳氣を折かれたれば、氣合の抜けたること甚しく、見事に之を切割らむこと、我ながら覺束なしと、心鈍り、氣阻み、打下ろすべき勇氣も失せつ。

さりとして一度抜きたる刀をむざと鞘にも納め難く、其ま、少時猶豫ふほどに、目はまじろぎ、膚は撓みて、遂に切附くることだに得せず、背に冷き汗を流して、「死罪。」といひさま刀を棄てて恐入りてぞ領伏しける。

重教公は、毛蟲親仁の屈したるを快く思ひ給ふのみ、過言のお咎もなかりしかど、牛山這々の體にて退出し、恥ぢて同僚にも面を合はさず、其ま、家路に就きけるが、お壕の石垣に添うて歩行みつゝ、思はず無念の齒がみをなし、憤然たる雄たけび高く、「牛山老たるか？」と大喝して、來國俊を抜打に石垣に切附けしが、刃も溢さず、石二三寸斬込みたりとぞ。

十四

牛山もし其言の如く一刀の下に兜を兩斷したらむには、重教公は到底渠に對して威嚴を保ち給ふこと能はざるに至りしならむ。

はじめの牛山の氣勢にては、誠に鐵をも斬得つべく見えしかば、君も手に汗握り居られしに、丈助が機轉にて體好く君に花を持たせしよりお覺え彌増しにめでたくなりぬ。

然るに丈助は君寵衆に超えたれども、何等の功名とてもあるにあらず、侍に取立てられたるさへ過分なりと衆評喧しかりしかば、さすがに君も憚り給ひて、知行の如きは實に些少なるもの

なりしが、一朝希代なる機會ありて、丈助は祿一千石を食むに至りたり。蓋し重教公が獵に出給ひし其途次のことなりける。

牛山が面を侵して諫め奉りし以來、君もや、謹慎し給ひてお物見にも出られず、漫に鐵砲を弄び給はざりし、徒然の鬱を散ぜむとて、秋の半ばの殺氣に乘じ、近郊に獵し給はむとて、少數の近習を引從へ、微行して出られしが城の門を出ると齊しく、駿馬に一鞭打あてて疾風の如く駈出し給へり。陪從はいづれも徒歩なれば力の限り疾走すれども續き參らすことを得で、瞬く間に君の後姿を見失ひ、心頻に慌てつゝ、喘ぎ／＼追うたりける。

重教公は一鞭に長途を飛ばして、早くも市街を出離れ給ひ、漸く馬の呼吸をつがせて、陪從はと後方を見返り給ふに、從ひ來る者一人も無く、唯纔に丈助のみ、満面に汗を被りながら、御馬傍にぞ引添ひたる。

其面をば視給ひて、「汝は、快き男かな。」とばかり再び手綱を搔繰り、前途を急ぎ給ひしが、繩手路の傍に稻田を隔てて、一叢の森の木の間より鳥居の見ゆるを御覽じて、忽ち駒を住められ、馬上に一揮し給ひたり。

丈助は、傍より、「あはれ、我君ほどの御方が、何者にか禮拜をし給ふらむ。」と呶くが如くに謂へば、重教公、「知らずや、汝、彼處に神の見え給ふ。」と語り給ふを聞きも敢へず、「さては、神

の見え給ふとや、何處に〜。」と丈助は、爪立しつ、伸上り、森の邊を望みながら、「某には見え申さず候。」と眼を擦りて呟きけるにぞ、君は漫に失笑し給ひ、「む、然もあらむ、汝が如き微々たる者にはなかく見ゆることにはあらず、千石以上の侍には確に拜まれ給へども。」と誠しやかにのたまへば、「何條さることの候べき。」と丈助は頭を掉る。重教公も行懸り、「汝も千石取になつて見よ、予は虚言を申さぬわ。」丈助、「然らば我君、一寸某に千石下され候へ、面前神を拜みたく候。」と思込みたる氣色なるに、重教公は片頬笑みて、「可、一寸千石遣はさう。」「難有候。」と謂ひつゝ、社の方を視めて、俄にはツと平伏し、「あら尊や、天満宮の御姿歴々と見えて候。」「左様か、來れ。」と重教公、其ま、打たせ給ひけり。

其日の御獵果てて後、丈助はお陪従先の草鞋なりにて、一軒々々家老の邸を、「某今日我君より千石拜領いたしたれば、よしなにお取計ひ頼みよがる。」と挨拶して廻りけるにぞ、國老大いに驚きて、君に其由申上ぐれば、重教公は、唯其場限のことと思召されしに、案外なるに吃驚されしが、お氣に入りのことなれば、「我失言の過失なり。今更變替は成難し。」と故障なく千石の大祿を賜りける。此丈助は何者ぞ、はじめ手取川の上流にて、亂菊を助けし香魚取の、彼と此との間には何等かの祕密なくばあらざるなり。

十五

却説亂菊が事へたる二の丸の實貞院は、重教公の母公と申せども、産の親にてはまします。當主は先代の妾腹なり。然れば名を聞きて思ふ如き、然る老年にはまします、未だ三十二の女盛殊に石婦にておはしければ、五つ六つ若やぎて見え給ふ。最も當家の妻妾中に、きこえし艶婦なりけるが、重教公御孝心淺からねば、おのつと母公の御威勢備はり、御奥に輝く月とや謂はむ、人皆光を仰ぎたり。

茲に重教公、同腹の御弟、大音の君と呼べるあり。乙の君とも謂ひ習はし、小立野の大音なる別業に居給へるが、また御孝心篤くして、母子の禮を重んじ給ひ、月に三回、一日には、缺かさず二の丸に詣で給ひて、實貞院の御機嫌を伺ひ給ふぞ例なりける。

今日は九月一日、御入の日なりとて、腰元等は早朝よりおのゝ化粧に念を入れ、あるほどの衣ども引散らして、装凝らすも理なり。若君御年紀十七歳、容顔玉を欺きて、風采優に御心しをらしく、殊に文字に秀で給へば、腰元賤婢の末々まで、及ばぬ戀に憧るゝを、亂菊は唯一人冷かなること氷の如く、朋輩の喧噪くを空吹く風と聞流して、若君の名だに知らず顔なり。

辰の刻少し過ぐる頃、から〜と鳴るお鈴の音に、それ御光來ぢやと、待構へたる腰元等、群

雀の起つ如く、むら／＼ぱつと御鏡口に出迎へたり。渠等を前後に従へて、大音の君廊下を渡り給へば、兩側の部屋々々は、残らず細目に襖を開けて、御姿を拜まむものと、種々の顔を出だす、眼と眼の間を静々と御通りありて、やがて母公の御居室にと入らせ給へり、此方より老實に事へ給へば實貞院も産の兒の如く慈しみて、月三度の御對顔を樂になし給ひ指折數へて一の日を御待兼、斯くとも見るより褥を離れて座に請じ、「もう／＼待遠に思ひました、ようぞ參られたる。」と麗かなる御氣色、固より慕はしき母君の爾く我を愛で給へば、大音の君も嬉しげに、「何時も御機嫌美はしく、此方も御恵にて恙無く候。」と作法正しき御挨拶崩れぬ言の規律き中に、母子の愛情油然たり。

斯くて母公は若殿に茶菓など懇に饗應し給ひつ、打解けて御物語ありけるが、不圖思附きて實貞院、「折角の御入に風情のあらで曲が無し、幸ひ庭の菊盛なれば、菊を題に歌會を催しませう、腰元を集めて御判遊ばし御慰になさるがよい。」と勧め給ふ。大音の君は數寄の道、「其は又なき興に候はん、豫て御堪能と承る次手ながら母上に御教を請けたく候ふ。」と豫て歌に堪能なるを聞き給へば、好き折から其御技倆のほども見給ひたき御心。母公とても心は同一、「いえ／＼妾が何として汝のをこそ見ま欲しけれ。」とて取敢へず腰元に其用意を命じ給ひける。

若君判者となり給ひて御一座の歌會と聞くよりも、女中達は皆飛立つ思ひ、色に騒ぐは忍すべきも、こゝに憎むべきひそ／＼談話、「お歌の會とは耳寄な、あの順禮乞食を一座させ恥搔かして遣りませう。」と老女より謂出せば、豕の如く肥えたる腰元連に頷き、「其がなにより、成上りの亂菊、歌など知らう道理は無い、ねえ貴女、」とまた一人は顧みる、これも頷き、「眞赤にして遣りませうね、お、面白い。」と勇み立つ。

斯くて歌の會は開かれたり、實貞院の指揮として腰元は皆御庭に出で、詠得たる歌は短冊に記して銘々菊の枝に結附け置き、不殘揃ひたる處にて、若君が其甲乙を判じ給ふこととせり。蓋し君の御傍にありては窮屈ならむと思遣り給ひての計ひなるべけれど、中には若君と室を同じくせざるを遺憾く思ふもありけり。されど君邊にては飽くまではしたなき振舞もなり難ければ、亂菊を辱めむと企てたる連中には、君の眼の及ばぬ處、寧ろ却つて好都合。

十六

鶴は身を群鷄の中より抽きて唯一人亂菊は、遙か彼方に亭としてイめり。渠は常に朋輩夥間の除物にされながら、心細く思へる狀無く、はた淋し氣なる風情もあらず、大方の者は人中にて己が容れられざるを見る時は自然心怯けて太く沮喪するが習なるに、亂菊は朋輩の己を容れざるが、却つて其身の超越せる所以なるを知れるが如し。要するに亂菊は他と雲泥の差ある境遇にあるこ

とを示せるなり。

老女等はこれを見着け、其と眼注せして二三人亂菊の間近に來り、彼の冢の如く肥えたる腰元、青柳と名ばかりしをらしきが先づ口を開き、「亂菊どのお歌が出来ましたか、定めしもう出来たので、どれ一寸お見せなさいまし。」と遠廻しに攻め始む。亂菊は横を向きて言無し。紅と謂へるが傍より、「さう御惜み遊ばすな、何うぞ見せて下さいまし。」と故意と口を謙るは、やがて附上らむ襦染なり。亂菊は尙ほ無言なるに、老女は聲を荒くして、「これ亂菊、人様がものをおほせあるに何故黙る。」と角目立てば、亂菊は止むを得ず、「はい。」と一言返事する。老女はなほも聲を勵まし、「はいではあるまい、歌が出来たらば見せよと申すに。」亂菊は、「出来ませぬ。」とばかり冷かなり。青柳は憤然と顔、「なに出来ぬとはえ、」はい歌などは存じません。」と亂菊の言放てば、老女はたと睨め附けて、「何と謂ふ、これ亂菊、歌などは存ぜぬとは、さも／＼歌を申めたる言振上が御催しの歌會を、そも何と心得てか、嘲りをつたに相違無し、其儘には差置かれぬぞ。」と喧嘩買ふ氣の言語質。亂菊は懊惱さに言譯もせて取合はねば、張合無けれど棄ても置かれず、「何申譯はあるまいが、其氣で謂ひやつたに相違無い、可し、このこと御前へ申上ぐる。」と鬯り立てて踵を返せど、亂菊は落着きて、顔の筋一本も動かさず。老女は案に相違して、後を旨くと眼で教へ、不承々に立去りける。

青柳老女に入交り、「何うでも歌を御存じないか、てもさてもお笑止な。もし其代に順禮唄は嘸御上手でございませう。」と素性を謂ひ立て辱かしむれど、亂菊少しも心に介せず、知らざるもの如くなり。

紅はさも申めたる語氣を以て、「歌を知らぬ分際で何うして歌の會へ交つたらう。」と謂へば青柳合を入れ、「墨でも磨らうといふ氣か知らぬ。」紅は急に差出で、「なに墨を磨る隙があれば殿様にござまをお磨り遊ばす。おほ、」と冷笑す。

時しも歌を詠みしまひて、手を空しうせる腰元等は、青柳等に應援せむと、二人三人集り來りて、大勢亂菊を取圍む。青柳は氣競ひ出し、「紅どののお口の悪さ、如彼いふ憎らしいこといふ口は、斯うしてお遣りなさるが可い。」と亂菊が堅く結べる朱唇を力の限り捻り上げ、「それ斯うして、」と捻返せり。

亂菊は死灰の如くに立ちつゝも、眉は我知らず一閃して、思はずも眼を閉ぢたり。花顔柳腰の年少婦人、其態のたをやかなる、風にも堪へじと見えながら、渠の膽の大なるは、爾き害迫を容るゝに足るか。

青柳は其弱らざる内は満足せず、「此位では不可ませぬか、そんなら憎い青柳めを、斯うしては何うでございます。」と亂菊の眞白き頬を平手でひしと打据ゑたるが、亂菊の手出しをせぬに、「お

や未だ不可ませぬか、と其堪忍強きに呆れたり。

紅はもどかしがり、「青柳どのの酷いこと、え、見てるてさへ腹が立つ。これ亂菊、黙つて居ないで斯うしてお遣り。」と髪を掴みて引撈れば、丈なす黒髪颯と亂れて、櫛笄の地に落つるを、青柳は裳を揚げ、庭下駄に懸けて踏碎く、先刻より心地好げに見物せる腰元等、我も我もと、亂菊を搏つやら、蹴るやら、捻るやら、散々な目に逢はせて哄と笑うて棄去りけり。

取残されし亂菊は、しばしがあひだ石の如く、身動きもせで立ちたるが、や、瞠きたる眼中には、あはれ暗涙を湛へたり。張裂く胸を壓へつゝ、淺ましきまで手籠にされ、取亂したる姿を視め、我につらかりし腰元等の、群がる方を吃と見て、唇に微笑を浮べ、「ふむ、田舎者が。」と呟きけり。斯く呟ける言の内には、何等かの意味の籠るなり。

十七

一室の内には大音の君、腰元等が歌の揃ふを待ちて甲乙を判じ得させむと、暫時控へ給ふ間に、母公に御自作を促し給ひけるが、實貞院は思ひ懸けざる氣色にて、「妾も數寄の道なれど、御身に見せむほどの歌とては更に無し。」と辭し給ふが却つて床しく、「何をおほせられ候やらむ、不肖に御遠慮は候まじ。」と若君は子として親の教を請けたき願、母公の心はこれに違へり。「いえ母が御

身に見するなれば、尙のこと拙ないのが恥かしい。」と慎ましげに見え給ふほど、若君は床しさ増りて、切に御腕前の見ま欲しく、「隔心おはすこそ怨なれ。餘所ならぬ不肖に候ものを。」と故と打怨じ給ひける。

實貞院は當惑し給ひ、「お、さほど謂ふなら是非も無し。思切つて見せませう、したがこれ拙いとて、かまへて妾をさげすむまいぞ。」と御顔を少し赧らめ給へば、「勿體なきおほせかな。」と大音の君は畏み給ふ。實貞院は色紙を取りて、筆を染め給ひつゝ、「此歌、人に沙汰あるな。」と若君を戒め給へば、若君、「心得候ふ。」と言を番へ給ひけるを、母公なほ推返して、「きつとぞや。」と念を入れたり。若君は微笑みながら、「御念には及び申さず、慥に心得候ふ。」と誓ふが如く答へらるれば漸く心を安じ給ひ、色紙を染めて筆を擱き、口の裡に讀返して、少時猶豫ひ給ひしが、「いざ。」とある聲少し震へつ。若君は座を開き件の色紙を押戴き、讀み給ひしが色を變じ、「こは……母上。」と言ひ懸けて、母公の顔を窺ひ給へば、實貞院は面を蔽ひ、差俯向き給ひしが、良ありて顔を上げ、「返歌を給へ、大音の君。」とのたまふ色は火の如し。大音の君は打案じ、「今歌枕候はず、またの日に仕つらむ。」と辭ふを聞きて氣色を損じ、「譬ひ否ぢやとおいやつても、御身が母を強ひたる通り返歌聞かねばなりません。」と強ひられて若君は、固此方より強ひしなれば、言免れむに言無く、「さりながら。」とばかり口籠りて俯向き給へば、實貞院も返事を待ちて、雙方共に黙

然たり。

若君は不圖心着きたる状にもてなし、「最早腰元のが揃ひつらむ。」と呟く如くのみたまひつゝ、立端わるげに座を退き、庭の面に出給ふ。後姿を吃と見て、實貞院の眼の色は、常に變りて見えた

りけり。斯くて若君は、菊の枝々に結付けたる、銘々の短冊を一葉々々検め給へば、腰元等は心の内に我歌こそと思へりしに、一首も是はと若君の、御眼に留まるはなかりしが、最後の一片には眼を注ぎて、幾度か打吟じ、裏を返して見給ふに、讀人の名は記して無し。若君は傍なる腰元に示し給ひ、「此歌最めでたし、誰がこれを詠出でたる。」と問はせ給へば打視めつ、「つい見たことの無い手跡、青柳どの、紅どの、もし御存じでは無いかい。」と呼懸くれば立集ひ、「どれ一寸お見え遊ばして。」と短冊を賜りて、額を鳩め、右瞻左瞻、「なるほど見事に書きましたか、私どもではござりませぬ。」と口を揃へて答へける。

若君は打傾き、「然らば此處に漏れたる女の、他には無きか。」とありけるに、女中頭の老女ずらりと見渡し、「左様、亂菊と申す新參の腰元、此處に居合はせ申さねど、彼は下賤の女にて、歌などは存じますまい。」と可い加減な當推量。若君は兄重教公が御自慢の腰元亂菊、一度は見て置かむと思ひ給ひ、「む、其の女呼んで見よ。」とおほせに青柳桐聲揚げ、「亂菊どの、君が召します、

亂菊どの。」と呼立つる。

亂菊は召に應じて、直ちに參らむとはしたりけれど、太く髪の亂れたれば、御前に出づるには憚ありと、手早く扱きて巻附けしが、毛をとむべき櫛笄は、先刻微塵に碎かれたれば、髪を握りて四邊を見るに、恰も可し清げなる白菊の咲出でたるが手近にあり。これ屈竟と折取りて、黒髪の束にぐいと挿し、其ま、御前に參りける。

戦場の武士が差物とも謂ひつべき、花の挿頭の目覺ましきに、城中一の美人なれば、一層引立つ亂菊の風情に蹴落され、腰元等は顔色なし。若君は亂菊が艶なる態を御覽じて、ものをも謂はでおはせしが、老女の少しく高聲に、「これが召しました亂菊。」と申上ぐるに心着き、それよと以前の短冊を、「此歌汝は知らざるか。」と亂菊に見せ給へば、あふぎ見て、「はい、名も無き者が詠みました。」「汝か。」「いえ聞覚えの歌にて候。」渠は實に手爾遠波を解せしなり。

若君は感に堪へ、「さるにても草書の美はしさよ。」と頻に見惚れ給ふにぞ、老女をはじめ青柳、紅。え、それだから憎い奴。

單に重教公が寵愛あるだに、嫉み猜む亂菊の、また大音の君の御氣に入りて、中原の鹿渠が手

に落ち懸る様子を見て、皆々瞋恚を燃すが中にも、老女は實貞院が腹心の女中頭、當時二の丸一杯に蔓りたる、意地悪き年寄なれば、殊に亂菊を目的の敵になし、あはれ亂菊に毛ばかりの越度もあれかし、死なぬまでに苦めくれむと、始終熊鷹眼を刮きける折から、今日亂菊が無断にて菊を折り、挿頭となせるを見るよりも、得たり賢しと片頬に笑み、大音の君の御歸館を見送り果てて、待て〜彼奴を折檻して、泣面搔かす方法ありと、實貞院の御居室に参り、御傍の腰元を殘らず遠ざけて、犇と寄添ひ「時に御前様、亂菊は顔に似ぬ悪性、乙の君へ戀を仕懸けまする。」と聲を密めて囁きける。實貞院は大音の君の返歌もせず歸られしを憤りて、くさくさし給ふ矢先なり。「え、何と謂やる。」と鬱ぎたる顔を上げれば、老女は吻を尖らせ、「知し召さるゝ通り城中無二の美人なれば、若君きつと御心迷ひて、手を出したまふは知れてある。御前様、母君の御身として、棄置きたまふわけには参りますまい。」とあとかたもなき虚構ごと。實貞院は氣色を變へ、「憎や、あの亂菊が。」と片膝立てて煙管を杖。仕濟したりと聲を低くし、耳に吻を接けぬばかり、「成上りの横着女郎、きつと御成敗なされませ。御前様にも戀の敵。」「あ、これ。」と慌しく制し給ひ、「餘の女等とは事違ひ、重教公より私に御預けあるあの亂菊、さて我が隨意にもなし難し。」と太き呼吸を吐き給へば、老女はちやつと飲込みて、「其にこそ好都合、御前様は御存じ無けれど、今日しも若君に御謁見を致すとて、亂菊の美色を銜はむ心から、御秘藏の初霜、な、彼の白菊を無體

に折つて、這奴が頭に挿しました。其仕たい三昧、根はと申すと、君の御最良を笠に着て、御前様を無いもの同然、これ見よがしにするのでござる。お悔しう存じ上げます。」と、油紙に焚附くれば、實貞院は烈火の如く、憤怒の餘りにももの謂はれず、煙管を掴み給ふめり。

こゝぞと老女は舌なめすり、「花盗人を御懲らしあるに、誰が何と沙汰しませう、いで目にものお見せなされ。」と思ふさま哄誘かす。實貞院は切齒をなし、「呼べ、呼べ、亂菊を、此室へ呼べ、許しは置かじ。」と眉逆立ててのたまふ折から、己が部屋に下らむとて、亂菊お廊下を通懸れり。

老女は眼ざとくこれを見て、「これ亂菊召しますぞ。」と呼入れたり。亂菊は引返し、御前に出てて手を支へしが、果して白菊を挿頭しけるにぞ、實貞院は堪兼ね手にせる煙管を振上げて、亂菊の不意をえいと搏つ。亂菊ひらりと身を交はし、「何と遊ばす。」と兩手を膝に、身を構へたる五體の備、劍を能くする術者の如く、一寸の透もあらざれば、打外づして疊を撲はし、苛ちに苛ちて實貞院が、再び翳せる煙管の答は、徒に空にあり。老女は背後に詰寄りて、「何を遊ばすとは何、何の口で申した。汝や御秘藏ある御庭の菊を、我まゝに折つたで無いか。」と一喝され、ものに動ぜぬ亂菊も、はつと心着きてぎくりとする、襟首を無手と取つて、「現在茲に。」と謂ひながら、老女は挿頭を奪ひて亂菊の頬に押當て〜、「何と亂菊、それこれぢや、それこれぢや、言譯ある

か。」と責めたりけり。

身に覚えある過失に、亂菊返す言も無く、「あゝ、濟まぬこといたしました。御存分に遊ばして。」と罪に伏して悪怖れず、老女はむゝと打領き、「御前様それ御存分になされませ。」と亂菊が黒髪両手からみて、其額を疊に磨り附け、悲鳴を揚げよと苛なめば、待構へたる實貞院も、口へは出されぬ腹立を、拳に籠めて煙管の亂打。皮肉は管に音するまで、齒を喰ひ切りて亂菊は、苦痛を堪へて聲立てず、身も動かさずおつとして、責め倦飽むをぞ待ちたりける。

斯れば人形を搏つに齊しく張合無ければ手を留めつ。煙管を落して實貞院、疲れし腕をさすり給へば、髻を掴みて引き起され、亂菊蒼き顔を上げ、「これでお許し下さりますか。」とぢつと見られて實貞院は、其眼光に身を竦め、「あれ呪むよ。」と身ふるひせり。

老女は此位にては満足せず、「汝、御前様を呪むよな。可し、眼も眩むやう仕置をして遣る。」亂菊は首を低れたり。豫め未來の苦痛を知る、現在の苦痛は更に甚だし。其胸中はいかならむ。

老女は腰元どもを呼出だし、「其大膽者仔細ある、お庭に引出し縛り上げよ。」と頤もて亂菊を教ふれば、青柳等御意は可と、亂菊の両手を取つて、左右より引立てられ、脛も露はに曳かれ行く。後に二人は額を鳩めて慘なる刑を相談せり。

十九

身の上を蟲に鳴かせて亂菊は石燈籠に縛められつ、唯一人月夜の庭に在り。恐らくは腰元等の好き犠牲を得たりとなし、老女の指圖をも待たずして、思ひのまゝに責め苛み、半死半生にしたりしならむ、亂菊はハヤ弱果てて、腰の紅ちらめくばかり、居住ひ崩せる膝を枕につくりと打伏したる、衣紋背の半ばに脱げて、眞白き肩の露はなるに、血紅點々皮破れて、答の痕を印したり。雪の腕は背に捻ぢて、堅く嚴く縛められ、丈に餘れる黒髪はふさ／＼と地に溢れて、投出したる脛を蔽ひ、風に戦ぎて最凄じ。菊香薫じ露白く、月明かに冴えながら、目もあてられぬ慘状かな。

斯る時しも同一庭の紅葉の茂を搔潛り、拔足しつ、四邊を見廻し、立顯はれたる忍扮装の壯士、屹と領き進寄りて、亂菊の耳に口をあて、「秀松どの、秀松どの」と極めて低聲に名を呼べば、正體なかりし亂菊が俄にびくりと身をふるはし、「え、私の實名呼びたるば。」と蒼白き面を擡げつ、瞰下す男と眼を見合はせ、「や、貴下は丈助様……」「しッ、これ、多日お逢ひ申さぬが、さて變りたる此形態、手痛き責にあはれし様子、心懸りは互の身の上、もしや御身の素性をば、何かの端に氣取られて、其を拷問せられしならずや、最憂慮し。」と憂ふる色あり、亂菊は呼吸も絶げに

頭を掉り、「否、其御心配御無用なり。君が寵愛したまふを、嫉まれて居る私ゆる、朋輩の婦人どもが、さも無きことにもめくじら立て、越度もあらばと狙へる矢先、今日私が不注意にて庭に咲きたる菊の花を折取りたりとて此折檻、もうわけもないことなれば、其内には許されませう。必ず案じて下さんすな。したがまた貴下には何用ありて夜夜中、ようまあ忍んで来たまひし。」と謂へば彼方は打領き、「されば聞かれよ、亂菊殿、待構へたる機來りて、此度いよく重教が江戸参観に上ることに思懸なく定りたるが、内々様子を探り見るに重教例の我儘より、太く参観の勞を厭ひて、世を譲らむする心あり。尤も拙者折に觸れて、物に託けそれとはなく、隠居を勧め試むるに、甚だ其意を得たるが如し。されば此度を幸に旨く重教を隠居させ、將軍家の御連枝一方、養子となして當國に首尾よく下すものならば我君松平左京の殿の遠謀即ち成就せむ。然るに彼の大音の君は、重教公の實弟なれば、いかに口實を設くるとも、血統を差置き養子をせむこと、到底家老共が承知すまじ。こゝでこそ秀松どの御身が役目は始まるなり。即ち何等かの手段を以て大音の君を失ふべきは既に承知し居られんが、いよく重教江戸に上りて、留守にならむず其折には少しも早く大音の君を押し付けて呉れねばならず、おん身にぬかりはなかるべきも、念のため此事を打合せむと人目を忍び、辛くも此處に來りしなるが、きけば御身はお奥にて、一方ならぬ憎みを受けて、今眼前の此慘狀。いかでか、其身を全うして、重き務を果すを得べき。こり

や、「一思案。」と言懸けたる語を遮り慌しく、「あれ、寢音が。」と制する亂菊、丈助靜に四邊を見廻し、「む、大事な。落葉の聲なり。」

二十

良ありてまた丈助は、「元來御身は左京の殿に大音の君を刺せよといふ、其命をこそ受けられたれ、生命を捨てよとの仰はなし。尤も大事の業なれば、望を遂げし其上に、身を全うして遁れむこと、萬に一つも得難からむが、止むを得ざれば是非なけれど、なるべくならば生命を助り、首尾よく江戸に歸らむこそ、君の本懐なるべきなれ。今見る如き有様にては御身の身の上覺束なし。もし志を果さぬ前に、責殺さるゝことなどありては、渠も殺さず、御身も死して、蛇蜂取らずとなりもやせむ。我いかにもして手段を繞らし、大音の君を失ふべければ、御身は早く此處を立退き直ぐ江戸表に歸られよ。君のためとは謂ひながら、纖弱き婦人の身を以て、此年月の憂難、よくも今まで忍ばれしな。おいたはしくこそ存するなれ。」と最しめやかに慰めたり。

先刻よりこゝに演ぜられたる對話に就きて考ふるに、(左京の殿)と呼ばれしは、其頃幕府に老中たりし、松平左京何某其人ならむ。

元來加賀の前田家は幾十外様の大名中に唯一の大藩にて、米粟豊かに民肥えたり。然も寒國の

武士は筋骨堅く、霜雪に鍊へたる兵氣鋭なり。加ふるに加越能は遠く幕府に隔りたれば、其國情を察し難き、北國空に鬱結せる、陰慘極り無き黒雲は、幕府の眼を遮りて、國の内幕を見せしめず。されば小心翼翼として、諸侯の腹を探るを以て得意とせる幕府が、姑息の政略は、この闇黒裡を窺ふに苦みて、且つ忌み、且つ憚り、心を置くこと一方ならぬに、當代の重教公年々歳々病と稱して、めつたに參觀されざるより、何かの企圖なからずやと、枕を高くすること能はず。あはれ方法の如何を問はで、將軍家より一人の連枝を下しこれを前田家の養子となすことを得べくんば、彼我の關係密かに、其國の動靜も手に取る如く察するを得て、便宜この上なかるべしと、老中松平左京、密に謀をめぐらして、さてこそ憚は二人の者を加賀に下せしものなるべし。

爾時亂菊は頭を掉り、「思ひも寄らぬ仰かな、効なき婦人を左京様の御鑑定にて、大切の刺客に擇ばれし此上もなき身の譽、折角此まで漕着けながら何仕出した功も無く、何うして阿容々々歸られませう。」と謂ふを留めて丈助が、「いな、功なしと誰が謂ふ、我は御身に先立つこと、半歳餘りの以前より、此國にと下り來りて白峰村に身を潛め、城中に入込むべき手段をいろく盡せしも、何分大藩の捷嚴しく、容易に手蔓を探り得て空しく月日を送りつる、所作なきまゝの川遊び、手取川の上流にて、香魚を捕ふる其折から、料らず御身の危難を救ひ、氣を失ひしを介抱するとて、不圖見つけたる此首は見覺のある品なるより、隱家に伴ひて、互に機密を明し合ひ、御身は

我に先んじて首尾よく國主に召されたる、其手引にて幸にも我この便宜を得たりしのみ。御身の執成なかりしならば、いかで重教公に昵近して渠を掌中に弄し得べき。これ皆御身の賜物なり。」と謂ひつゝ、またもや四邊を視めつ。

二十一

丈助なほも語を繼ぎ、「我が重教の傍にありて謂出す言の一つとして用ゐられざることもなきも、固は御身の周旋にて、かほどの便宜を得たりしなる、これを江戸へ土産として立退かむも亦可からずや。後は拙者また人を見立てて、大音の君を刺さしむべければ、其邊には憂慮なく、疾く此處を出でられよ。外の案内我知れり。伴なうて參らせむ。」と繩を解かむと手を懸くるを、亂菊肩にて押し、「さては貴下は私を効なき者と見られしか。あゝ、さりとは口惜し。朋輩とて、老女とて、何の高が田舎者、私が旨く立廻りて、皆の者に憎まれず、それこそ亂菊々々と可愛からる、其仕方を知つて居らぬにあらざれど、聞きたまへ、丈助様、私は女の心弱く、人に優しくせらるれば、それだけむかうに恩を着て、おのづと刃も鈍る道理、それでなくても重教様の私を思つて下さるゆゑ、時としては仇するのが空恐しい氣もするを、お奥の者の誰彼にもさうく恩を被せられては、遂に目指す大音の君に手向ひ難くならうも知れねば、却りて皆に憎まれて、非道

な折檻せらるゝ方が身は苦しうても氣は樂にて、口惜いのや、切ないのや、腹立たしいのを胸の中におつと堪へてゐる時は驚破といふ時快く例の望が遂げられます。其故此上何の様な虐たらしい目に逢はうとも、些少も大事ござんせぬ。其様な事はお案じなさらず、貴下は貴下のお役目を立派にお仕遂げ遊ばしませぬ。」と長物語に舌乾きて、さも切なげに咽入りつゝ、「後生でござんす、丈助様、水を一杯飲ませてたべ。」と謂ふに丈助心得て、其處等見廻はし手水鉢の柄杓に水を汲み、へて、自らぐつと一口呑み、「人目を忍べば最易き水一杯も調へ難く、手水鉢より汲みたる水、拙者既に毒味をしたり。氣味悪からむが呑まれよ。」と口のあたりに差寄すれば、震附きてがくりとのみ、「えゝ、忝ない、お志お嬉う存じます。譬へば貴下が大音の君で、そして私が此様に心で拜む分にては、迎も刃が向けられませぬ。それを思へば憎まれて苛まれるのが却つて僥倖。な、さすれば私の身の上はお案じには及びませぬ。また彼役目もいかにもして仕遂げてお目に懸けますれば、お心安くおはすべし。私を此處に縛め置きて、後にてまたせむやうありと、腰元どもが先刻のほど、囁いて去つたれば、追着再び来る時分、人目に懸ると一大事、はやお表に歸りたまへ。」といと潔よき烈婦の魂。丈助思はず亂菊の項を抱きて背撫擦り、「天晴我君左京の殿おめがねこそ恐しけれ。ようこの女性を擇ばれしぞ。さはれ此上今一層責苛なまれて堪ふべきや。」といといたくしき筈の痕をちつと瞻る眼に涙。亂菊はものをもいはで振仰向きし唇に淋しき笑を洩らしてけり。

丈助屹と立揚り、「さらばなり、秀松殿、しかし望を達する上は、いかにもして斬抜けて、江戸表に遁げられよ、かるはずみばしせらるゝな。」「健固でおはせ、丈助様」さらば。と見送る男の影、遠ざかるまゝ、思はずも、力なき膝踏しめて、つと爪立ちて伸上れば、蹠踏く足に倒るゝ身體、燈籠の笠に仰倚りて、唯見れば渡る雁一聲。

二十二

斯る時しも亂菊の肩を掴みて動す手あり。「こりや待遠かつたであらうの。」と乾びたる聲を懸けて、石燈籠の後より、顯はれ出づるは老女なり。これに續いて實貞院、紅傍に引添うたり。實貞院は老女に向ひ、「最早時分は可からうぞや。先刻申附けたる通り、女めをそれ可いやうに。」と頤をしやくつてお指揮あれば、老女は委細畏り、責道具を携へたる紅を顧みて、「其細帯を解いて貸しや。」紅、「何になさいまする。」老女、「泣喚くとやかましい、口を結へて吠えさすまいため。」と聞いて紅にこゝ顔、「さあゝ汚れても大事ない。」と解きて渡す細帯を丸げ、亂菊の頸に手を懸けて、半ば死したる顔を擡げ、口に捻入れむとしたりける、亂菊は眼を睜き、「左様な事をなさらずとも聲を立てはせぬわいな。」と細き聲にて押留めたり。老女は少しく極悪氣に、「可し其なれ

ばやめにする。」と細帯を返せば實貞院、「大事ないか、これ老女、人を呼ぶと悪いぞえ。」と憂慮はしげに見え給ふ。老女は亂菊を知る者ゆゑ、「一條繩では行かぬ奴、そんな憂慮御無用。」と謂ひつづ紅を摩き、「それ紅。」「合點でござんす。」

老女は燈籠に纏ひたる繩の餘を引解きて、松の樹に投懸くれば、枝を潜りて垂下る、其片端をば受取る紅、「亂菊どの、堪忍しや、御上意ぢや。」と繩を手繰りてぐいと引けば、縛められたる亂菊の、手は空さまに空を掴みて、踵は地を離るゝほどに、總身の筋はひしと鳴りて、骨も砕けむばかりなるに、何かは以て堪るべき、さしもの女丈夫苦と叫び、顔色草と變じけるが、呼吸つかひ最苦しげに、「花盗人の御仕置は斯う遊ばすが御家風か。」と朱を奪ひて紫なす其唇は戦きたり。實貞院は眉を釣り、「あら憎らし、あの口に、ものな謂はせぞ、打て、た、け。」と芝生を蹴つて苛ち給へば、紅が齎したる、女竹を老女引取りて、「お、家風なり斯うするが。」と罵りながら振翳す、とたんに御錠口の戸を敲きて、「亂菊、亂菊は居らぬか。」と呼ばせ給ふは重教公。

夜更の御入來、圖に無い事、あれはいかにと三人が、不審の耳を敬つれば、確に君の御聲にて、「母上に至急逢ひたし案内を頼む、こりや亂菊、もう寝をつたか、いかゞいたした。亂菊々々。」と呼ばはり給ふに、いづれもはつと顔見合せ實貞院先づ慌たゞしく走り入る。老女も太く狼狽へて、「後を頼む。」と謂棄てつ。とつばくさと駆込むにぞ、紅は呆氣に取られ、思はず繩を放ちければ、亂菊の身はどうと落ちさま、石燈籠に脾腹を打ちて、うむとばかりに呼吸絶えける。

二十三

「はい、はい、はい、はい、今開けまするでござりまする。」と老女お錠口を引開くれば、先より唐戸を打敲きて、待兼給へる重教公、つかつかと御入あり、恐入りて平伏せる老女を見向きもし給はで、直ちに母公實貞院の御居室へとならせ給へり。

實貞院も逸早く座に復り、何喰はぬ顔色にて、威儀嚴なり。重教公が突然参られしは母公に暇乞をし給はむためなり。御言には、「豫て江戸参觀の面倒さに、二年續けて不参なし、今年も参らぬつもりのところ、江戸の風聞穩かならねば、公儀の思はくも如何あらむと、老臣共が日夜の心配、餘り氣の毒に存するより過日やうく諫を容れて、江戸に上るに極めたるが、早御出立候へと、うるさく急かすが氣に入らず。ものに託つけ日を延ばし、散々氣を揉ませて遣つたればさまではと存じ、いよゝ明朝は發程つもり。これより直ぐに表に参り、俄に左様觸を發して、渠等が不意を驚かし、慌つるを見て笑うてやらむと、既に心も定めしゆるゑ、一寸暇乞に來りしなり。來年御目に懸るまで、安らかにおはせ、母上。」と唐突に申されける。蓋し卒急を好ませ給ふ、豫ての御氣性御存じあれば、實貞院驚き給はず。「御心を直されて江戸参觀あらるゝとや。俄の離別、

お名残は惜しけれど、思立ち給ふ明日は吉日、心静に發程給へ。お家の爲には祝着します。」と母は母だけの見識なり。重教公はあたりを視め、「お、先刻より亂菊の見えざるは。」と急に復た思出して呟き給ふ。實貞院は思はず、どきり。亂菊を呼べとありては、今此場合に妙ならずと、實貞院は笑に紛らし、餘り急な御供觸、侍衆の狼狽思ひ遣らる、悪い戯を遊ばすこと、オホ、と故と他を謂ふ、重教公も打笑ひ、「なに愉快い。左様いたさねば出發榮無し。時に亂菊はいか、せしな。これへ呼出し給へ、渠にも名残を惜ません。」となか／＼動き給はぬにぞ、實貞院は太く窮し、「喃、老女は居やらぬか。」と亂菊は召さで老女をば呼出しける。

老女も的切其事と、兢々御前に出でけるに、實貞院は素知らぬふり、「殿様が御意遊ばす、亂菊は何うしやつた。」と自分の當惑を人に譲り。老女はとむねをつき、「はい、病氣ぢやとて臥り居ります。」とあはよく言抜けしが何の効なく、重教公、「病氣でも大事ない、推して參れと左様申せ。」老女、「いや取亂して居りますれば、御目見得の儀は御容赦ありたう存じます。」と體の可い中返事、重教公は肯入れ給はず、「餘計な遠慮いたすに及ばぬ。其方早く行つて連れて來い。」と一旦言出し給ひては枉げ給はぬぞ御氣性なりける。

老女は返す言も無し、「畏りました。」と迂り出でしが、さて／＼弱つた。今もし亂菊御前に出で、口惜紛れに一切を謂うて退けむか、些細な越度に、手荒き折檻、固より不當とは我も知る、豫て御最良の婦人なれば、君の思召はいか、あらむ憂慮し。先づともかくも紅に亂菊の様子を問はむと考へながら廊下を行く。耳許に極低聲、「モシ御老女様。」と呼ばれて思案の顔を上げ、只見ればがつくり弱果てたる亂菊を肩に懸けて、來懸る紅屈託顔、「モシ御老女様、亂菊どのは呼吸を引取り、「ヤ」「イエサやう／＼呼活けはしたなれど、それ此通りおあひだでござんする。部屋へ寢して介抱しませう。」と謂ふに老女は驚きて、「介抱どころでは無い哩の。何うぞ御前に出しともないと、氣を揉んだがさて埒明かず、何うでも連れて來いと斷つての御意、苦しい切羽ぢや、喃紅、御前様や私がことは、旨く言ひくるめる法もあれ。笑止なは紅、和女飛だ目を見やらうぞ。」と喝されて蒼くなり、「え、滅相な、常日頃はともかくも、今夜は御前様のおほせでしたこと、其を私に被せうとは、まあ／＼飛んだことかな、お情ない。」とどきまぎするを、見て取る老女、「詮方おぢやらぬ。長いものには巻かれろと諺にも謂ふ通り、御前様の御威勢で、罪を和女に押被せると、そこは陪臣の悲しさで、御前には口も利かれまい。斯ういふことの身替も、御奉公と斷念めて、往生したか可からうぞや。」と嵩に懸つて無理を謂ふは、紅を困らして渠をして亂菊を宥めさせ、己が首尾を繕はむす下心。

果せるかな紅は亂菊の背撫擦り、「モシ切なうござんすかえ、お腹が立たうが堪忍して、今御前へ出なすつたら、病氣でこんな取亂すとか、何とか旨くおつしやつて、アノことは忘れても、謂はずに置いて下さいましよ。これまで無情うあたりまして、憎い奴とお思ひならむが、御老女様が無理ばかり、私の身にもなつて見て、何うぞ庇うて下さいましな。」と苦しい時の神頼み、手を合はしてぞ拜みける。

此時までも死したる如く、正體なかりし亂菊は、紅の肩に凭たせたる顔を上げて莞爾と笑み、「殿様へ告口して、貴女方を困らす様な卑怯な女と思つてか、慮外ながら亂菊、さもししい心は持ちませぬ。」と言清しく承引きて、身の節々も碎くるばかり、苦痛に堪へねど心を勵まし、しやんと立ちたる氣丈の烈婦、紅は胸撫下し、「お、難有い。」と曇聲。お廊下に立ちながら、己が櫛に亂菊の亂髪を撫附けて、「これで少しは落着いた。」と後姿をつくく、視め、姿ばかりか心さへ、やさしき者をいかなれば、今まで邪慳にしたことごと、悔悟の涙を浮べつ、前へ廻りて紅は、亂菊の顔差覗き、「お顔の色が悪いねえ。」と保ち兼てや一雫。

亂菊却てこれを慰め、「病氣ゆゑと申しませう、お憂慮なさんすな。」と謂ふに猶更堪兼ね、「ええもう一層殿様へ、いうて退けたが可うござんす。」と打立きながら導きたる、後に老女は腕を拱き、「てもした、かな女ぢやな。」

紅は襖の外に竊聞して、亂菊が重教公に謁見せる様子を窺ふに、君は果して渠が狀の尋常ならぬを訝り給ひ、其仔細を問はるゝに、亂菊は約を違へず、病氣と言繕ふを聞くよりも、紅は伏拜みて、「なんにも謂はぬ。」と口の裡。

亂菊が病と謂ふにぞ、重教公は其容體を憂慮ひ給ひ、醫師のことなど懇におほせ置かれ、養生せよとて休息を賜ひし後、母公に辭してお表に歸られけるが、即夜直ちに命を傳へて、飽食の諸士が安眠を驚かし、迅雷耳を蔽ふに違あらせず、金澤の城を發足せ給ひぬ。

爾來亂菊は渠が部屋に引籠りて身の疼痛を養ひけるが、紅は其恩に感じまた舊の如き紅ならず、勤の暇さへある時は、日夜枕頭に附添ひて妹の如き深切を盡し、徒然を察して四方山の物語、或は己が見聞せる城中の出来事など、洩らさで語り慰めたり。

されば亂菊は自ら聞き自ら見ることをせざれども、城中の事物は一として問者の耳目を免るゝものあらざりき。

殊に紅は城中の風説なりとて、左の數言を漏らせし時は亂菊は我知らず蹶起きたり。

曰、「重教公は豫てより隱居の望おはせしが、此度の參觀を機として、世を辭し給ひ、家督は御弟大音の君に譲り給ふべき御心なり。」と。

亂菊はこの風説を聞くとともに、俄かに病氣癒えたりとなし、勤をせむと謂ひけるを、紅は強

て押留め、御身に關して未だ何事ものたまはねど、實貞院の氣色計り難し、はた老女の心も知れざれば、しばし此まゝに籠り給へと、身を思ひくる言に従ひ、なほ未だ室を出でず。斯くて翌月第一の一日、即ち大音の君が参り給ふべき霜月朔日の朝までは、何事もあらで過ぎぬ。

二十五

却説小立野なる大音の君は、往にし日の歌會に、實貞院のお手づから一葉の色紙を賜りしが、讀むに其意味解し難く、是非の判断すべくもあらねば、返歌はまたの日と言免れて、其日は館に歸らせ給ひつ。それより人知れず頭を悩まし、とさまかうさま考へ給へど、歌の意味は判じ兼ねたり。寧ろ歌の作者たる母公の心中を計り兼ね給ひしなり。讀者願はくば記憶せられよ、實貞院は大音の君の繼母にて、且つ閨淋しき寡婦なることを。

他に見すべき歌ならねば、堅く心に秘め給ひつ、返歌の責を免れんため、再び見えざらむには、母公を恥かしむるものに肖てこれ却つて悪からむと、固より御孝心篤き若君なれば、進まぬ足を勵まして、例の如く朔日には早朝二の丸に來らせ給へり。

お錠口の戸は開きたれども、腰元どもの出迎へず、曉の夢を食るなるべし。遠慮あるべき御身ならねば、其まゝ、すつとお通りあり。誰ぞ來よ母公に案内を請はむと、彼方此方を見給へど、廣き奥殿森として、四邊に人は無かりけり。佗しと思ひてイみ給ふに、朝寒の風一陣、明渡したる庭口より、得ならぬ薫を齎らせり。ふと其方を見給へば、露重たげに園生の菊の、咲亂れたる花壇を前に、後姿の美人あり。東の空に手を合はせて、ものを念ずる狀なりし。

若君これを見て、何とか思ひ給ひけむ、庭下駄を引懸けて、徐に渠に近附き給ふ。其楚音を聞きながら冷然として見も返らず。若君は衝と進み寄り、背後より聲低く、「さても見事に咲いたるかな、コヤ母上に内證にて、其菊一枝與へすや。」と背打ち叩き給ふ時、やうく此方を顧みしは、今朝しも床を離れたる雨後の海棠、病後の花、一層艶なる亂菊なり。光源氏と唄はれ給ふ大音の君と面を合はせ、袖と袂は觸れながら、更に恥らふ風情なく、「菊がお欲しく候はば、御前様に問ひ給へ。」と素氣なき言に微笑み給ひ、「譬ひ許は請けずとも、母上のものならば、一枝折りても仔細はあらじ。」と花を選びて就中、色香の好きを折り取り給ひ、亂菊の顔と見競べながら、「今日は何とて挿頭を挿さぬな。過日見たりし菊の花はよく似合ひしに。」と言懸けて、件の花を亂菊の、高島田に挿し給ひつ。「御身の名にも姿にも、最よく合ひて見好げなり。其菊を御身に取らせむ、挿頭して居よ。」と言棄てて、踵を返し給ひける。

亂菊は色を變じ、君の賜物を撈り棄てむと、手は懸けたるが力なく、挿頭の花を探れるのみ。

胸の動悸を鎮めむとや、右手を懐に押入れて、石に化するもの一分時、咄嗟に引抜く懐裡の短刀、旭を浴びて一閃せり。

庭下駄脱棄てて足袋蹴足、短刀逆手につつと寄る。其身のこなし正にこれ水を這行く煙に肖て、些の蹙音も立てざりけり。アハヤと見る間に、追迫りて、斬懸けむとなしけるが、知らぬが佛、鬼神も、あらだつまじき若君の姿に心や弱りけむ、亂菊は我知らず、一足後に退る間に、一尺ばかり隔り給ふ。若君を屹と見送り、短刀背に押隠して、「もし。」と一聲呼留めたり。

大音の君は振り返りて、初心や顔を赧らめ給ふ。亂菊は聲を震はせ、「此花、君より賜はりしと、謂うても可いのでござんすか。」と問へる心は無量なり。嘗て花盗人の罪を蒙り、死すべき運命に遭遇せるに、今また人知れず賜はらば、知りつゝ、禁を犯すの罪、いかなる極刑に處せられやせむ。もしそれ公然たる賜物ならば、これを請くるも害無きなり。然るに若君は情を知らず、極悪げに唾を飲込み、「否、予が與へしといふべからず、但し内證にては請けまじきか。」亂菊はわななきながら、「嬉しう存じます。」

二十六

其日もまた例の如く、母公に見え給ひけるに、果して歌のことを謂出し給ひ、實貞院は歎息し

て、「さても後にて考ふれば、見せざりしこそよかりけれ、つい御言にほだされて、拙い歌をこれ見よがしに御目に懸けたが恥かしい。さりながら無理強ひして、私に恥を搔かせたる、御身の心も怨めし。」とちつと睨ませ給ひける。若君は差俯向き、「左様なことは夢にも存せず、あの歌いかに拙く候べき。」と當らず障らすのたまへども、實貞院の心は解せず、「口にては可い様に、言慰め給へども、心の内には私の事を嘸さげすんで居やるであらう。何う思ひ直しても、見せず置けば可かりしを、隔心があるなどと、此母を困らせて、無理に歌を詠ませて置き、後で笑うてなぶるとは、其方餘り酷いぞよ。」と思ひも寄らぬ御難題、若君太く驚き給ひ、「これは迷惑仕つる。不肖何とて母上を、」と半ば謂はせず頭を掉り、「イエ、何とおつしやつても、一定其に違ひ無し、私に何の怨があつて、つれないことをなされました。え、眞ぞ口惜い。」と顔色變へて眉逆立て、鋭く凝視する正眼に、涙をさへ浮め給へば、若君今は困じ給ひ、「存じも寄らぬ御おほせ、身の置處も無く候ふ、神以て左様な心は不肖持ち申さず、いかで疑晴らさせ給へ。」と宥め給ふに肯入無く、實貞院は聲を勵まし、「さらば私に恥搔かさぬ、證據を何と見せやるか。」「ならば此胸打割つて、御目に懸けむ。」と申さるれば、實貞院は空嘯き、「其は所詮出来ぬこと、口に任せた氣休めは、措いてたも。」と冷かなり。

菊 亂
若君聲を震はせて、「申譯は肯き給はず、其より他に何とせむ方法は覺え候はず。」と果は涙を飲

み給ふ。母公再び聲を勵まし、「他に方法は無いでも無い、まこと恥を搔かさぬ氣なら、私が方法を教へませう。いふ通りにしやるか。」と退引させぬ言の羽目、若君は止むを得ず、「して其方法は。」「斯うすること。」「エ、。」「さあ何とぢや、」「こは狂氣ばしせられしか、」「む、またしても恥を搔かせたな、え、口惜い、氣も違はいで何とせう。」と産の子にはあらずとも、母は母なるに實貞院、いかに人目の無ければとて、身悶えて泣き狂ひ、取亂し給ひしが、心に決する所やありけむ居住ひ直して儼然なり、「控へて居よ。」と言棄てて裳蹴立てて立たれける。後には獨り大音の君。悄然として溜息つき、思に沈み首を低れ袴のあひゞき爪繰りて手持無沙汰に見え給ふ。

少時經ちて一人の腰元、遙か下座に手を支へ、「御前様がおつしやります。ちと見て戴きたき物あれば、恐れながら若君様、此方へお出下さりますし。」と平伏すれば大音の君、「なに、母君が召しますとな、案内頼む。」と優やかに座を起ち給へば腰元は前に立ちてぞ導きたる、實貞院のお居室の内、母公見るより言を懸け、「さあ、此方へ此方へ。」とお傍近く請し給ふ。打つて變りし母公の氣色、凄まじかりし血相の今はた最も穩に、唯莞爾々々と微笑まる、心の内を推し兼ね、若君胸中安らかならず、薄氣味悪くも詮方なく、針の筵に坐し給へば、母公はなほも莞爾やかに、「さて若君此處へ態々お招き申して、御歸館の足を留めたるは、和郎ならではの鑑定の附かぬ妙なる品の手に入りたれば、お目に懸けたく存するが、御迷惑でも母の頼ぢや、承引いてくりやらうか。」といと落着きたる聲音にて、何かは知らずものありげに、言出さる、こそ氣懸なれ。

二十七

若君は何となく胸打騒ぐ心地しながら、「如何にも拜見仕らむが、して何品にて候ぞ。」と問はせ給へば片頬笑み、「物は待つ間が花とやら、喃老女、ま、何様なものであらうやら、お前一寸あてて見や。」と傍に従ひたる老女の方を顧み給へば、事々しくも小首を傾け、「さればでござります。まあ私の考へを、ものに譬へて申さうなら、嬉しい様な、恐い様な、恥かしい様な、驚く様な、泣きたい様なといった様な、わからぬものではござりませぬか。」と鹿爪らしく答へたり。實貞院はおほ、と端たなく打笑ひ、「まあ此人としたことが、飛んだことを謂やる喃、それでは少しもわけが解らぬ、考へ直して見るが可い。」と仰に再び打案じ、「黄と白と種々を、色が調合した、それは、見るとそのま、眼の覺めるほど美し、あの何やらではござりませぬか。」と謂ふに母公は少しく頷き、「お、似寄のものに案じついた、何と若君、今この老女が申せし品なるが、和郎は何と鑑定しやる。」と俯向勝なる若君の、顔差覗きて問ひ給へり。若君は聲低く、「いや、不肖は暗愚にて左様な謎は解け申さず、何かあらむ見せ給へ。」とお答へあれば實貞院、「そんならお目に懸け

まする。腰元どもソレ此方へ。」と高く彼方を呼ばるれば、「はい。」と答へてお居間の前なる、庭の切戸を押開き、腰元二人左右より亂菊の手を扼りて、飛石傳ひに引立て來り、最荒々しく引据ゑたり。

一目見るより大音の君、母公の心を計り兼ね、胸轟かせ給ひける。さこそあらむと實貞院は大音の君をじろりと見て、「御目に懸くると申せしは別にはあらぬ此婦人、見給へ渠が挿頭たる、あの白菊を、指さされ、大音の君はぎよつとして、唯見れば今朝我手づから、折りてぞ渠が頭に挿せし、其白菊は美はしく、四邊に薫らむばかりなり。

若君は疵持足、思はず冷き汗を流して、顔打振め給ふになむ、實貞院は早くも見て取り、「一體彼なる下司女は、重教公の御覺の愛たきに増長なし、妾などは無きもの同然、既に先頃催せる歌會の折なども、それなる婦人奴大膽にも、妾が祕藏の初霜を、無斷に折つて挿せし故、死なぬまでに折檻し、以後を懲して許せしに、今日またしてもあの通り、菊を折つて挿頭したれば、よもや前の日の苛責にて懲りぬことのあるまじきに、馬鹿ではなし、狂氣でなし、我身で折らう筈は無い、何者に貫ひしぞと種々問へども白状せず、妾屹と了簡ありて、是非とも今日の花盗人の詮議をせねば措かぬ積り、若君貴下はお伶俐にて、知らぬといふことおはさねば、定めし御存じであらうと思ひ、わざつと御覽に入れたのぢや、いかに若君アノ菊はそも何奴が折取つて、下司の

頭に載せしやら、和郎は誰かを御存じならむ、名を聞かせて、と案の定、無法の難題吹懸けたり。若君返さむ言も無く唯俯向きて黙し給へば實貞院は執念くも、「さあ、何とぢや、返事をせぬか、母が、ものを問ふのぢや。」と退引ならず急立てられ、若君はとつおいつ、思案に暮れて居たまひしが、明けて謂ふべきことならねば、「某更に存ぜず候。」

二十八

知らずとのたまふ大音の君の言を聞くと實貞院ふむと頷き、階下なる亂菊を屹と見て、「いかにそれなる下司女、其花手づから手折りしか、また或人に貫ひしか、隠立せず白状しや。痛い目見せて血を吐かせ、口を開かず法もあれど、若君に聞いたらば、仔細なく知れようと、今まで其方を責めなんだが、問へば若君も御存じなき由、其方に聞くより仕方が無い。さあ、ありやうに白状せよ。」と恐しき顔して睨め給ふ。其形相の尋常ならざる、如何なる憂目を見せられむも計り難しと知るべきに、誓ひし言は反故にせず、「否、人様には貫ひませぬ。ついた私のお出来心餘り見事に咲いたれば、一枝欲しさに折りました、申譯もござりませぬ。お許しなされて下さりませ。」と清しき聲にて答へたり。若君はほつと呼吸、實貞院は氣色を變へ、「左様なことを申すとも、誰が眞とは聞くものぞ。餘儀ない人に與へられて、咎めらるゝと知りつゝも、棄ても得ならず、持

つのであらう。譬ひ強情張つたとて、言はせる手段は無いでも無い。苦い思ひをせぬ内に率直に謂うたが可からうぞや。」と威し給へど、熟として、「譬ひ何とおつしやつても、知らぬことは存じませぬ。」と立派に言切る斗膽の勇婦。實貞院は赫となり、「お、謂ふな、決して謂ふな。汝謂はせて見せうぞ。」と大音の君を流眊に懸けて、「腰元どもそれく。」と煙管を以て指圖の下、心得て立懸り、矢庭に帯に手を懸けて、啊呀と謂ふ間に引解けば、亂る、衣紋を亂菊が、兩手にしつかと抱緊めて、拒むを腰元手籠になし、上着をすりと剝脱れば、下は眞紅の長襦袢、「是はばかりは。」と身をあせる煽に洩る、白脛は、紅葉を染むる霜にも似たり。

それと見るより紅が慌しく馳來り、身を楯に割つて入り、腰元共を押隔てて、「え、餘りな待たしやんせ。待たしやんせ、他のことはともかくも、まだ裏若い婦人の身が、澤山人目のあるまへで、何うまあ膚が出されよう。譬ひお上の仰でも各自が身に引較べてお謝罪をしても遣るべきに、氣競懸つて手籠にするとは、お前さん方鬼かいな。はい、はい、御前様、御老女様、亂菊殿に罪があつて御折檻遊ばすのは、そりや仕方もござりませぬが、可哀相に若い者に、恥搔かすのはお道慾ぢや、許して遣つて下さりませ。」と手を合すれば尖聲、「汝の知つたことでは無い。邪魔になる退らつしやい。え、退れと申すに退らぬか、澁太い奴め。」と老女はぶつく、庭に降り立ち紅の襟上掴みて引退ぐれば、腰元等はまた立懸り、鞠の如くに身を縮むる亂菊を引起し、

「アレ」と言ふ間に突轉ばす、亂菊はハヤ蔽ふものなき身となりて、土に喰附き領伏しけるを、起しも立てず左右より、しなへる女竹打掉りて、續け様に撲ちければ、あつとばかりに苦痛の聲、杜鵑血を吐きて、亂る、黒髮烏羽玉の闇夜にしろき卯の花に紅染めし如くなり。

二十九

慘憺極まる有様に大音の君は目もあてられず、顔を背けて居給へども、咎の鳴音犇々と胸を貫く心地して、消えよ消えよとあるにもあらねず、實貞院は悠々と煙草を長閑に燻らしながら、「やよ、下司女それにて未だ白状もせずや、いかにいかに。」と責め給へど、一言も言はねば、呼吸繼の水を與へよとて、手桶の水を浴せ懸けてはまた鞭ち、鞭ちて、半時あまりも苛みければ、亂菊今は正體も亂れて、鞭うたれても苦を叫ばず、手足をさへもあがかずなりて、但彼の水を浴びする毎に幽に悲鳴を漏すのみ。

時しも縁に燈したる蠟燭の火の瞬き烈しく、颯と吹き出づる夜風の寒さ、初夜も過ぎぬと思しきに、實貞院は指揮して一先咎を留めさせ、何思ひけむ若君の座の際に寢床を敷かせ、ものをもいはで端然と居住ひ正しく坐し給ふ若君の前をも憚らで、するくと帯を引解き給ひ、寢衣に着換へてしどけなく、「コレ腰元ども、もう休みや、用事あらば呼ぶほどに。」と仰に一人畏り、「難

有う存じますが、亂菊は如何計ひませう。」と伺へば打領き、「大事な其まんま霜に浴びせて放棄つて置きや。實を白状せぬまでは、衣服を着することもならぬ。今夜終夜若君が此處で番をして下さるほどに、些少も案じることはない。」と謂ひ懸けて若君を、流眊にじろりと見遣り、「喃、若君、和郎が大事の其腰元、不寝番を遊ばせや、おほ、おほ、さあもう可い。」と仰に任せ、「左様ならばお方様、御寝なりましたし。」と腰元等、此ま、此處にと紅の地踏躡踏むを引張りて、ぞろ／＼とこそ退りけれ。

縁の障子は開けたるまゝに、故と端近に敷かせたる寢床の内に匍匐ひたる、其お姿のしどけなさよ、玉の顔、雪の膚、髪こそ惜しき切髪なれ、年紀三十に餘れども、薫の前といひたりし、昔の倂消えやらず、臥蠶の眉の痕鮮かに、情を運ぶ眼許の愛嬌、艶なる瞳流る、如く、鼻筋通りて唇赤く、ものいふ度に眞黒なる前齒の洩る、もなまめかしきが、若君の膝を壓へながら、右手に持ちたる煙管にて指示したる庭上に消え残りたる春の雪、泥に塗れて横はれる、彼と是とに身を挟まれ、動きも得せぬ大音の君、こはそも娑婆か、地獄かと、半ば夢見る心地せり。實貞院は亂菊の亂れし状を指して、「喃御覽ぜよ大音の君、いかにお心の懸りたる婦人にて、アレあの様な醜き状になりたれば、今は愛想も盡給はむ。夜寒の風の身に染むに、斯う開放しの端近にて、番したまふにも及ぶまい。重教殿のお留守の間に和郎に風邪など感しては、此母が言譯なし。ち

と暖めて進げようもの、はて、強情なお子ではある。」と莞爾し給ふ御顔の、世にも希なる美人だけ、若君一層恐しく、鬼に捉らるゝ心地して、啊呀とばかり振拂ひ、「いやなに、寒くは候はず。」と膝に御手を正されたり。

三十

實貞院は尙ほそれよりわつつ口説きつ附纏ひ執念く申し給ひしかど、若君は唯死灰の如く、一言半句ものたまはねば、或は泣き、或は怒り、種々の術其効無きに、果は母公も苛ちて冷笑ひ、「ふむ、それなれば何時までも、寒い思ひをして居給へ、妾は胸が焚ける様で、いやとよ、閨の厚衾に、暖かくつて溶解さうな。あの亂菊の白肌を樹に縛し上げて置いたなら、梢の雪と視められて、胸が清しくならうもの、惜いことには地の上で視める風情も何にも無い、今から腰元を起すも氣の毒、え、ま、よまたのこと。」と聞えよがしに呟きつゝ、眞寢か、假寢か、すや／＼と、煙管を片手に持ちたるまゝ、胸の炎の燃るにや、御身を半ばすり出して傍の見る目も居きたなく、其ま、眠らせ給ひける。

良ありて若君は、少しく顔を上げ給ひて、其寢姿を見給ひたる、柳眉逆ち睨釣りて、御差料に手を掛けて、アハヤ抜かんとし給ひしが、俄に悄れ給ひつゝ、「イヤまで、言語道斷の淫婦なりと

も繼母なり。譬ひ其腹に生れずとも、親殺とならむには、渠が祖先を辱むるより、なほ一層の罪なるべし、我だになくば何事も、角立ずして納るべし、さるにても憐むべきは亂菊とかいふ婦人かな、我ゆる怨る憂目を見せしは、哀とも氣の毒とも謂はむ方なき身の過失、戀の迷と今ぞ知る、よしなき、菊を手折らずば、この出來事はなかりしものを、要こそあれ。」と大音の君、獨り心に打領き、母のそら寝を試みむと、件の煙管を軽く引きて、「もし、母上、母上。」と三聲ばかりも呼び給へど、眞に寝入らせ給ひけむ、顔の筋だに動かねば、若君密かに身を起し、外より障子を閉切りて、縁側に出でて見給ふに、一塊の雪はなほ未だ依然として横はれり。

若君は其まゝに縁よりひらりと飛下りて衝と亂菊に飛着き給ひ、諸手を懸けて後抱に、そと抱起し給ひしが、非道の責苦の其上に霜に五體を凍てられたれば、はや冷切つて氷の如し。「コハ絆切れしか。」とばかりに、美人が死したる冷き頬に、涙に冷き頬を重ねて、ひたと打泣き給ひしが、さてあるべきにあらざれば、西の方に枕をさせ、上に召したる紋着の羽織を脱ぎて心ばかり死骸の恥を包ませ給ひ、小刀を鞘のまゝ、其胸に載せ置きて、愁然として立上り、「皆某が過失なり、一人は遣らじ追着かむに、許してくれよ。」と活きたる人にもいふごとき御言葉、其誠心の通じけむ、あはれ冷き風吹かば此まゝ、此形の石になるべく、暖かき火に暖めなば、消失すべくも見えたりし死骸は、氣の故か頷く如く見えけるにぞ、猶彌増る哀の涙を袖に包ませ給ひつ、同一處に

とは思へども浮名立たむが恥かしとて、忍び／＼に彼方なる書院の方に赴き給ひ、其處に置かれし御太刀にて、腹一文字に搔切りつ、思はず苦と叫ばせ給ふ、御身の聲におのづから、眼を開かるれば、こはいかに、これぞ一場の夢なりける。先刻に御歌のことよりして、母公の機嫌を損ぜられ、やはり其居室の舊の座に、几に凭れしまゝ、思ひ屈しての、夢なりしなり。

三十一

覺め給ひたる後も大音の君は、なほ夢の中なる御心地にて、茫然と頻に四邊を眴し給ふ。廊下に輕き寢音聞え、次第に此方に近づくまゝに、裳を引く音しと／＼と、やがて襖を押開き、姿を見するは亂菊なるが、夢に見たりし風情は無く髪も綺麗に取上げたり。匂溢るゝ振袖の最花やかなる其扮装、矢の字の帯のキリ、しやんと、行儀正しく入來れる、手には紫の袂紗に載せて一碗の茶を捧げたるを、若君の御前に差置き、遙退りて手を支へて、「實貞院様が若君に參らせ給ふお茶一碗、お召上りなされまし。」と謂ひつ、頭を下げたりし、雪恥かしき襟許に照添ふ髪の艶やかさ、露も垂るべき菊の花は今朝我手より與へしまゝ、花片一つも亂れざるを、一目見るより若君は、今見し夢に思ひ合はせて、思はず身の毛を悚立たせらる。

亂菊は語を繼ぎ、「而してアノ先刻は、つい、一時の腹立ちより、端たなきこと申したれど、今

では思直したれば最早御心に懸けられなと、御前様がおつしやりました、其お茶はお手づから、煎てられしものに候ふ。「と顔を背くる頭には白菊の花ゆらめきたり。若君茶碗を取り給ひ、「折角の御手前、早速頂戴致さむす。」と口を着けむとせられしが、小首を傾け打案じ、「こは母上より某に賜りたるに相違なきか。」と様子ありげに問ひ給ふ。亂菊は猶豫はず、「はい、御前様より若君に。」若君は、「可し」と茶碗を戴き、一口飲ませ給ひける、茶に泥の如き匂ひあり。若君聲に力を籠め、「亂菊。」「はい。」「きつと母上が下されしな。」亂菊は蒼くなりて、「確に御前様が持たせておよこしなされし。」と謂ふ聲太く震へたり。

大音の君は從容と、「いざ早く頂戴せむ、亂菊確と見届けくれよ。」再び頂き、眼を閉ぢ、ぐつとばかりに干し給ふを、瞬もせで見たりし亂菊、「お潔う存じます。」と身を震はして吐息をつく。若君茶碗を下に置き、閉ぢたる眼を睜きて、亂菊の顔打瞻り、「知らずや亂菊、某が今飲みたるは毒茶なり。時を過さで世を去るべきに、豫て某が御身を戀ふる、切なる心は知りつらむ、あはれ最期の思出に戀を許すと唯一言御身の口より聞かせよかし。」と涙さしぐみのたまはず、御心根の最惜しさに、亂菊は身を擦寄せ、わななく手先に若君のふるふ手首を持添へて、玉を延べたる内、懐にぢつと引入れ奉り、「いざ肌觸れて參らする、私が胸を御覽せよ。」と莞爾と笑める艶麗さ。若君は我にもあらで、其なすまゝに任せ給へば、亂菊が押當てたる、胸は温き雪ならで最も冷た

き氷の刃、手先に觸るゝに打驚き、「御身の胸はいかなるぞや、我には知れじ。」と訝り給へば、亂菊は若君の手を押退けて氣色を變へ、「いかに誤り給ひたる、私は君を刺さむとて、隙を窺ふお家の仇、固より毒と知りつゝも、薄茶を召すを留めざりしも、仕方は擇ばず若君の失せ給はむを願へばこそ、譬ひ毒茶を召さずとも、私が胸の劍もて刺し參らせむす今日の覺悟、さすれば毒は母公様の装ひ給ひたるものとは云へ、私は私が若君を毒殺したる思ひなれば、慕はれ參らすことは出来ず。」と襦袢の袖を嚙占めて、君を瞻る眼の中に堪へぬ涙ぞ満ちたりけり。

三十二

大音の君は亂菊が語れる由を聞き召して、何か謂はむとし給ひしが、鳩毒の効能恐るべし、早く既に先刻よりしてキヤク胸先に差込みたるが此時俄に烈しくなりて、虚空を掴み給ふと見えし、兩手に咽喉を搔撈りて、どつと血汐を吐きたまひ、「あな苦し。」と呻きつゝ、紫ばめる御顔をやうく擡げ給ひたる。傍の襖の隙間より眼ばかり出して窺ふ者あり、若君最期の目を留めて、屹とこれを見給ふより、「あれ捕へよ亂菊。」と聲を絞りてのたまふトタン、襖の外をばたくく、登音高く遁出すを、亂菊は突立ちさま、飛鳥の如く飛懸り、襟首を無手と取りて、ずるゝと引戻し、大音の君の御前に引据ゑたるは老女なり。

老女はをの、きたる聲をあげ、「こは何とする無禮者め。」と擬勢を示すに答へはせて、「若君いか、計ひませう。」と亂菊は泰然たり。

若君苦しげに一呼吸つき、「何人か某に毒を飲ませ給ひたる、其御心を察するに、何人かの過失の某が口よりして、世に洩れむかを恐れしならむ、某を殺してまで、名を惜み給ふこと、未だ良心のおはすにて、思へば却つて難有く、身を殺しても母の操を全うさせたきねがひなれば自害しても果てむずものを、毒殺更に怨は無きが、憎むべきは其なる老女、大方今度の謀も半ば以上は其者の、肺肝より出でつるならむ。其者ばかりは母君の一切の品行を知り居れば、何時如何なる場合にて、恚る事ども吹聴なし、微妙き家の家系の内には、其子に戀を仕懸けたる、言語道斷の繼母ありと、世の中に流布なして、恥を後世に残しやらむ、さらでもお奥を仕たい三昧、我意を振舞ひ風儀を亂す、言はむ方なき不届者、亂菊、其奴を討つて棄てよ。」絶入る聲を勵まし給へば、南無三寶堪らじと、遁げむとあせるを亂菊が膝に引敷動かさず、咽喉をしつかと緊附けて聲をさへも立てさせず、「畏り候ふ。」と懷裡の短刀キラリと抜き、肝のたばねを貫きたる、いと目覺ましき手の刃に、血の迸るに先立ちて、ウンとも謂はず呼吸絶えたり。

若君快げに莞爾と笑み、「思置くこと更になし、唯つれなきは御身ぞ。」とのたまふ端に病募りて、惱亂し給ふ御ありさま、目もあてられぬに亂菊は、堪へ兼ねて、背後より、しつかと抱き参らせつ、耳許に口を寄せ、「許させ給へ若君様、冥加に餘る御心、私とても心の中に君を思ひ参らすこと、何とて君に劣るべき、されど私は故ありて、口へ出して御仰に従ひますと申し難し、また君とてもお家に仇なす私を戀ふと謂ひ給ふは、御先祖に對し後暗く思さずや、思は同じ心と心、御傍に齊眉き参らすことの、此世ならでは出来ぬことかは。二世も、三世もあるものを、火宅に迷はせ給ふなよ、やよ、若君様、若君様。」と言ふ言毎に領き給ひて、また夥しく吐血のありて、がつくり弱らせ給ふにぞ、亂菊は低聲にて、「南無阿彌陀佛。」と勤むる唱名。左右の襖をばらりと開けて捕手の人數口々に、「動くな女。」

三十三

「心得たり。」と亂菊は、衣紋を正し、つと立ちて、血刀片手に提げたるまゝ、二足ばかり進出で、左右を向し突立ちたる、面は聊か蒼味を帯びて、意を決したる色見えつ、謂ふべからざる威容あり。またこれ一個前田家の腰元にはあらざるから、捕吏は思はず氣を吞まれて、良猶豫へる瞬間に、亂菊は静々と短刀を鞘に納め、立身のまゝに從容と兩手を背後に押廻し、「お手向は致すまじ、いざ引かれよ。」と言ひ懸けて、最冷かに笑うたり。

亂 菊 それ召捕れと捕吏ども、ばらり前後を取巻く時、襖の外より實貞院、轉ぶが如く駈入りて、亂

菊を背後に庇ひ、捕吏に向ひて言忙しく、「いや喃、人々騒がれな、大音の君の毒害は最もお家の大事なるを、心なく荒立てて、表向に沙汰せむこと、其可否容易に知れ難し、見れば此なる亂菊も、覺悟を極めて居る様子、汚なき遁隠せむとも見えねば、一先妾に預けよかし、みづから渠を問檢べて、其上の沙汰にせむ、唯重立ちたる家老にばかり、密かに此こと通じ置くべし、只管隠密隠密。」とおほせは鶴の一聲に、何條異議を唱ふべき、二言謂はで引退れり。

さて若君の御身をば、寢床に移して差あたり病氣の體にもてなしつ。其夜更闌け人定まる頃、實貞院は人知れず、一室の内に監禁したる亂菊を召給ひて、お膝近く侍らせ、孤燈の下に悄然と吐息を吐きつ、實貞院、「今更謂ふは面伏なれど懺悔なれば亂菊よ、情を以て一通り妾がいふこと聞くれよ。口より出すは恥かしけれど、妾母親の分として、大音の君を戀參らせ、うた、思を惱ますは、今日昨日よりのことならねど、行儀正しき和子のゆゑに、我から恥ぢて氣振りも見せず、良月日をば送れるうち御身がお奥へ参りしより、若君の御振舞、以前とは異りて、色めかしく見え給ふは、てつきり御身を戀はるゝなりとは、心ある身の何として、見免すべくもあらぬから、時後れては若君を、御身のために取られなむ、と心せくま、あられもなや、歌に託け思ふたけ、打附けに挑みしを、和子は何とて肯入るべき、恥搔かされし口惜しさに、半狂亂にて我が居室に、歸り懸りし庭口に、例の老女が御身を捕へて、腰元どもに差圖なし、あはれ婦人の若き身を打寄

りて責折檻、活み殺しみするを見て、いはれを聞けばまたしても、菊を手折りて挿頭せし由、御身は白状せざれども、大音の君より貰ひしを、老女がちらと見たりしとよ。妾は嫉しさ、腹立たしさ、其ま、御身を虐殺、五分一寸に切刻みて、胸を癒さむと思ひしが、イヤ其よりは一層のこゝと、妾につらき大音の君を御身と共に失はむ、手段はかうと、老女とも示し合せて御身を許し、持たして遣りしはアノ毒茶、若君首尾よく果られなば、毒殺の罪は御身に被せ、表向きに殺戮せむず、思へば天魔の魅入りしか、最恐しき心なりしが、左右を見むとて若君の、最期の言を立聴なし、はじめて前非を悔いたれば、其場を去らず妾もともに身を果さむと思ひしが、さしも世間の怪みて、かにかく沙汰を仕出さば、妾のゆゑに、家を汚して和子の苦心も無になる道理と、さて死にたいにも死なれはせず、身の過失とは謂ひながら、隣する間も神佛の目に見ぬ筈に打たれつ、惜くもあらぬ命を存らへ、天壽盡なば地獄に墮ちむ、其時鬼に責めらるゝを樂にして待つて居る。其苦みを推量して、毛ばかり妾を許してよ。あからさまに實を告げて罪を受くるは安けれど、さしては和子の心に悖れば、御身其罪を被りて、主殺となつてたべ。さりとして生命は棄させじ。此ま、落しやるべければ、身を全うして若君の跡弔を頼むぞ。」とて、紅に導かせ辛くも城より出されける。

「おう、今鳴る鐘はありや丑三、妖怪出づべき時刻なり。狐狸か、但は魍魎魍魎か、一月以前に亡せ給ひし、大音の君の御墓所に、夜なく怪物顯れて、寺男を威す由、城下の風聞喧しく、根なしごととも思はれず、我牛山、君前にて、梅鉢の御兜の試斬を仕損ぜしより、我身と恥ぢて出仕せず、家に蟄居の憂晴し、汝正體見届けくれむと、故々此處まで來りしが、牛山の威に恐れたか、或は今夜は寝忘れたか、犬の子一匹未だに出でぬわ、さてく本意なき次第なり。何條空しく歸らるべき、いで今しばらく待ちて見む。」と打咳きつ、小森牛山は小立野の天徳院なる、大音の君の御墓所を、彼方此方にうろつきしが、俄に牛山身を翻して、卒堵婆の後に潛みたり。とばかりありて雨模様、月はあれどもどんよりと朧に見ゆる物體ありて、何處ともなく顯れ出で、霧を踏むかと怪しきまで、楚音軽く歩を運びて大音の君の御墓の、前に間近く來るを見澄し、牛山ヒラリと躍出づれば、後足に衝と退るに、大手を廣げて立向へば、搔潛りて身を避けつ、牛山苛つて追継り、彼の曲者の弱腰を力に任せてぐつと攔めば、手先に拂ひて振解く。牛山は、「面白し。」と手に唾して、「汝、味なことをやりをるわい。牛山が鐵腕を振解かむ者多くはあらじを、さてこそ妖怪ござんなれ。」と左右に追へば前後に通れて、陽炎の如く手に立たず、あふりを

打つてはひらりく、と身を交してぞあしらひける。

さはれ名代の劍客が、氣競ひ懸りて追廻すに、かなはじとや思ひけむ、彼の曲者は逃足出して、一間ばかり隔る瞬間、弓弦の音兵と鳴り、弗と飛來る白羽の征矢、きやつと魂消る婦人の聲、彼の曲者はたじくと、背の方に踰越く處を、牛山無手と引捕へて、屹と其方を見込みたる、一叢樹立の間より衝と出來れる一個の壯士、弓矢携へ悠々と、此方に進み近づくと、牛山及腰にすかし見て、「お、其なるは大藏か。」と呼ぶに應じて彼方の壯士、「いかにも吉田大藏なるが、して御身は、と間近に寄りて、「こはく、小森牛山殿よな。」むう、牛山だく。見れば弓矢を携へて、獵とも見えず今時分。察する處拙者と齊しく妖怪退治に來りしな。」いかにも御身の推量通り。今や確に手答へありし。「その曲者はこれならむ。」と引捕へたる曲者の頸に手を懸け擡げつ、今洩出でたる月の方に打仰がせたる女の顔、大藏見るより打驚き、「や、や、や、や、其方は順禮の、今は御奥の亂菊ならずや、しなしたり。」と弓杖つく。矢は乳の下に深く立ちて、湧出づる血は流るゝ如し。

亂 菊

牛山も手持なく、「さては名高き亂菊か、其亂菊が何故ありて、恚る處を夜深の徘徊、仔細を語れ。」謂へ聞かむ。「とさそくの手當、疵口をしつかと押へて勦り問へば、亂菊幽に眼を睦き、「仔細はたゞ、仔細はたゞ、私死すべき仔細あり、語るも無益、問はるゝも効なし。見參らすれば大

藏様、お二方、何方にても早く呼吸の根留めてたべ。」と取亂さぬ勇婦の魂、「天晴女を殺すは惜し。されど助かる手疵にあらず、若い婦女に、若い者、大藏介錯いたして遣れ。」イヤお年役に牛山殿。「ウンヤ老爺では可哀相なり。お主が。」貴殿が。「イヤお主が。」と留を譲る勇士の情、あはれと思へば討兼ねて、果しなかりし其折から、後の方に呼ばはる聲あり、「アイヤ御兩所、留は某承はらむ。」と石碑の蔭より白峰丈助。

三十五

兩人齊しく振返り、「變つた處へ白峰丈助、貴殿が留を望みとは。」如何なる故ぞ。」と右左、問はれて丈助打領き、「されば御兩所聞給へ、恥を謂はねば理が聞えず、打明けて申さむが、某實は目頃より其亂菊を戀ひ居たり。さればとて顔をも見ず、言を交はせし事もなければ、重教公が何かに就けて、御賞美遊ばす婦人の膽力、噂を聞きたるばかりにて、未だ見ぬ戀にあこがれしが、幸此處に來合せたれば、婦人の呼吸の通ふ内、一言心を打明けて、あはれ思出にいたしたし。甚だ恥入候へども、御兩所傍に居給ひては、いかに虚氣な某とても、氣恥かしくてもものも謂はれず、切なる心根お察しあらば、暫時此處を遠ざかりて願を協へてたまはれ。」と面を赧めて丈助が、誠しやかに欺けば、二人は些少も異議に及ばず、直に踵を回らしたる、其影見えすなれるを見澄

まし、總着きて、「亂菊殿、心を確に持ち給へ、丈助なるぞ亂菊殿、え、コレ心弱りし秀松殿。」と聲を勵まし呼活くれば、纒につながる玉の緒の絲より細き聲音にて、「あい。」とやうく答へたり。丈助故と舌打して、「え、亂菊ともいはる、身が、矢一筋の疵のために、この意氣地なさは何事ぞ。」と罵りけるに、亂菊は丈助の腕に絶りつ、膝立直してむつくと起き、「お、丈助様、吉左右は。」案じ給ふな上首尾なり。過日重教の陪從をなし、江戸に上りし機會に乗じ、左京の殿と打合せて、重教に勸むるに還勤のことを以てせしに、案の定二ツ返事。其は可けれど跡繼には大音の君のあるために、養子の計らひ成難かりしに、出來されたり、亂菊殿、江戸表に早打來りて、大音の訃音を傳へたれば、はなしは直ちに纏まりて、いよく今度徳川家より、御連枝一方當國へ、下り給ふに定まりたれば、其儀を藩士に傳へむため、某一人江戸表より、晝夜を兼ねて馳歸り、到着したるは今日の午後、御身のことも氣に懸れど、何はさておき御いたはしや、如何に天下のためなりとても、何罪も無き若君の、失せ給ひしがいとほしく、謝罪の心に人目を忍び、詣でて見れば御身の此狀、噯な御身も某と、同一心の墓詣を、氣早の武士ども、妖怪と見誤りて射たりしならむ。口惜しいことしたるかな。」と、拳を握れば亂菊は、「嬉しや、さては御養子のいよいよ下り給ふとか、實貞院の強ての勸めに、一度城中を遁れ出で、惜しからぬ生命を存生へしも、此の音信が聞きたいばかり。其を待ちつ、晝の内は、人無き所に身を密めて、夜なく、此處

に詣でしを、射留められしは天の命、些少も怨はなきぞかし。して／＼左京の殿様には御機嫌よ
うお渡りか。」と痛手を堪へて君を問ふ、其眞心に丈助は、はらくと落涙して、「よく問はれたり
亂菊殿、某江戸に上りし折には、面前御意を得て、先づ第一に一方ならぬ御身の辛苦を言上せ
しに、うい奴ぢやとのたまひて、御眼を拭はせ給ひしぞや。」と聲曇らせて耳に口。亂菊は頷く如
く、がつくりと頭を垂れ、二三度彼方を指さして、手を打合はす心を得て、丈助は亂菊を、大音
の君の御墓に向直らせ、はやまゝならず硬ばる兩手を、助けて合掌なさしむれば、「南無」とばか
りに唱名の名残の聲も絶果てたり。菊は萎みぬ、霜夜の風。

——此の一篇些少も史實によらず——

鬼の角

「いや、どつこいしよ。そらく其處は溇だよ、氣を着けな。やれく吾の手こそ曳いてくれずとも、老人に世話を焼かすといふがあるものか。お前を陪從に連れて出ると氣が揉めてならぬいぞ。傍見ばかりするもんだから、それ泥濘だ、それ溝だ、と一々氣を着けてやらなければならぬ。其度毎に吾はもうあぶくする。壽命の毒だとは思ふけれど、旦那殿が連れて行くと云ふものを、長松は世話が焼けて不可と云つて見る。それまた旦那殿のお目玉だ。それが不便と思へばこそ連れて出るやうなもの、まるで荷厄介で、始末に畢ない。いや、然うは言ふものの、かう云ふ吾もお前の年紀には、矢張其通りであつた。は、は、は、お前だつても宿へ下れば若旦那だ。喃、長松。今夜は北風が吹いて寒いから、早く歸つて暖まれ、さあ、その意で疾く行かう行かう。」

慈悲深き老人は小僧を従へて出先より今歸途に就けるなり。小僧は御隠居の深切なる注意を聞かむともせで、頻に四邊を向しつゝ、

「やあく面白いな。彼方でも此方でも、福者内福者内ツて遣つてますよ。御隠居様。」

「む、今夜は節分だの。」

欲遊盛の小僧は大勢が鯨波の聲を揚げて豆を拾ふ賑しさの手に取る如く聞ゆるにぞ、

「あゝ！行つて見たいな、喰附いて、打倒して、引搔いて、匍匐になつて、搔込んで、袂一杯拾ふけれども喃。」

と啣ちがましく呟けり、老人は頬笑みて、

「吾は遊ばして遣りたいが、さういふ我儘をさしては店の者の範にならない、我慢しろく。可いわ、其代吾が鯢鮓かけを奢つてやらう。」

「成るべくなら、御隠居様、え、お汁粉にして戴きたうございます。」

言ひも訖らで渠は捷く前に廻りて、隠居の膝に叩頭せり。老人は噴出して、

「は、は、は、一番附合つてやらうかの。」

「へい、是非、へい是非、是非へい、是非へい。」

小僧は(是非へい)を謳ひて躍れり。

「これさ、何だ。何處でもお前の可い處へ入んな。」

聞くや否や小僧は調子はづれの聲を揚げ、

「大願成就、や、忝し！」

ぎつくり見得をして矢庭に駈出す、其疾きこと颯の如く、四五軒先の小松園子といへる名代の汗粉屋に飛込めり。

老人はこれを視て、

「罪の無い奴だ。」

と笑ひながら後より其汗粉屋の店頭に至れば、

「御隠居様、萬歳！」

と暖簾の蔭にて不意に喚く。老人は吃驚して、

「え、！驚いた。この小僧め。」

小僧は如才無く莞爾々々して、

「唯、入らつしやい！」

汗粉屋に入りて老人は手烘を引寄せつ、唯見ればさすがに禮を知りて、小僧の遙下りて跪坐するををしをらしく思ひ、

「さあすつと来い、此家へ来れば吾もお前も同一身分のお客様だ。遠慮は無い。」
膝近く進ませつ、

「さあ、手を出して暖まるが可い。めつきり寒いよ、喃。」

老人は火鉢の上に揉手をしながら、小僧の手の甲を昵と視て、

「大分皺を切らしたな。お、血が出て居る。嘸疼痛だらうの。む、……」

其暖まりたる掌以て、柔に其皺を搔撫でたり。小僧は祖父に於ける孫に齊き温言を聞く嬉さに、平生奉公の艱苦を思出して胸迫り、差俯向きて酒を啜れり。

老人も鼻をかみしが急に氣を變へて故と打笑ひ、

「辛抱しろ、何のこれしきが、べろりと嘗めて置け、つい癒る。」

慫慂しつ、老人は仕舞懸けたる鼻拭の裁を以て、

「ふむと謂はつし。へん、嬰兒の様だな、あてことも無い。」

時に老人の詭は来れり。皆これ小僧が註文せし處のものなりき。

二

角の鬼

この佛心の老人は富有なる商家の樂隠居にて年紀既に六十の坂を越えたり。其家の身上悉皆を一代の内に造上げたほどの老人なれば、今や全く世を棄てて、聊も家事に喙を容れざれども、もの云はざる天道のなほよく人を制する如く、おのづから一家を支配して帳簿に一點の誤なから

しむ。然もあらゆる艱苦を経て今の境遇に來れる老人なれば、酸も甘きも嚙分けておもひやりいと深く、人を憐むこと、古の仁者の風あり。恩威ならび行はれて敬愛さるゝこと一方ならず。さればなべての老人は若き者に邪魔にさるゝ習なれども、この隠居は決して然らず。其外に出づることあれば、留守の息子は謂ふも更なり、嫁をはじめとして、番頭、手代、下婢の輩皆お歸宅を待懸け居れり。

陪從なる小僧は汁粉屋を出でて、幾度もお辭儀をなし、

「御隠居様難有う存じます。へい、何とも申されませぬ甘いこつてございました。私はもうお汁粉さへ喰べられますれば、其上に何も出世するには及ばぬといふ豫ての覺悟でございますよ。へい、盆の養父入の時から今日が日まで思ひくすんで居りましたんで、實は其夢に見ます。え、大抵毎晩でさあ。何故と申しますと、へい、御隠居様、養父入の時戴きましたお小遣でもつて何より先きお汁粉をと存じましたつけが、まあそれは後々のお樂み、一番好いものが眞打といふので、先づ前座の鹽煎餅一錢が取着で、喉の乾いた處へ氷三杯。其から大福へ喰つて懸り、こいつを五ツとやつて歩行き乍ら豌豆豆、二錢。午飯を天井で茶漬つて、一幕立見とやつて、それから見世物を三ツ見て、歸りに蕎麥を二ツ。それからほつつきまして鮓を食べて、徐々暮合でございませうからお家へ歸りがけに唯今の汁粉屋の前で、さあこれからだ先づどきつく胸を落着けまし

て、五杯は確に食べるつもりで、蝦蟆口を開けて見ますと、何うでございませう。御隠居様、ああ、今思出して涙が出ます。へい、もうすつかり使つちまつて、五厘一ツと鏝二文しかないだらうぢやございせんか。私はもうく落膽して、其まゝ其處へ打倒れて寝てしまひたくなりました。それですもの、お汁粉といつちやあ命から二番目で、いまにおのれ年紀がいつたら小倉、鹽煎、御膳、田舎、お汁粉ならば何でもござれ、十二ヶ月を食倒してやりたいばかりに御奉公を大切にいたします。あゝ、旨かつた。何うもく難有うございました。御隠居様。」

老人は唯呆るゝばかり苦笑して聞きたりき。小僧はまた言を繼ぎ、少しく聲を密めつゝ、「旦那様の御陪從をいたしますと、劍突ばかりお食はせなすつて、お汁粉どころぢやございません。それに番頭さんなんと來た日にや、そりや何うも醋うございますよ。私がつい坐睡をいたしますと、彼奴！またお汁粉の夢を見て居ようから、流汗を擲つて來て嘗めさせろ、なんて千どんに云ふんですもの、邪慳ぢやアありませんか。戦が切れて痛いといへば冷えて疼むのだから焼けば癒る。焼火箸を突込めなんて、それはく恐しうございます。お奥のお三どんは掃除をする時そつと御隠居様のおとりなすつた爪を拾つてしまつといて、毎朝お茶の中へ一片づゝ入れて煎じますつてね。これを三度々々皆に飲ませたら、些少あ御隠居様に類似るだらうといふんださうです。」と眞面目に謂ふ。

「いやはや、大變だ。そんなものを飲せるかえ？薄汚え。」
老人はますく呆れぬ。

「なに汚いことがありますものか。犀角といふ薬は獸の角ださうですね。それから見りや御隠居様の爪の垢はよつぽど難有い。」

「悪く胡摩を磨るな。まだお汁粉が喰足りないのであらう。」

「恚語りつゝ行く間に、とある庫の前に出でたり。時に往來は淋しくなれり。小僧も饒舌り草臥けむ、しばらく無言になりて、其庫の角を左に曲り、其家の前に出でたるに、またもやさめく追儼の聲せり。」

「おや、御隠居様やつてますぜ。」小僧は立停まりてまた動かす。老人は持餘し、

「そら、お汁粉か。困つたものだ。」と呟くとたん、格子戸の内に豆を撒く音ばらくと礫の如く、「鬼者外！」

叫ぶや否や、身の丈六尺に餘りぬべき大漢の異形なるが赤裸のまゝ横ざまに轉び出でて、啊呀と避くる隙もなく、ドンと小僧に抵觸れり。

三

小僧の仰様に轉ぶと與に、異形の者は消失せたり。

老人は咄嗟の間に演ぜられたる一場の怪事に氣を奪はれ、きよろゝ四邊を見廻しけるに、何かは知らず落ちたるものあり。瞳を据ゑて熟く見れば、星明に輝きて、其もの金色の光を帯べり。手なる杖以て突試みるに、コトコトといふ響ありて、堅牢なること石の如し。一定怪物が落せしものと、老人は不氣味ながら、そと手をのべて拾ひつゝ、掌に載せて透し見れば、其長さ八寸ばかり、根は太くして先は尖れり。まはり三寸に餘りたる形獸の角に肖て、質は金屬に異ならざるが但少しく暖味あり。何様異様の珍物なれば、隠居は其まゝ懐中し、ほと呼吸をつきて、胸を撫でぬ。

數杵の鐘聲陰に籠りて此時萬籟寂然たり。折から老人のイむあたりへ朦朧として顯れたる一個の丈高き赤鬼あり。此の寒さにもかゝらず虎の皮の禪襦ならでは一絲懸けざる赤裸の手足は一面に朱を以て刷けるが如し。渠は遺失せしものを覓むる如く、蚤取眼を四方に配りて、うそく地上を漁りつゝ、やがて老人の間近に來りぬ。

誰かこれを見て驚かざらむ、少なくとも氣絶すべきに、蟲も殺さぬ老人の意外にも恐るゝ色無く、屹と睨附けて突立てり。

鬼は人ありと見て、前に進み、

「これ、人間殿、些ものが問ひたうござる。」 謂出でたる聲は破鐘の如くなれども、言は慇懃なるものなりき。

斯る時には「あい／＼何か用かえ。」と常には優しき老人なるが、いかにしけむ此時は、昂然として肩を上げ、

「何だ！聞きたいとは何事だ。」 意氣既に鬼神を呑めり。赤鬼は腰を低くし、

「え、外のこつてもござりませぬが、何ぞ此邊に落ちて居たものをお見懸けなさりはしませぬんだか。」

老人は己が懐中せる珍物の持主の、それかあらぬかを確めて、いよ／＼其獲品の眞價を知らむと、さあらぬ體に空惚けつ。

「は、あ、いや別にこれといふものも見なんだが、して汝の落したものは一體何だ。」

「其は……」と赤鬼は其天窓を撫で、

「ちつとも手懸がござりませぬので、はやもう途方に暮れまする。」

渠は力無き様なりき。

「はて其無くしたものは何だといふに。」

「へい／＼。」と唯天窓を搔く。

主客の勢、趣を變へて、老人は却りて尋問する位置に立ち、

「へいでは分らぬ。いやさ、何を遺失たといふに分らぬ奴だな！」

「角、……角を落しました。」と鬼は遂に打明しぬ。

「何だ！角を遺失たと。間拔だな。何うしてまたそんな鹿匆をやつたのだ。」

「え、此處の角屋敷で豆鐵砲を喰ひまして、慌てて遁出します拍子に、何でも此のあたりで何かに抵觸つて轉覆つたと存じましたが、眞闇三寶に駈出して、道で氣が着くと大事な角がなくなりました。此處いらに相違ないのでござりますが、何とお見懸けなさりませぬか。」

老人はいよ／＼其に極りたりと心密に喜びながら、

「む、而して其は金々と光つて居ような。」

こは手懸の出来たるぞと、鬼は大きに力を得つ。

「おつしやる通り金色の光があるのでござります。」

「いやに箔なんぞを置いてぴか／＼さした處なんぞ、擬物らしいが、何うだ。黄金の角なんてつひぞ畫に描いたこともない。」

「滅相な人間になにが分かるもんで。鬼影間でも黄金の角となると、ブツと位が可いのでさあ。」

「ふむ、して見ると銀のもあるな。」

「青いのもござります。青いのが黒くなります。それから銀になつて、それからでなければ黄金色にはなりません。」

「いかさまな。」とほく／＼頷く老人は、遺失主の確に渠なることを信じて今更にはあらず。其懷中せる靈物の一段貴重なるものなることを了せしなりき。

四

幽冥肉眼の得て物色ふべからざる悪鬼の世に出でたるは既に奇なり。其鬼の處女の如きも亦奇なり。然れども優愛彼の如き老人が一朝梟慾無慈悲の小人となれることの更に奇なるには如かざるなり。讀者は渠が鬼の角を拾ひて、これを我が所有としたりしを忘れざるべし。

鬼は老人の口振に因りて少なくとも角の所在を知れるを信じ、早くこれを取返さむと、ますます己を謙れり。

「え、何卒御手にございますならお返し下さいまし、それとも在る處を御存じならお教へ下さる様に願ひます。」

「そんなものは知らないね。」と老人は横を向きぬ。

餘り意外なる返答に鬼はこれを眞とせざりき。

「御申戯おつしやりますな。」

「知らないよ。」

「もし、申戯ではござりません。」

「はい、申戯ではござりません。」

「こりや驚いた。」鬼は老人を瞻りぬ。老人は空嘯き、

「此方も驚く。知りもしないものを、汝飛んだ言懸をしやあがる。」

と逆捻を啖はしたり。

「唯知らないぢやあ分りません。」

「否、知らないから分りません。」

無法極まる言分に赤鬼は嚇となり、煙の如き呼吸を吐き、眼を瞋らし、牙を噛み、擱懸らむず氣勢なりしが、忽ち夜叉の相好崩れて、

「汝！憎い因業親仁、唯一口と思ふあとから、何だか無暗に不便になつて、爪もあてられねえ。

はて、面妖な。何うしたのだ。え、堪らなく氣が弱くなつたぞ。む、口惜い。」と悄乎して自

から其心を怪む如し。此方は彌増しに強くなりて、

「む、口惜くば喰ひ着け。年こそよつたれ、腕は確だ、さあ來い。」

と鬼にも組まむず元氣なり。鬼はますく、悄氣返り、
 「何うもく我慢にも力が出せねえ。はて、左様な因業をおつしやらすに、戻して下され、後生でござる。」と老人の袂に縋れば、「え、つくなく」と振拂はれ、なほ懲すまに取縋るを、老人はあられなくも肱に懸けて突飛ばせば、鬼はたじくと踰踏きて、思はず小僧に躓きたるが、活の法にや協ひけむ。先前より其處に打倒れて、呼吸絶えたりし長松は、うむと一聲蘇生り、死なざりし以前怪物に抵觸られし時の驚駭をこゝにいひ顯さむとなすかの如く、わつと叫びて飛起きしが、唯見れば凄まじき赤鬼の己が傍に立てるにぞ、更に啊呀と絶叫して、隱居の腰にしがみつき、「お助け〜。」と齒の根も合はず。

然るに小僧が豫て經驗上佛と信じて、鬼の手より救はれなむと、頼の綱を投懸けたる、隱居の心は鬼なりき。
 「え、！煩惱な、此小僧め。」

其横面を張飛ばせば小僧は痛さに目眩めきてまたもや大地に伏轉び、あ痛あ痛と呻く處を土足に懸けて蹴飛ばされ、小僧は咽喉も裂けむすばかりに足手を悶えて號泣せり。鬼は慌てて抱上げ、「お、可哀相に泣くな〜。」

其背を撫でて勦りつ、老人の強慾なる、いかに哀願すればとても、角を返さむ氣色の無きに、今ははや斷念けむ、怨めしげなる顔色にて老人を瞻りつ、

「汝人非人、未はい、ことがあるまいから、左様思へ！さアらばだア。」
 最物凄き音調以て、謂ふかと思れば姿は無し、吹消す如く失せたりき。

蟬の鳶に攫はれたる、其時の心地いかと我身に知るは小僧なるべし。渠は隱居に蹴飛ばされ、剩へ鬼の手に捉へられつ。痛さ、悲しさ、恐しさに、聲も得立てで足搔くうち、其身は紙鳶に化したる如く踏躓ふべき足懸もなく、ふわ〜と宙を差して、行方も分かず舞揚り、下界遙かになりけるにぞ、後の危難はともかくも、今落されては微塵にならむと、鬼の腰にしつかと縋り、後は野となれ山となれ、眼を瞑りつ、行くほどに、海越え、山越え、谷越えて、鬼は其棲家なる怪雲洞にぞ着きにける。

五

「毘舍闍、今戻つた。おい、開けてくれ。」
 外に立ちて音信るゝは、角を遺失せし赤鬼にて、渠が名は鳩槃荼といふ。毘舍闍といふは妻の名なり。

「應。」答ふる聲は毘舍闍なるべし。婦人に似げなき裸體にて、腰に豹の皮を絡へるが、鐵の門を

引開けつゝ、

「おゝ、旦那殿お歸か。」

紙燭を照して出迎へぬ。

「つい用があつて、手間取つて、存じの外遅くなつた。眠かつたらうに堪忍しな。」

「恠謂ひつゝ、鳩槃茶は、小僧長松を背後に庇ひて、毘舍闍の後より門に入れり。女鬼は不圖立降りて、頻に鼻をひこつかせ、

「あれ何だか人臭い、はてなあ、お前は何うだえ？」

持てる紙燭を振照して、彼方此方を見廻せり。鳩槃茶は素知らぬ顔にて、

「そりや主が氣の故だ。閻魔の廳から先觸も來ねえのに、今時誰が來るものだ。」とさあらぬ狀に紛らせども、毘舍闍は更に肯入れず、

「いゝやよ、確に人臭い。しかも生々しい匂だによ。こりや何うも男の兒だ。」

小僧は此聲を聞くと齊しく、ぶる／＼と震上り、口の裡にて、

「南無お地藏様々々。」

星を指したる毘舍闍の言に、今は隠すも詮なしと、鳩槃茶は打明かして、小僧を連歸りたることのみを語り、己が角を失ひしことは、さすがに恥ぢて謂ひも出でず、唯其小僧を己が家に養ひ

置く旨を告げぬ。其食ふべからざるよしを聞きて、毘舍闍はさも本意な氣に、

「お土産かと思つたら食客かい。物氣の高いに迷惑なれど、今夜は常に無くお前様が、(眠かつたらうに氣の毒だ。)なんて、優しくいつておくれたから、あい、私も謂ふこと聞きませう。これこそな小僧さん、大事な此方へ入りや。」

先づ生命には別條無しと、小僧は俄に元氣づき、ちよ／＼と走り出でて、毘舍闍の前に叩頭し、

「へい、御新造さん今晚は。はじめましてお目に懸りまする。へい、つい御勝手を心得ませんもんですから、失禮をいたしました。」

愛嬌よく挨拶すれば、

「飛んだ氣輕な小僧だの。」と夫婦齊しく打笑ひ、其ま、内に伴ひたり。

鳩槃茶どつかと胡坐を搔き、

「あゝ！滅法界草臥れた。さてと留守に何もかはりは無しか。而して誰も來なかつたか。」

「先刻閻魔様からお使でね。明日は新入が一人あるから其目算で居ると、報知て來ました。こりや美しい婦人ださうだが、嫉妬で狂死をしたんだとさ。例に因つて若い者が、表の庭で、今夜夜通火を熾して、來たら直ぐ火責にしようといふので、折角支度をして居るが、お前まあゆつくり